
理論屋転生記

アロハ座長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理論屋転生記

【Nコード】

N3814Y

【作者名】

アロハ座長

【あらすじ】

俺は、私になる。

交通事故でこの世を去った俺は、転生後の異世界でモラト・リリフイムという領地の領主の娘・セフィリア・ジルコニアとして生まれ変わる。

文化レベルは、現代以下。中世ヨーロッパを思わせる町並み、それでいて、植生は俺の知るのとほぼ一緒。

そんな世界で、俺は生前は得られなかった両親の愛を受けていたが、そんな日々は長くは続かなかった。

多分ほのぼの、でも時々重たい。そんな大陸改革ファンタジーで
お送りします。

事故死から始まる（前書き）

序章その一、主人公が死にます

事故死から始まる

俺は、今日の前から強烈な光を受けている。夜の雨の中、傘を差して渡った横断歩道に突っ込んできた白い光。

白い光――を大型のトラックと認識した時、俺の身体はあらぬ方向にねじ曲がり口と鼻に鉄錆味の体液と咽返る《むせかえる》胃酸の混ざった物が広がる。

（――ああ、俺。明日から小学校に行くのに）

童顔、低身長 of 俺。別に小学生じゃない。これでも社会人だ。

苦勞して、本当に苦勞して取った教員免許と一冊の参考書が擦り切れるほど勉強した教員試験。

その結果手に入れた小学校の先生という夢は、大型トラックによって潰された。

（ああ、なんでこんな人生かな？ 俺は、もっと生きたかったのに、やりたいこと有ったのに、もう一度生まれ変わればな）

そう思いながら、再び吐血する。確実に内臓をやられたようだ。雨に打たれる身体からは、徐々に体温が抜け落ちるのを感じる。

俺は、そこで諦めたように目を瞑る。

すっ、と背中が引かれるように意識が闇の中に落ちる。

暗い暗い闇の中、そっちに会ってみたい人たちがいるのだ。

事故死から始まる（後書き）

はじめまして、アロハ座長です。
拙い文章ですが、どうぞよろしく願います。

この世界に生まれ落ちる（前書き）

序章その二、転生します

この世界に生まれ落ちる

引かれる引かれる、落ちる落ちる。

暗い暗い闇の中を落ちていくと、俺は、水の中に落ちる感覚を得る。とぼんつ、と優しく滑り落ちるように。

それからは、本当に穏やかなものだ。海のように激しい波はない。時折誰かの話声が聞こえるが、水に反響して聞き取れない。それでも俺は、今まで失ったものが手に入った気がした。

ただ、穏やか過ぎてやる事が無い。俺は、今ここで自己紹介をしようと思う。

俺の名前は、梶子・東里。くちなし・とうり小学校の教師予定者だった。

俺の物ごころは、孤児院に始まる。つまり身寄りのない子どもだった。両親は、二歳の時火事に巻き込まれ、亡くなったらしい。父親は全身火傷、母親は火傷と感染症の悪化で亡くなったらしい。

孤児院での生活は、悪くなかった。同年代や年上、年下が遊び相手になっていたし、園長や先生たちも笑顔だった。ただ年を取れば、子どもたちとの距離を保ちたいと思うだろう。そんな時、マンガな

どがあれば良かったのだが、有ったのが、歴史や農業、工業、雑学、江戸の文化、果ては将棋の指南書といった統一性のない本を片っ端から読んだ。

園長曰く「知識は本から受ければ早い。昔の入園者の中に農業と工業を学んだ奴の置き土産だ。将棋に勝ったら欲しい本を買ってやる」というのだ。別にハングリー精神はないが、おもちゃなどが小さい子に優先していたので必然的に本が残り、難しい本まで読んで将棋を園長に挑んだりもした。

結果は、一度も勝てなかった。ただ周り、学校には俺以上に強い奴はいないし、勉強も色んな本を読んだお陰でかなり良い成績を取っていた。

中学、高校とバイトで学費を補填しながら孤児院の家事などを行ったり、時にはチビどもに手伝わせて園内の一角に家庭菜園を作ったりもした。大きくなれば移動距離も広くなり、学校や市の図書館で本を借りたした。

このとき読んだ本の種類は本当に雑食で、哲学書から歴史書、伝記、ファンタジー、図鑑、と色々。マンガも少々読んだりもしたが、読んだマンガは同年代の読むような少年マンガとはかけ離れたもので、農業学校の話や医療マンガ、他にも図解でわかる科学技術マンガ、料理マンガのようなものだ。

料理マンガのレシピそのまま書き写して、チビどもと作ったことは、良い思い出である。

そんな感じで忙しいが充実した生活を送った。

大学の頃には、孤児院を出て一人暮らししながら学生支援機構とバイトを使って生活していた。

そして教員免許を手に入れ、小学校教師として人生を歩む予定だったのだが。

ああ、悔やまれる。夢だった公務員。安定の生活が、と苛立ち紛れにこの水の中で暴れてみる。しかし、身体は僅かに水を掻き分ける程度だった。すると、外の話声に驚きの色が混じる。これは大人しくしていた方がよさそうだ。俺もこの穏やかさは失いたくない。

少し俺について語ったら疲れてきた。だんだん眠気が襲ってくる。俺は、少しの間眠りに着かせて貰う。お休み

.....

.....

：

「おぎゃあ、おぎゃあ」

「~~~~~!」

俺は、水の中から追い出され、空気を一杯に吸う。ついに、長い水の中を乗り越えて俺は天国に辿り着いたのだな、と思ったが、目が開かない。

（俺は、天国にやっと来たのか、死んだ両親に会いたいな）

と呟けば、どこからか赤ん坊の泣き声が聞こえる。

天国にも赤ん坊がいるのか、早く死んでしまつて可哀そうになど
と思っているが、赤ん坊の存在はとても近く感じる。

「ああ、生まれた。私の可愛い子」

「生まれた。やった初めての子どもだ!」

近くで男女の声が聞こえる。

（生まれた？ 死んだの間違いじゃ？ どうなっているのだ？）

俺の声に呼応するように赤ん坊が泣き叫ぶ。何とか重い瞼を押し上げ、ぼやける視界で周囲を見る。

俺を抱きかかえるのは、白いエプロンをした女性。しかし、声の主はこの人ではない。

俺の頭が傾けられ、声の主二人を見ることが叶う。

一人は、ナイスミドルな男性。赤いタキシードみたいな服を着て、小さな顎髭と優しいような赤い瞳がこちらを見る。

もう一人は、色白で金の髪を持つ女性。とても疲れ切った表情をしているが、男性同様に優しい青の瞳を向けてくる。

「私の可愛い子ども。顔を良く見せて」

「この顔は、君に似てさぞ美人になるだろう」

「いいえ、目はあなたそっくり。とても意思の強い子に育つわ」

二人は俺に向かって仲睦まじい会話をしている。

そして気がついた――俺が赤ん坊だったことに。

俺は、あらん限りの声で叫んだ。今の状況に対する歓喜なのか、転生なんてありえない状況に対する発狂なのか、それとも、この幼いからだの空腹を伝えるためののか。

二度目の人生は、こうして始まった。

領主の娘セフィリア・ジルコニア（前書き）

本編まだまだです。ごめんなさい

領主の娘セフィリア・ジルコニア

俺は、生まれ変わった。

そして、今年で五歳になる。

「セフィリア様！ セフィリア様はどちらに！ ジークフル！ そちらは」

「いいえ、キリコ！ 全くセフィリア様はあんちゃが好きで」

俺を必死に探しまわっているのは、俺の、いや、もう私と言うべきだろう。

改めて、私の家の従者。中年女性の方は、侍女長を務めるキリコ・デーテルテイラーさん。初老の男性の方は、執事長を務めるジークフル・ムルムトフさん。二人とも私のお父様を慕ってこの家に仕えている。

そして私は、追っ手の彼らを振り切り、お父様の保有する蔵書をこっそりを覗くのが日課なのだ。

「辞書を持って、うん。誰もいない」

お父様から頂いた辞書を使って、蔵書を端から読む。言葉を交わせるのだが、文字体系は、前の世界と全く違う。日本語でも英語でも、ドイツでもフランスでも、サンスクリットでもない。全く知らない言語。それなのになぜ聞き取れるのかにはいくつか推測しているが、もっとも可能性が高いのは、母体の中にいる時、聞いていた言葉から言語を自然と理解したのだろうという説だ。両親ともに私がお腹の中にいる時、良く話掛けてくれた。そして、生まれた後も良く発育するようによく話掛けてくれた。そのお陰で、言葉は流暢になったと思う。

「はぁ、私。既に出来ることはしたくない」

言葉遣いが私、と丁寧になったのもこの半年の賜物。周りの人間に怪しまれないように出来るだけお母様の言葉遣いを真似した結果だ。ただ、時々大人びていると思われるので、こうしたやんちゃもしでかす。

「ええっと、前読んだのは【グレートリア王国の歴史】の近代あたりだったよね」

そう言いながら、重い羊皮紙の本を引っ張り出し膝の上に広げる。片方の手で歴史書。もう片方の手で辞書を使い、分からない文字や曖昧な表現を一つ一つ調べる。これが意外と面白い。辞書は分かりやすいように書いてあるが、辞書の説明にも分からない意味の単語

がある。更に調べ……と芋蔓式に分からない単語が出てくる。

「えっと『近年のグラードリア王国は、中央の王都と二十四の領地に分かれ、東側に六つ、南側に六、西側十二にと分かれ、北にエラヴェール皇国が存在している。エラヴェール皇国との関係は概ね良好であり、互いに不可侵条約を結んでいる、と』たしか、私のいるモラト・リリフィムの領地は、東側にあるのよね」

この歴史書を少しずつ読み説いて分かったのは、この世界は異世界であるということだ。歴史書の最初のページにある測量もままならない大陸東側の地図は見たことが無い。更に、文化レベルも中世ヨーロッパレベルだろう。前に見た見た酪農の本は、宗教本では無いかと思うような内容で、『神の恵み』などの単語を乱用した経験則に基づく初歩的な農業だった。

「グラードリア王国の歴史は、五百年続いて、教会と共に発展したのね。でも、この本って十年以上前の本だから変わったかもしれない」

本の最後の日付を確認して溜息を洩らす。

現代のように、即時で情報が入ってくることに慣れ過ぎているように感じる。だが、温故知新、古い話、特にグラードリア王国建国までの英雄記や軍略の本は、今までになく新鮮で私の心を擽る。

「次はなんの本を読もうかしら、そうだ！ 船乗りの航海日誌があった」

「セフィリア様！ 見つけましたぞ！ またダイナモ様の書齋に忍び込んで」

ジームフルに見つかってしまった！ 書齋の入口を塞ぐように立たれて逃げ場が無い。

「今日という今日は、逃がしませぬぞ！」

「ジーク？ 私、お勉強しているよ。お父様の書齋の本は、お父様が領主になるために読んだ本だもの。領主になるには必要でしょ？」

「それとは別で、淑女となるために覚えて頂く知識もございます」

「私、華やかな貴族。嫌い」

そう言って、子供っぽくジークフルに対してそっぽを向く。

「あらあら、セフィリアは、お父様が大好きね。私、妬いてしまえますわ」

入口からずっと現れた金髪に薄いピンク色の服を着た美女は、頬に手を当てて、あらあらと優しい頬笑みを浮かべている。そう言つて膝元に駆け寄れば、抱き上げてくれる。

「お母様！ 私、お母様も大好き」

「私も大好きよ。でも、女の子はもっとお淑やかじゃないといけな
いわ」

「私、お父様みたいになる！ だってお父様、カッコいいんだもの」

「ふふふ、そうね。じゃあ、淑女のお勉強はやめにしましょうか」

「お、奥様。そう甘やかして貰っては困ります」

ジークフルが困った表情を作る。その時、この館——というよりも小さな城——の中にベルの音が鳴る。

「あっ！ お父様だ！」

「あっ、待ちなさい！」

お母様の腕の中から飛び降りて書斎の入口へと走るが、一度振り返り、取り出した本を片づけるか迷う。

「はぁ。仕方がありません。本は私が片づけます。奥様とセフィ
リア様は、お出迎えしてください」

そう言われて私は、元気に駆けて行った。

入口には、赤を基調としたタキシードを着た男性が侍女長と数名の侍女たちに出向かれる。

「お父様！」

「セフィリア！」

駆けつけ、お母様と同様抱きかかえられる。後から駆け付けたお母様は、笑顔でお父様を出迎える。

「お帰りなさい、ダイナモ」

「ただいま、愛しのリリィー」

そのまま、私を挟んで二人は、頬にキスをし合う。本当に仲睦まじいことだ。

領主のダイナモ・ジルコニア——このモラト・リリフィムの領主で広い農地を持つ。そして、特徴として別に裕福じゃない。なぜ？それは税収の多くを民に還元しているためだ。現代で言う社会保障制度を確立しようとしているようだ。そのために、貴族の伯爵という爵位三位であっても他の貴族より清貧で暮らしている。

執事や侍女もお父様と縁のある人たちで、お父様は縁や民を大切にするために領民に慕われている。

領主の妻リリィー・ジルコニア——貴族の妻は貴族。が常な西側、王都貴族と違いお母様は、農家の娘らしい。それでもお母様の立ち

振る舞いはとても落ち着いていて、この世界の淑女の理想像だと思っ
てしまうほどだ。

お母様は、貴族の妻という立場にも関わらず家事などをこなす。
また統治のための仕事も行っている。

私は、前世で元々持っていなかった両親の愛を今の生で手に入れた。
た。

「ああ、愛しいセフィリア。今日は何をしたんだい？」

「書斎で本を読んでいました。他にもお庭に野菜を作る準備を一人
でしたのです」

「そうか、そうか。今日も良い日なんだな」

「はい」

「もう、セフィリアは、農家の血筋をちゃんと引いているのね」

家族団欒の光景。いつか、諦めた光景が今ここにある。

それだけで私は幸せだった。

領主の娘セフィリア・ジルコニア（後書き）

初期設定の年齢を三歳から五歳に変えました。以降、五歳から進行していきます。

セフィリア嬢の一日（前書き）

精神年齢二十代後半だが、五歳のセフィリア。
彼女が現代知識を伝えても信じて貰えないと考えたので、説明する
ため実験、資料集めの日々。

セフィリア嬢の一日

私の朝は、早い。

侍女の一人が定時に起こしてくれるので、それと共に目を覚まし、食事前に家庭菜園に水を上げる。

家庭菜園内容は、トマトだが、実際の目的はトマトの成長記録を取るからだ。

菜園には、幾つかのブロックで仕切られている。それぞれの土には、全く別の物がある。

一つには、キリコさんの作った有機肥料（ただの野菜の皮などの生ごみ）を使用した畑。宗教的な物で畑で採れた恵みは、天ではなく地に帰すのだ。ということとで城の一角の穴にいられたのを貫った。最初は、キリコさんは、慌てて近付かないようにと言うが、私はこの生ごみ肥料の価値を知っているので引くわけにはいかなかった。なんとしても貰い受けたのだ。

一つには、もっとも近い農村の森の土。お父様に無理に行って着いて行って見つけた森の土は、案の定、柔らかくふわふわな土。微生物や虫などの働きによって分解された腐葉土は、養分を吸い尽くして不作の続ける畑の土と交換すれば、また良い食べ物とれるだ

ろう。

他、竈の灰、酪農で持ってきた鶏糞、そしてそれらを全て混ぜたパターンと何もしないそのままの畑を石と立て札で仕分けている。

「うん。大きくなっている。一番大きいのは全部混ぜたものだね。お母様とお父様の驚く顔が早くみたいわ」

ふふふっ、と可愛らしく笑ってしまう。大分女の子が板に着いてきたみたいだ。

「セフィリア様、こちらにいらしたのですか。大分背丈が高くなりましたね」

「うん、ジーク。トマトの背の高さを測って貰える」

「分かりました。後で測りましょう。ですが、その前に朝食です。奥様や侍女たちがお待ちですよ」

「はい」

私は、手を洗い、食卓へと向かう。既に集まった皆は、私を見つけてほほ笑んでくれる。

「お母様、遅くなりました」

「セフィリア、またトマト？ 大好きなのね。お父様みたいな真っ赤な瞳を持っているからかしら」

「からかわないでください。お母様」

そう言って、私達は、全員で食事を取る。これがジルコニア家の風景。庶民と貴族の距離が近いために見れる珍しい光景。料理は、酪農、畜産、農業が中心の地域らしくバランスの良い食事が並んでいる。ソーセージ、チーズ、牛乳、パン、人参……と一人分の食事。全員残さないためだ。だって、領民の努力の結晶を捨てるのなら最初から盛らない。他の貴族たちはどうだかは知らないが。

「大地の恵みに感謝を、さあ、食べましょう」

お母様の一言で皆が楽しく談笑しながら食べ始める。今日の仕事の話、家族の話、街で見たことの話、領主であるお父様の活躍、お母様の結婚前の生活、などを聞きながらの生活は毎日楽しみだ。

「お母様、お父様はまたお出かけになられたの？」

「そうよ。今度は三日ほど遠くの村に行って畑の様子を見ているの」「そうですよ」

敬愛し、尊敬するお父様と会えないのは寂しい。そして、それと同時に、私にも何か他に出来ないことはないか再び考えることにした。

目の前の料理を見ても出来ることは有る。まずは、料理の内容――

―創意工夫の後の無いシンプルさ、周囲の食事は似た感じで、王都の貴族たちは、家畜の丸焼きなどという豪快で無駄な食べ方をして、いる程に料理に関して無頓着だ。塩はある、胡椒はある、なのにここには他の調味料が無いのだ。豆があるのだから、味噌や醤油が欲しくなるのは、日本人だったので仕方が無い。

他にも、食べ物、主に薄味か塩味が多い。つまり、甘い味と辛い味が少ない。理由としては、砂糖と唐辛子などのスパイスが貴重品ということだ。いつか、サトウキビや唐辛子を栽培し、砂糖と唐辛子を流通させて食事を豊かにしたい。

「御馳走様でした」

私は、その考えをすぐに部屋に帰って貰った日誌に詳細にそして誰にも分からないように、日本語で書き遺す。ちよつとしたスパイ気分を味わえて楽しい。お父様やジークフル達も時々理解できない文字や言葉を使って会話していることから情報管理のシステムはしっかりしており、そこからヒントを得た遊びだ。

午前中はジークフルと一緒に菜園の記録計測とお世話、午後は書斎で本を読む。最近では、辞書を開く機会が減ってきた。

ああ、忙しく充実した毎日。私が領主と一緒にこの領地を巡るのが待ち遠しい。

セフィリア嬢の一日（後書き）

短いです。ごめんなさい。ノリと勢いだけで書き上げています。プロットはあるんです。

領主・ダイナモ・ジルコニア（前書き）

別に領主の紹介じゃありません。

領主・ダイナモ・ジルコニア

私は、モラト・リリフィムを預かる領主・ダイナモ・ジルコニアだ。

このモラト・リリフィムはグラードリア王国の食糧庫と呼ばれているが、領民の実情は厳しい。中央には小麦を送り、自分達は、安い雑穀を食べて生計を立てている。白パンなんて夢。実情は硬い黒パンだ。更に、近年は、農作物が不作であり、その原因を調べるために私はここより一日ほど掛かる農村へと足を運んでいた。

村人や村長とは、顔見知りであり、快く出迎えてくれる。この村も不作で悩まされている。

「領主様、ようこそいらっしゃいました」

「ジム村長、ごきげんよう。今日は、農作物の状態を見に来ました。どうですか？」

「それが……あまり良い状態ではありませんな。畑を休ませて翌年の実りに期待したいのですが、そうすれば、我々の食が危うい。仕方が無く作っている状態です」

「やはりこの村も芳しくない様子ですね。来年か再来年には予算を組んで、各農村の休作地を増やせるように穀物を輸入します」

「ありがたいことです。ささ、立ち話もあれですから中に」

私は村長宅にお邪魔になる。村長家族にも出迎えられ私は、頬が

綻ぶ。それからは、家畜の様子などを詳しく聞いていた。

「大分話しましたが、やはり明確な解決策はありませんね」

「はい、そう言えば、領主様の御息女は、もう五歳になられたのでしたね」

「ええ、毎日飽きずに、トマトと本とで睨めっこです。少し女子としての自覚が薄いんですね」

「それは、領主様に憧れているからでしょう。私の息子も小さい頃は私の背中を追いかけて、持てない鍬を持って背伸びをしたものです」

「初めての子どもで驚かされてばかりです。言葉の覚えが遅いので心配したのですが、急に本を読みたいと言ったので童話を渡せば、辞書が欲しいと言い、近くの村に行けば、畑と森の土、そして動物達の通った後を追いかける。でも友達もできました。ラムル村の村長の娘・ダリアです」

「そうですか、面識があります。二人並べばさぞ微笑ましいでしょう」

そうジム村長は言うが、セフィリアの瞳は確かに楽しそうだった。帰り際には、別れを惜しんだダリアを抱き締め、宥めるなど子どもらしからぬ行動には毎度驚かされる。更に驚いたのは、乾いた鶏の糞と森の土を持って帰りたいとお願いしてくる。そんなものの何に必要なのか分からなかったが、娘のお願いを聞いてそれぞれ麻袋を計十個は持って帰ったと思う。

「悩みとしては、その村で娘は、森の土や鶏の糞を持って帰りたいと言いました。可愛い娘の頼みなので聞きましたか……」

「教会の教えですか？ 我々農民にとっては、どうでもいい物です。」

ですが信じている者もおられます」

教会の教え、の一つに蠅は不浄な存在とし、王家の紋章の兜や三大貴族の共通紋章の二股の矛などは、神聖な物とする考えだ。農民にとっては、五穀豊穡を司る蠅は、不浄ではないながらも、決して近付きたくない虫ではある。セフィリアは、子どもながらにそう言った知識が無いのだからそう言うのだと思う。

「まあ、実際に蠅は死神とする教会だが、事象が逆だと思うのだよ。人が死ぬから蠅がたかる」

「そのあたりは私は学のない農民。しかし、死神とは大仰な。と思いますよ」

そう言って私達は、色々な話をした。村長の子育ての体験談、野生の蜜蜂からはやはり蜂蜜が取るのが危険なこと、森の猟師の話によると森の実りである木イチゴがおいしいこと、最北の村長が貧しいと呟いていたことなど、多くの事を聞いた。

ああ、この話をセフィリアにしてやれば、どれほど目を輝かせるのか、今から楽しみで仕方が無い。

領主・ダイナモ・ジルコニア（後書き）

割と早いペースで書いてるつもりですが、そのうち失速するかもしれません。

ラムル村の娘・ダリア（前書き）

セフィリアとダリアの出会いです。ダリア視点で描きます。

ラムル村の娘・ダリア

私は、ダリア。ラムル村の村長の娘だが、上には三人の兄と二人の姉がいる。そして村の中には、私と同年代の子はあまりいない。六歳になる私はいつもそれより小さい子どもたちと一緒に扱われる。

お姉さんになりたいわけじゃないけど、対等に話したい。私はそんな思いを持っている時、一人の女の子が現れた。

「ダリア。こちらは、領主様の娘でセフィリア様だよ。仲良くしておやり」

「はじめまして、セフィリア・ジルコニアです」

「わ、私、ダリア、ダリア・ルル、です」

驚いた。あまりに綺麗で柔らかそうな金髪と白い肌に圧倒されてしまっ言葉が上手く出なかった。

「ダリアちゃん、私とお友達になってくれるかな？」

「はい、セフィリア様」

そう言うと、なぜかセフィリア様は不満そうな顔をする。

「様は、つけないで、ダリアちゃん。言いづらいでしょ？」

「でも、領主様の娘だし」

「でも、お友達よ。お友達同士で様付けはなしよ」

「じゃあ、フィリア、ちゃん」

その瞬間、ぱっと表情が明るく、そして赤くなる。

「わ、私、初めての友達に、あだ名で呼ばれちゃった」

可愛らしいフィリアちゃんは、恥ずかしそうにはにかむ。そして自分と同じ対等な子がいなかったことを知る。

「ねえ、あっちに行こう。お父様たちがお話している間に村を見せて」

「分かった。あっちが畑で、あっちが山、危ないから一人じゃ入っちゃ駄目だって、こっちは牛さんと豚さん、あっちの建物には、鶏さんがいるの」

「そうなんだ。他にも、野菜は何を作っているの？」

「人参や大豆を作ってるよ。毎年別の場所に植えるんだって。あそこの空き地は、去年は小麦だったよ」

それから私の話を食い入るように聞くフィリアちゃん。今までこんなに質問されたことが無かったので、嬉しくなる。逆に私もフィリアちゃんに何をしているのか尋ねれば、いつもは本を読んでいるようだ。私は、本は読めないと言ったら、いくつもの童話を話して

くれた。

お姫様が王子様のキスで幸せになるお話、カエルになった王子様が元に戻りお姫様と幸せになるお話、悪い魔法使いを倒す双子のお話、他にもいっぱいのお話を教わった。

私は、お父さんに魔法は危ない物。という風に教わっていたけど、フィリアちゃんのお話は、魔法だ。最後は幸せになっている。きっと、フィリアちゃんは、幸せの魔法を使えるんだ。だって私をこんなに楽しい気持ちにさせてくれるのだから。

そうして、時間が過ぎた。

「フィリアちゃん！ 行かないで」

「大丈夫、大丈夫だよ、ダリアちゃん。私はまたここに来る。大丈夫。お父様が来たときお手紙を渡してくれれば、私も返事を返すわ」

「私、文字書けない！ 無理だよ」

「大丈夫。少しずつお勉強すれば、いつかできる。お手紙で楽しいことを書いて、それを読めばきっと上手になる」

「うん。分かった。フィリアちゃんのお話読めるように頑張る」

「うん、ダリアちゃんは、頑張り屋さん」

そう言って頭を撫でてくれる。ああ、また幸せになる。

それから、フィリアちゃんと領主様、お付きの騎士様たちは、馬車にいくつもの麻袋を積んで、去っていく。私は、それをいつまでも見送った。

お手紙書けるように頑張ろう。村のオババならもしかしたら読めるかもしれない。

ラムル村の娘・ダリア（後書き）

思いつきでお友達のエピソードを書いてしまいました。序章が長くなってしまいます。

最初の収穫と子どもながらの創作（前書き）

他領主とその御子息が登場します。

そして、この世界って、特許があるんです。特許料があるらしいです。

最初の収穫と子どもがらの創作

セフィリア・ジルコニアは、五歳になり、最近はお父様を中心とする人たちの関係が分かってきた。

執事長のジークフルさんは、実はお父様の秘書の役目や情報を総合管理している人だ。また税収の管理は、お母様率いる侍女隊、各街や村の役人が受け持っている。そして、領民に対しての実働部隊として騎士という職業の人たちがいる。徹底した分割システムだった。

彼らは、領主専属の軍人で一般に下級の貴族たちで構成されている。他にも、下級の貴族である男爵・子爵位の貴族たちは街の役人や軍人、衛兵など様々は職の中心にいます。そして、お父様はそれでも人が足りないということで、領民の中から優秀な人に適した職を与えているそうです。

貴族と領民が同じ役職をして互いに反発しないのか？ ですって、始めの内はあったようですが、領民と貴族の距離が近いので、次第に認め合って仕事を円滑に進めているそうです。

そして、今日は、更に枠組みを広くして、他の領主の方が我が屋敷に尋ねてきました。

「お久しぶりです。ジルコニア伯爵」

「ああ、久しぶりですね。ランドルス侯爵。娘が生まれる前で、六年前の王都のパーティーでしたかな？」

「そうですね。私も息子が生まれ最近は大忙しでしたが少し休みが持てたので、息子連れてこちらに来ました」

そして、彼、ランドルス侯爵の足元。私と同じくらいの背の男の子が前に出る。

「はじめまして、僕は、東のジュブトル領のランドルス伯爵が息子・キュピル・ランドルス。以後お見知りおきを」

丁寧に優雅な挨拶。相当貴族のマナーに対しての指導を受けたのだろう。私は、今日のような日のために仕立て上げられたドレスの端を軽く摘まんで挨拶する。

「はじめまして、私は、モラト・リリフィム領のジルコニア伯爵が娘・セフィリア・ジルコニアです。以後お見知りおきを」

「ははは、子ども同士で硬い挨拶は無しにして遊んできなさい」

「そうだな、セフィリア。キュピルくんを案内してあえなさい」

「はい、お父様」

私は、まず、庭に案内する。お母様や侍女たちが丁寧に育てた花壇がある。

「こっちがお庭です。キュピルくん」

「はい、セフィリア嬢」

私の案内に対してまだ硬い態度だ。

「キュピルくん、私に対してそんな態度は要らないわ。もっと呼びやすい呼び方をして」

「じゃあ、セフィー。で良い？」

「うん、セフィー。気に入ったわ！」

「セフィー。気になったことがあるんだけど、聞いて良い？」

そう言うキュピルくんは、私の家庭菜園を指さす。

「あれだけ、花と違うみたいだけどあれは何？」

「あれはトマトの樹よ。赤くて甘い野菜」

「へえ、トマトってあんな風に出来るんだ」

いかにも貴族、な台詞を呟くキュピルの手を引き私の菜園を招き入れる。青いトマトに真っ赤なトマト、その中間とたくさん実っている。

「へえ、トマトって元々青いのか。美味しそうだね」

既に私達の身長を超えたトマトは、

「取れたてだからきつと美味しいわ。少し早いけど、収穫してみましよう。ちょうど取りやすい所にトマトが四つある」

そう言って、赤いトマトを素手でもぎ取る。ぷつん、という感触と共に手の中にトマトが収まる。それを見たキュピルも真似をして一個とる。

私はもう一個取り、キュピルくんももう一個取り、互いに小さな両手で持っている。

「お父様たちに持って行きましょう」
「うん」

再びお父様たちの場所に駆け足で戻る。

「お父様、キュピルくんとトマトを取りました。食べてみてくださいさ
い」

「お父上、トマトは樹でなるのです。初めて知りました」

そう言って私達は持っているトマトを一つ渡す。

「これは、セフィリアが大切に育てたトマトだね。一番最初に私達が貰っても良いのかい？」

「ほほう、セフィリア嬢のトマトを見せて貰ったんだな。良かったな、キュピル。私も頂いて良いのかな？」

私達は元気よく首を縦に振る。

「「では、頂きます」」

一口齧りついた二人は、目を見開く。私の収穫したトマトは、【腐葉土＋鶏糞＋生ごみ肥料＋灰】と植物に必要な柔らかい土で窒素、燐酸、カリウムを補って作ったのだ。取れたてでこの世界のどのトマトよりも新鮮でおいしい自信があった。

「こんなトマトは、初めてだ。流石は、【グラードリア王国の食糧庫】というだけある。甘く、砂糖でも食べているようだ」

「本当にそうだ。私も長年、この領地の農作物の出来を見てきたが、ここまで凄いトマトは初めてだ」

私は、悪戯が成功した子どもの子どものように笑う。そして、キユピルくんと共に食べれば、本当においしい。生前食べたどのトマトより美味しく感じるのは、自分で手塩にかけて育てたからだろう。

「本当においしいね。セフィーは、凄いね。じゃあ、僕も【軍盤】を教えてあげる」

「ぐん、ばん？」

「駒を兵士に見立てて戦うんだ」

そう言って駆け出すキュピルくん。どうやら生前やっていた将棋のような物のようだ。久しくやっていなかったので、出来るかは分からない。

「持ってきたよ！ セフィーは、軍盤の遊び方って知っている？」

「ごめんなさい。初めて知りました」

「はははっ、当然だよ。武門の家ではごく一般的だが、普通の御令嬢は、軍盤すら知らないで生涯を終えることがある」

「懐かしいですね。私達も子どもたちの様子を観戦しますか？」

「良いですね。そうさせていただきましょう」

お父様たちはお父様たちで盛り上がりを見せる。私は、キュピルから軍盤の手ほどきを受けた。

「軍盤ってのはね。駒を軍に見立てた遊びで、駒は、王様、将軍二人、騎馬兵二人、重槍兵二人、斥候二人、魔法兵一人、使徒兵一人、弓兵、二人、歩兵が九人を持って互いに戦うんだ。動きは――」

私は、話を聞いた限り、将棋に近い物を感じた。王様を奪われれば負け。歩兵を同じ縦列に複数並べるのは禁止。成金などは最初から無く、初期の駒の動きは最初から広めである。最大の特徴としては、倒した駒は、扱えるが、奪ってから三手以内は使えない点。これは、捕虜はすぐに仲間にならないぞ。という意味があるらしい。

「じゃあ、始めよう。僕から先で良いね」
「うん」

私は、久々の将棋に心躍る。動かし方や駒の配置は似ている。ただ、魔法兵や使徒兵は、動きが変則的で一気に敵の陣地に入って早々に帰還できない点では、大きな決定打は無い。だが、私の戦略は堅牢な守り。的確に相手の駒を減らす。歩兵を囷に重槍兵を手に入れた、斥候で独立した歩兵、弓兵を奪う。

一つ、一つと駒が減った所で私は勝負に出る。

王が逃げれば、追いつめ、逃げ道を塞ぐ詰将棋。

軍盤に触れて今まで築いてきた子どもとしての体裁が綻び、その隙間から生前の自分が楽しんでいた。今思えば、大人げない。終わった時の周囲の顔に私は「しまった！」という気持ちが沸き起こる。

「これは凄い。到底五歳の子どもの打ち方ではない」
「セフィリア。どこでこんなやり方を覚えたんだい」

二人の眼が私をずっと見つめる。何とか取り繕わなければ。

「あの、その、お父様の書斎の『古今戦場陣形』と『ウラーリバー』

『ド戦役』では、攻めの陣形に対して硬い守りにより勝利を収めたのを記憶しています」

そうだ。これで大丈夫だ。ただ、二人はとても眼を見開いている。だが、忘れられた一人は今になって負けたことに気がついたのか声が上がる。

「セフィー。凄いよ！ もう一回。今度は負けないぞ！」

「分かったわ。やりましょう」

キュピルくんは、興奮気味で再び軍盤の駒を整える。途中、お父様たちがどこか別の部屋に行ってしまった後でも、私達は続けた。

彼が私に驚いたのと同時に、私も彼の戦略には驚かされっぱなしだ。変則的な手で攻めてきたり、魔法兵や使徒兵を単騎で突入させては、見事に自陣地に戻り、果ては私が前に使った陣形をそのまま真似て使う。まだまだ詰めが甘いがこれは将来は、私より強くなるだろう。

しかし、素人——ということになっている——である私に負け続けるキュピルくんの表情は、一戦ごとに興奮から涙目が変わっていた。

「も、もう一回！」

最終的には、悲痛な声色すら感じる。私も良心の呵責を覚え始めた。

「もうそろそろ止めて、お茶しない？ 喉が渴いた」

「じゃあ、その後もう一回」

やけくそ気味な雰囲気のカピルくんのお持ちをどこかに持って行けないものか。と考えて私は、あることを閃いた。

「セフィリア様、カピル様。お茶とお菓子でございます」

「ありがとう、ジーク。一つ頼んでも良いかしら？」

「なんでございましょう？」

「紙と軍略書と10のサイコロを四つ、それとペンと、真っ白のカード。それから使わない地図をお願い」

「……？ かしこまりました」

何に使うのか分からない様子だった。だが、生前の孤児院では、ゲームなんてない子どもたちは、自分で紙と鉛筆を握りしめ、遊んだものだ。

それに、初期のRPGなど、紙、ペン、サイコロ。そして想像力さえあれば、成立するのだ。

「よし、始めよう！」

「ちょっと待って。軍盤も良いけど、私少し面白い遊びを思いつきましたの」

ジークフルが来るのを待って彼も混ぜて三人で始める。

「今から私達でゲームを創りましょう」

「ゲームを創る？ でも、どうやって？」

「例えば、ここに地図がある。私達は、自分で本を読んで色々と調べるの。例えば、領主の城から各村は、軍隊で移動する場合、何日掛かるか？ それを元にゲームのルールを考えるの」

軍隊の能力を考える。弓兵には錬度があり、それによって、弓の飛距離に違いが出る。また兵も人間。それなら、兵糧という概念をゲームに投入すると面白みを増す。

陣地を考える。攻撃、守り、撤退、突貫と様々な陣形をカードに書き残し、対して有利な陣形と不利な陣形ではその効力はどれだけになるか考える。

最後に地形を考える。村々の移動に掛かる時間。村や戦場での有利不利。例えば平原では騎馬兵は有利だが、狭い街道では動きが取りづらいために不利。歩兵、弓兵は、軽装備のため移動が速いが、重槍兵は重いので遅いなどの速度差。などまた戦場での策略をカー

ドにして、戦闘開始時にそれを開示して範囲、能力に影響を及ぼす。言い方が悪いが、生前のカードゲームの補助カード的な役割も、とシステムをどんと詰め込む。

最後は、サイコロによる確率勝負。ジームフルが監修としてより本物の戦争に近い物に仕上げる。

「子どもながらの発想は、毎回驚かされます。キュピル様、軍は約三割を失うと機能のほとんどを失います。なので、敗北条件は軍の損壊率三割越え。で」

「えー、でも海上戦だとそんなのないよ」

「海上戦では兵の数ではなく、船の数で戦います。百人乗った船と二百人乗った船をどちらを倒しても海上の脅威が一つ減っただけなのです」

「うーん。そっか、じゃあ、他にも考えることはある？」

「これだけあればゲームが成り立つんじゃないかしら。始めましよう」

ゲームマスターをジークとして、私とキュピルくんは、軍盤の駒を使いそれぞれ編成した軍で地図上の領主の城を目指す。

私は、守り。キュピルくんは攻めを得意とするために、相互に補いながら進んでいく。モラト・リリフィムの領内の兵力は少ないので、早々に終わりキュピルくんに花を飾ることが出来ると思っていた。ただし、誤算だったのは相手が、ジークフルというお父様の片腕であることである。

「えっ、どこから兵が湧いたの!？」

「兵糧は死守しないと、キュピルくんの兵が撤退しちゃう」

「ほほほっ、各個の能力では負けますが、連携の隙が大きすぎますぞ、お二方」

結果は、惨敗だ。二度三度と戦ったが、駄目だった。絡め手や何やらを使っても霞を掴むように抜けていく。最終的に二人で強硬突撃を掛けたが、愚策ですぞ。の一言で全軍全滅。

孤児院の園長を思い出す結果に、私も唇を噛み締める。

「おや、もう軍盤はおしまいかい？」

「話は終わったが、疲れたね。ジークフル、私にもお茶を」

「畏まりました」

お父様たちは、私達の傍に來ると、端に追いやられた軍盤と中央を占める地図と駒と軍略書を見つける。

「二人で勉強でもしてたのかな？ ジーク翁」

「いえいえ、お二方は、ゲームをしておりました。ランドルス侯爵「ゲーム？ しかし、こんなゲームは家には……」

「お二方が、軍略書を片手に、創ったのでございます。お二方も一度おやりになりますか？」

「私達が教えて差し上げますわ。お父様」

私達三人は、お父様達に実演と共に説明をする。二人の疲れた表情は、すぐに食い入るようになる。

そしてジークフルをゲームマスターとし、私達が果たせなかった領主の城制圧を二人は、見事に行う。そしてその中で、本当の軍略という物を見る。時には大胆に、時には慎重に、ジークの複数の策を先読みし、それを逆に利用する。そしてついには、領主の城を制圧した。

「お父様、やりました！ 私の敵を取ってくれました！ 大好き」

「はははっ、つい熱くなっちゃった。でも、娘に良い格好をできたからよしと考えますか」

「お父上、凄いです。ジークを倒してしまうなんて」

「流石に東の海上将軍が負けるのは、癪だからな。だが、セフィリア嬢と良い、このゲームと良い。本当に凄い。是非にでも、セフィリア嬢をキュピルの婚約者にしてほしい物だ」

今、何やら凄いことを聞いた気がする。私は、婚約者の意味を考えて内心声を上げる。つまり、男の子と結婚するのだ。生前は男性だったのだ、その意味は、かなり大きい。それと同時に、こんな世界だし、今は女の子だからいつかは。という気持ちもあった。しかし、お父様は――

「駄目ですよ。可愛い娘をそうですか。と渡せるわけありません。セフィリアは、一番可愛い子です」

「お父様、お母様は？」

「リリーは最愛の人ですよ」

そう言って、私をきゅーと抱き締めてくれる。少しキツイが、生前にな無く今生手に入れた大切なぬくもりだ。

ランドルス侯爵が肩を竦めているのを見て恥ずかしくなるが、離そうとは思わない。

「では、このゲームのルールを変えたら、海上戦にも使えるな」

「そういうことになりますね。状況さえ設定すれば、どんな戦場でも使える。更に、サイコロによる確立とは、また運が試される」

「なあ、これ。俺の軍に使っていいか？」

「良いですよ。ただし、特許はこの二人の名義でお願いしますよ」

「分かっている。中央に特許の申請は俺がしておく。特許料は、収入の半分でいいか？」

「構いません。全て、セフィリアの個人資産ですから」

「相も変わらず、もしものの時の備蓄、貯金か」

私達は、首を傾げた。そして、二人の話し方が最初の時に比べて砕けているために、これが二人の本来の姿なのだと思った。

そして後日――私たちの考えたゲームは、東の海軍で使われその使用料に四歳の子供では使えないお金が入ったとのこと。私はこの世界で買い物をしたことが無い為に、その価値が分からなかった。

最初の収穫と子どもながらの創作（後書き）

日本の下級武士を思い浮かべてください。領民よりも良い家に住む貴族を役人とでも考えれば良いと思います。

領主は、江戸で言う一国一城の主と考えて差し支えないと思います。ただ、役職が少なすぎる気がします。

貴族身分は、

王族＞／＞公爵＞＞＞侯爵＞伯爵＞／＞＞＞子爵＞男爵

といった感じです。公爵から伯爵が主に領主階級で、子爵男爵は役人や軍人階級です。公爵から伯爵の中には、領地を持たない将軍職をする人も要るので大まかな基準です。

意志の継承（前書き）

序章はここまで。ほのぼの一転、転生少女の本気が始まります。

意志の継承

雨の音が喧しい。もう何日こうして部屋に閉じこもっているのだろう。

お父様は元気に城から領地の境の村へと視察に行った。三日で帰ると言っていたのに、今日で一週間だ。

視察に行った村の森で山火事が発生したらしく、お父様は不眠不休で陣頭指揮を執っていたらしい。それは、誇らしいことだ。ただ、不幸が重なってしまった。

帰省の途中寄った街で、伝染病である【赤斑病】が蔓延していた。字の如く身体に赤い斑点が浮き上がる病で、出血する伝染病だ。死の可能性は高くはないが、恐ろしいのはその感染力。免疫力の弱い子どもに爆発的に感染、低年齢の死亡率が高いことだ。またかつて別の領地では、瞬く間に領地全体に広がったことがあることから、お父様は全領地の移動制限を終息宣言までの無期限に設定した。

その中でお父様は、不眠不休が祟り自らも病を患ったことを三日前に知り私は不安で塞ぎこんでしまった。私は、ただ無事を祈っていた。

「セフィリア？ いるのでしょうか？」

お母様だ。お母様が私の事を心配してくれている。気丈な人だ。私は、この不安に押しつぶされそうなのに。

「ご飯も食べていないでしょう？　一緒に食べましょう？」

「ごめんなさい、お母様。でも、あまり食べたくありません」

「セフィリア、あなたまで倒れてしまうわ。お願いだから食べて」

そう言われてしまい私は部屋から出る。お母様と共にほんの少し、お菓子を食べる。蜂蜜を使った甘いお菓子。滅多に食べられないために、子どもの私の気を紛らわそうとしているのを感じ取り、それが余計に泣けてくる。

「お母様、お父様は大丈夫ですよね！」

「ええ、ダイナモは私の夫で、あなたの、そして領民達の父です。父は簡単には倒れないわ」

笑顔で答えてくれるお母様だが、手はぎゅっと握りしめられ震えている。お母様も不安なのだ。少し、離れたところにいる侍女も表情が暗い。皆不安なのだ。自分だけが無事な帰還を祈っているわけじゃない。

そんな時、外で馬車が走ってくるのが見えた。

「あれは、お父様の馬車だわ！」

私は、お母様から離れ、制止する侍女を振り切り玄関の扉を開いた。雨に濡れるのにも構わず、私は、馬車からお父様が降りてくるのを待った。しかし、馬車から下りてきたのは、一緒に視察へ行ったジークフルだけだ。

私は、震える声でジークに尋ねる。

「ジーク、お父様は？ お父様はどこ？」

「セフィリア様、申し訳ありません。申し訳……」

黒の燕尾服が雨に濡れるのにも構わずにその場で跪くジーク。ジークが抱えるのは、大きな長方形の箱。私は、これと似たものを見たことがある。生前、物心着く前からあったそれは、私の大切なものを収めたものだ。

聞きたくない、知りたくない、でも絞り出すように私は、声を震わせ、尋ねる。

「ジーク、それは、それは、何なのですか？」

「申し訳ありません、ダイナモ様を、ダイナモ様をお守りすることができませんでした。このような形でセフィリア様とお会いさせたこと、申し訳」

その声に悟った。ああ、祈りは無駄だった。大切なものが手の中から零れ落ちる。初めて得た物が――

「う、うあああああああああああああああ！」

自らの髪の毛を強く引っ張り、頭を大きく抱える。自然と喉を突く慟哭が、雨の降る空の下に響く。慌てて飛び出してきた侍女たちやお母様も状況を把握して誰も止めない。いや、止められない。

私は、泣いた。雨と混ざり合い、お母様譲りの髪を乱し、お父様譲りの瞳を全て真っ赤にしてまで泣いた。

お父様は、領民に感謝された。山火事の終息は早く、伝染病の感染爆破を防止した。と。発症が確認された周辺の領地での被害の数は、三桁の上ったが、モラト・リリフイムの領地では発症した街のみで被害は二桁。これは驚異的な数だった。ただし、それに伴う代償は大き過ぎた。

お父様の死は、領内全ての民が悲しんだ。早すぎたしだ、名君を失ったと嘆き、悲しんだ。民と近いお父様、民の苦しみを和らげようとするお父様、私に愛を与えてくれたお父様、それらは私のこの世界の全てであり、誇りだ。いつか、尊敬し敬愛する父を助けると胸に誓ったのに、それが果たせない。

なぜ、もっと自分の力を使わなかったのか、なぜ、早くに知識を

広めなかったのかと嘆いた。

その中で、葬儀に参加した貴族の話を耳にした。

「惜しいお方を無くした。ダイナモ侯爵は、まだ若いのに」

「それに、子どもは一人。それも女の子だ。あの子に領主を継がせるのは無理だろう」

「だが奥方は、農民の出。それでは領主は慣れないさ。なんでも、東のランドルス伯爵の長男との婚約の噂もある。ランドルス伯爵が、この領地を治めるかもしれないな」

「それはないでしょう。中央や教会は一部に力が集中するのを恐れる。娘のセフィリア嬢が継ぐ意思を表明しないと誰か適当な貴族がここに派遣されることでしょうな。まあ、今までのような民に優しい統治は終わるのは間違いない」

悲しみから今度は、愕然とした。お父様を守ろうとしたものが、お父様の死と共に失われてしまう。それだけはあってはならない。

「ジーク」

「セフィリア様、なんでしょう？」

少し疲れた顔をした執事長ジークフルに対して私は告げる。

「屋敷にいる使用人を全て集めて頂戴」

「セフィリア様？」

子どもの甘えは終わりだ。私は本来の私に戻ろう。いや、迎合を果たそう。

孤児院で強かに過ごした日々と今までの両親の愛に包まれた六年間。全てを一つに結び付ける。

全員が集まった。数は少ないが、お母様、優秀な使用人。侍女長キリコと執事長ジークフル、そして現在常駐している騎士。全員に私は宣誓する。

「私は、領主を継ぎます」

「セ、セフィリア様！」

「お父様が亡き後、何時までも悲しみに耽ってはいけません！私が継がなければ、民の安定を願ったお父様の意志は、失われます！私は、まだ無力です！ですが、お父様が信頼し、お父様を支えてくださった皆にお願いしたい。私を、領主セフィリア・ジルコニアを支えてくださいますか？」

誰からとなく、一人一人と膝を付き、最上級の臣下の礼を取る。

「セフィリア、あなた。良いの？それで」

「良いのです、お母様。私の幸せは、民の幸せです。もしも、相手

がない場合は、お母様のように素敵な農民の夫を迎えますわ」

悪戯っぽく頬笑む私をお母様は、痛いほど抱き締める。やることは、多い、しかし、真に動き出すのは、来年の春からだ。

意志の継承（後書き）

現在の時期は、六歳の秋。
次は春に飛びます。

理論の実証（前書き）

第？部が始まります。セフィリアは、突然、技術が登場することの不自然さを気にする人間です。

淡々とした領主様すげー打算的、という小説であることを遅いながらも、申し上げます

理論の実証

私の領主継承は、滞りなく進んだ。各地からの代表からは祝辞の手紙や品を贈られると同時に、各地の騎士や役人からは、不安の声も上がっている。

セフィリア様は、まだ六歳。そのような歳で領主が出来るわけがない。いや、父君のダイナモ様の跡を継ごうと躍起になっているだけだ。すぐに助けをお求めになる。

そう言った声が聞こえるが私は全てを無視し、ジークから現状を詳細に記された資料を現在読んでいる。

私は、お父様が亡くなってから領地の人口、職種、主な農作物の一覧と収穫量、交易品の確認、税收、領民の平均寿命などを確認。グラフ化する事にした。お父様は、情報に関しては、かなり精度が高く記録に残されているので、私はこの城に居ながらに領地の多くの事情を知ることが出来た。そして現在は、領地の問題の一つについて紙面をみて睨みあっている。

「なるほど。地図上の耕作地の作物は王都への出荷を主としており、農民はそれで手に入れたお金で安い雑穀を食べているのですね」

「はい。他にも税收や役人仕事は、ダイナモ様が大凡効率的な組織を作ってくださいました。ですが大きな事業を行う場合は、領主であるセフィリア様の許可が必要となります」

「だから、この為の農地の拡大ね。ですが、それを行うための人手や道具はありますか？ それに、地図上を候補とする場所を同時に開拓しても物になるの、十年前後なのでしょう？」

「ですが、他に方法がありますか？」

ジークの言いたいことはもっともだ。だが、私の温めていた策は、物になるので五年だ。

「ジーク。これを見てくれる？」

「これは、お嬢様のトマトの観察日誌ですか？ しかし、あのトマトは、良く実りましたな」

「実はね。最後のページを見てほしいの」

そこに書かれている内容は、こういうものだ。神の教えに則り「大地に恵みは、地に帰す」という教えが、どのような経験則に基づかれているのか。について書かれている。腐葉土、鶏糞、生ごみによる有機肥料、竈の灰、何も使わない場合、それぞれを使った生育状況と葉の数の変化、を可視化して収穫までの変化を記した。

最後に、極論、鶏糞以外にも、牛糞や人間の糞尿でも有用性があるだろうという仮説だ。

「こ、これは！ 本当でございますか！」

「ええ。葉は、木が吸い上げた大地の恵み。それが落ちて腐った物が腐葉土。鶏糞も鶏が食べた物は糞により大地に、生ごみも土に埋

めることで、木自体が大地の恵みの塊。その燃え残りの灰もまた大地には良い物。その全ては、「大地の恵みは、地に帰す」経験則に基づいているの。だから痩せた大地にそれらを与えれば、作物は大きく成長する。休作地を作らずに、生産量を増やすことが可能になるわ」

「こ、これが本当なら！ 我が領内は、一変しますぞ！」

「そう。それで、近くのラムル村の協力を得て、それを実証しよう。何もしない土地を二つと、全てを混ぜた土地を二つ。そして途中で何もしていない土地と、混ぜた土地に追加で大地の恵みを補う場合の変化を見るのです。」

私の場合はトマトだけでしたので、幾つかの作物を試験的に試し、その全ての様子をこの一年で記録に纏めるのです。それを紙面に方法を記し、領地内の農村に配るのです」

「す、すぐにラムル村や周辺の幾つかの村に手配しましょう！」

「ラムル村には私が直接行きます。お友達に会いに行きたいわ」

私がほほ笑めば、ジークはもちろんです。と返してくれる。

今回の理論は、一つ。教会の教えを元に考えたが、もう一つある教会の教えも私には気がかりであった。

お母様にお城を預け、私はジークと騎士に伴われ、馬車でラムル村へと向かった。最後に訪れた時と変わらない雰囲気には私は安堵を得る。

「お待ちしておりました。領主様」

「ありがとうございます、村長。今回の視察は、あるお願いをしに参りました」

「分かっております。中にどうぞ」

そう言って通された。心なしか疲れた表情をしておいる。

「ダイナモ様のことお悔やみ申し上げます」

「良いのです。今は領民の方が大変なんでしょう？村長も前に会った時より痩せていらっしゃる」

農作業で鍛えられた身体と凛々しい顔立ちも、今では頬がこけ、眼には力が無い。

「お恥ずかしながら、ダイナモ様が良くしてくださるのですが、村の備蓄事情が難しいのです。このままでは、すぐに労働力にならない子どもを売らなければいけない」

「それは、ダリアも含まれているのですか！」

「ええ。ダリアはあれから文字の読み書きを覚えておりますので、運が良ければ貴族への奉公はできるでしょう」

ダリアとは、手紙を交わし合っている。互いに拙いながらも日々の楽しいことを書いている中だったので、その言葉にショックが大きい。

「私だって出したくないのです。可愛い娘。ですが、村を滅ぼすわけにもいかない。すぐにというわけではないが、農地の拡大ではきつと間に合わない」

悲痛な声にこの家の暗い雰囲気の意味が分かった気がした。だから私はなるべく落ちついて話をする。

「大丈夫です。希望は、お父様の残した計画書にあります。こちらが成功すれば、きつと。今は、これに目を通してください」

「ダイナモ様の農地開拓の計画書ですか？ 拝見させていただきま
す」

村長は私の出した計画書が、農地開拓とは別の方法による収穫量上昇だと気がつく顔に生気が戻ってくる。私では、大人への説得力が足りない。だから、私はお父様の残した計画書。ということでは今後の計画を少しずつ行っていくつもりだ。

「これは、本当ですか。これが本当なら、ダリア。いや、村の子どもを売らずに済む」

「今は、周辺の村の一部に試験的な実証をお願いしています。この村にもお願いするために来ました。乾いた糞や、生ごみを扱うって貰うのは、大変心苦しいのです」

そう、糞や生ごみには、虫が湧く。とりわけ、蠅は不浄とされるために、きつと嫌がるだろう。しかし、村長は分かって答えてくれた。

「我々は、大地に生かされている。そして蠅は豊穣の存在として年寄りには崇めてもおります。大丈夫です。この【肥料】を作り【追肥】有用性を証明し【肥貯】の存在を確立して見せます」

「ありがとうございます。それと数日泊って行っていいですか？

私は領民と共にある者。これを見届ける義務があります」

「良いのですか？ 城には、やるべき仕事があるのではないのですか？」

「お父様が作り上げた組織、そしてお母様が領主代理として頑張ってくれています。それに――お友達と遊んできなさい。と言ってくれてきたので、甘えておりますわ」

左様でございますか。とほほ笑む村長。私は、それから三日ダリアと共に村を回った。大人を連れて森の腐葉土の特徴を教え、鶏糞と混ぜ、竈の灰を村で集め、それを畑に撒き、種を埋めたのを見て私は城に帰った。お父様が亡くなって以来、お腹の底から笑うことの減った私は、久しぶりに笑った。

近くの領地の多くは、実験の実証に賛同してくれて、広く、多くの種類の野菜のデータを取ることが出来た。

その年、肥料を使い追肥の行った畑では、今まで以上に質、数ともに多くの種類の野菜の出来が良く、各村々からは笑顔が生まれた。その畑の収穫量は、何もしない畑より1.5倍から2倍にも上ったそうだ。

理論の実証（後書き）

第？部が始まりました。序章は、理論などがほとんどないので、
が、今度からは、理論や知識を私が仕入れなければいけないので、
少し更新ペースが落ちると思われます。

それにしても、セフィリアが一気に大人っぽくなってしまった。
どうしよう……

子どもの限界（前書き）

やっぱり七歳の子どもには、荷が重いと思います

子どもの限界

私は、今日も侍女長のキリコに起こされ、朝食の席に着く。昨日は、領内の税収管理をしていたが、内容を見てまだ驚きが残っている。

周辺の村では、一部の税収が上昇していたのだ。それもセフィリアの農地改革を実践した場所に集中していた。きっと口伝えで堆肥や追肥の効果が伝わり、試しに行った村が多いようだ。この調子なら来年からの領内での実践が広範囲で可能になりそうだ。ただ、心配もある。

「キリコ、セフィリアのことどう思ってる？」

「大変素晴らしいと思います。セフィリア様は、立派にダイナモ様の意志を継ぎダイナモ様すら成し遂げられなかった生産能力の向上をやったのけたのです」

「いいえ、それもそうだけど。そうじゃなくて、あの子が急に大人びてしまって私は困惑しているわ。もっと遊ぶべきなのよ。私が出た頃の頃は農地を駆け回り、土を実際に肌で感じたりした方が良かったよ。あの子は、先月七歳になったばかりよ」

私は心配だった。夫のダイナモを失い、我が子を失うかもしれない。私は良かった。貴族の生活などには興味はなく、ただセフィリアと共に安穏とした生活を送れば。だが娘は、尊敬する父の志を受け継ぎ領主として立った。私が代わりに出来ればよかったのだが、身分の違いが邪魔をする。だからせめて領主補佐や領主代理として

少しでも仕事を減らそうと今年一年頑張った。

「奥様、奥様も無理をなさらないでください。我々侍女一同、執事一同、そして騎士、役人、深森の者たちは、みな領主と領主代理を支えております。自分ひとりしかできない仕事と考えないで頂きたい」

キリコは、そうはつきりと言った。何時だって正しく、真っ直ぐに余計な言葉を重ねないキリコの優しさに私は、胸が熱くなる。

「さあ、もうじきセフィリア様が起きてきます。暗い顔をされては、セフィリア様が心配なさいます」

「ありがとう、そうね。今日も一日元気で行きましょう」

「その調子でございます」

キリコに励まされ、私は、笑顔になる。心配は尽きないがもうじき冬だ。それからは農民は家の中に籠り春を待つ。それがセフィリアの休みになるのだ。自分に言い聞かせている時、侍女の一人が慌ただしく駆けつける。

「どうしました。セフィリア様を起こしに言ったのではなくて」

「それが、セフィリア様の様子がおかしく。顔が赤いのです」

それを聞いた時、私は気が遠くなるのを感じた。セフィリアまで

失うかもしれないという思いに駆られ、手が震える。

「奥様、奥様。しっかりしてください！」

キリコの声で呼び戻された私は、深く呼吸を繰り返して落ち着く。

「大丈夫です。ただの風邪です。この前の収穫の結果を聞いて、安心したのでしょう」

「ジークフル。あなたが見てくれたのですか？」

「はい、奥様。今日一日は、セフィリア様のお傍にいてあげてください。風邪を引くときは、誰だって心細いものです」

「でも、税収の……」

「奥様、侍女長と執事長が問題ないとおっしゃるのです。むしろ、この一日で我は仕事を片づけ、三日休めるように致しましょう」

近くにいた侍女もにっこりと微笑む。私がこの家に嫁いで来る前からいる二人に感謝しながら、私はセフィリアの部屋向かう。

部屋に入ると、セフィリアは、顔を真っ赤にして、苦しそうに呼吸している。額には水を絞ったタオルが置かれ、飲み水が置かれている。

「……お母様？」

「起こしてしまったかしら」

焦点の定まらない瞳でこちらを見てくる。私が笑顔で返せば、弱い笑顔返してくれる。

「何か欲しい物はある？ お腹は空いていない？」

「少し喉が渴きました。お水を」

「分かったわ。少し身体を起こして」

身体の後手に手を差し入れて状態を起こす。軽い身体を支え、水の入ったコップをゆっくりと飲ませる。

「ありがとうございます」

「良いのよ、後で何か食べやすい物を持ってきて貰うわ。少しでも食べて元気になりましょう」

「はい。その、寝るまで手を握ってくださいますか？」

「もちろんよ」

それから静かに目を瞑り、浅い眠りに入るセフィリア。小さな手は、とても熱く感じる。

今日の風邪自体は、それほど重いものではなかった。どちらかと言えば知恵熱のような感じであった。ご飯を食べ、一日のほとんどもを寝て過ごせば、翌朝には熱は下がり、セフィリア自身動きたくて

しょうがないと言った感じだ。

だがジークフルやキリコの頑張りで本当に昨日の内に仕事は綺麗さっぱり終わり、風邪の養生のためにもう一日休むことを口実に久しぶりの親子の時間を得た。

「お母様は、農民でしたのよね」

「ええ、そうよ。農民の生活は決して楽ではなかったけど、楽しいことが多かったわ。四季の移ろい、動物たちの誕生と成長、冬場は農業が出来ないからお勉強と色々なことをしたわ」

「ダリアも冬場に文字を頑張って勉強していたと言っていました。それでお母様は、どのようにしてお父様と出会ったのですか？」

これは恥ずかしいことを聞かれてしまった。しかし、この子はきつと寂しいのだ。少しでも父親と言うものを感じていたのだろう。

「そうね。私の祖母は、商家の人間だったの。だから冬場には、読み書きの他にも数の計算や商売の方法を教わったわ。もちろん料理もね。だけど、村が貧しくなると最初に切り捨てられるのは、若い女、子ども。私はある貴族の家に奉公しに行かなくてはならなかったわ。嫌だったわ、だって家族と離れ離れになるんですもの」

「ダリアも似た境遇になりそうだ。と言っていました」

セフィリアは私の言葉に相槌を打ちながら、しっかりと耳を傾けている。

「でもね。奉公した家の貴族は、使用人に優しかったわ。皆に優しく、民に優しく、使用人には年に数度故郷に帰ることを許可し、その旅費を負担してくれた。皆が彼を好いたわ」

「それがお父様だったのですか？」

「いいえ、それはおじい様のケーニス様よ。ケーニス様は、貴族同士の結婚を是としない人だった。そこに私とお父様の恋仲を知って喜んで協力したのよ」

「おじい様も民に好かれた変わり者だったのですね」

変わり者、という言葉は一般には褒められた言葉では無いにしろ。ケーニス様のお人柄で言えば、むしろ褒め言葉と豪快に笑うだろう。

「私は、このジルコニア家に生まれて良かったです。お母様、お父様、見たこともないおじい様。ジークにキリコ、執事に侍女、騎士のみなさん。他にも多くの人に私は支えられていることを何時も感じます。愛されているのを感じるのです」

「ええ、愛しているわ。愛されるように、皆を愛すように。そう言う願いをセフィールに込めたのよ」

目を丸くして、セフィールとは何かと尋ねてくる。

「セフィールとは、この地方から古くからいる神様よ。教会よりも古い神様。森と草木を愛し動物に愛される神の愛娘。その名前を元に、セフィールからセフィリアと言う名前にしたのよ」

「教会以前の神とは、どのような神がいたのですか？」

「兜の守護者・アロン、矛の虫王・グラードリア、蠅の富王・ニヤレスト、蜂の先兵・ハニール、木の女神・ミープル、そして、ミープルとニヤレストの間に祝福された娘・セフィールよ。

この名前とそれを司る昆虫は、いたるところに紋章として組み込まれているわ。ただ、蠅の富王・ニヤレストは、教会の教え『無駄に肥え太ること』に反するとして、不浄の存在になってしまった。と私のおじい様が言っていたわ」

「そうだったのですか。お母様、私にこのような素敵な名前を与えてくださりありがとうございます。私は、この名に恥じないよう民を愛し、愛される存在になります」

私は、娘の決意をさらに固めてしまったかもしれない。それは仕方のないこと。運命と言えるかもしれない。ただ、今日一日は領主の仕事忘れて穏やかに過ごして貰いたい。今だけ、甘えてほしいと思っている。

子どもの限界（後書き）

子どもの体力の限界でした。私が子どもの頃は、一か月に一度は風邪を引いていました。凄い身体が弱かったと思います。

誤字脱字、悪文の指摘ありがとうございます。暇を見つけて直していきたいと思います。

商人・メペラとパライカ（前書き）

今日は、商人視点でございます。

誤字脱字、悪文すみません。自分でも多すぎて発狂しそうです。

商人・メペラとパライカ

「初めて来ました。ここが領主のお城なんですね」

商人見習いのパライカが周囲を物珍しそうに見ている。

「こんなのは序の口ですよ。このグラードリア王国の中央や西側貴族の城は、金や宝石がそこかしこに使われていますから」

「金や宝石!？ ほえ、じゃ、じゃあ、もっと大きいんですか」

「ええ、大きいですよ。宝石の詰まった壺に金の蜀台、果ては、領主のネックレスまで貴金属と宝石だらけ!」

「そ、それが本当なら、僕達が五年、いや、十年は慎ましい生活が送れますね。メペラ師匠!」

「もちろん、嘘です」

膝がぐくと落ちる。その姿に私は押し殺した笑いをする。

「ふふふ、パライカの反応はいつも私を愉快にさせてくれますね」

「止めてくださいよ、師匠。師匠は、商会の期待の星なんですから子どもみたいなことはしないでください」

商会の期待の星。つまり、金蔓というわけだ。北のエラヴェール皇国やここグラードリア王国、北西のフェンミルス、その他多くの地で交易を行う商人集団【ウェス商会】。その実態は、収入に応じ

た年会費が取られ、そのお金で王侯貴族とのパイプを太く保つ商会。収入が多ければ多いほどウェス商会に収めるお金が多いことを意味する。だから、期待の星Ⅱ金蔓なのだ。

「私としては、商会という縛りよりもっと自由に交易したいものです。あ、あと、各地を巡って特産品を食べるのは良いですね」

「もう、師匠は、夢見がちですよ」

子供っぽい弟子に諭されながらも、我々は、今日の商談相手を待つ。今回の商談相手は、モラト・リリフイム領の領主代理のリリィー・ジルコニアか、執事のジークフル・ムルムトフだろうと、予想する。

前領主であり、通年の商談相手であるダイナモ・ジルコニアは、伝染病により若くして亡くなった。彼の意志継ぎ、領主になったのは、わずか六歳の子どもだ。去年は、事前に計画してあった交易品のリストが残されていた為に、執事のジークフルが事務的に――ただし、きっちりと値切られた――商談をこなした。今年も去年を元に購入するのだと思っていた。

「お待ちせしました。メペラ殿、パライカ殿」

「これはこれは、ジークフル殿。お変わりない様子で」

「ええ。本日の商談は、セフィリア様も同行してよろしいですか？」

「子どもに商談ですか？ 早くありません？」

「こら、パライカ！」

パライカの失言を叱りつけると、ジークフルは、愉快そうに笑い気にしていないことを伝える。

「セフィリア様は、商談自体に特に口を挟むつもりはないそうです。城の中で一年の多くを過ごすセフィリア様は、外の見聞に精通する商人殿のお話に興味がある様子なのです」
「そうですか、分かりました」

その話を聞いて、私は少し同情した。まだ幼い。幼すぎる子どもが、父の意志を継いだことで失ったのは、我々が商会に入る時に失ったものと同じ——自由なのだ。と思った。

ジークフルは、私達を一つの部屋に案内した。そこには、金髪、紅眼の人形のような少女が本を読んでいた。少女は、本を閉じてこちらに挨拶をする。

「お待ちしておりました、商人様。私は、当領主のセフィリア・ジルコニアと申します。以後お見知りおきを」

隣で弟子がかわいいと呟いている。可憐なのは同意するが、相手は領主なのだ、失礼のないようにとあれほど言ってきたのに完全に呆けている。

「私は、メペラ・トロイス。こちらは、弟子の……」

「は、はい！パライカ・ロロンです！」

「では、商談を始めましょう」

とても利発そうな子どもという印象だった。読んでいた本は【軍盤指南書】だ。読んでいた本からして現在七歳になった子どもとは思えない。同年代の子どもを持つ貴族や商人を相手にする時、子どものための童話を注文する人が多い。こんな本を読むのは、武門の家くらいものだ。

「では、メペラ殿。来年用の備蓄のためのリストでございます。ご確認を」

「雑穀、じゃがいもを中心とした備蓄ですね。去年に引き続き、今年は不作ですか？」

「いえ、今年は比較的豊作なのですが、何時飢饉がおこるか分かりませぬ故、各家で安くても量の多い雑穀を買う傾向が強いのです」

「そうですね。不作年は、広範囲に穀物が不足する。餓死者が比較的少ないこの領地は、危機意識が高いですからね」

「……」

セフィリア様の強い視線を感じる。子どもながらの責任？ それとも使命感。食い入るように見つめる視線は、最初の可憐な印象、次の利発という言葉の全てを忘れさせるほど強い。それでいて何も言わない。それが私に強い緊張感を与える。

「メペラ殿、北の方では、今年は豊作だったようすな」

「ええ、ですから、穀物は例年より安いですよ」

「では、去年の備蓄の方をさらに安くしては頂けないでしょうか」

この執事、執事のままだしておくのは勿体ない。こちらが優位なのに、常にその裏側の事情を知って突いてくる。豊作になれば、当然備蓄が増える。しかし穀物と言っても食べ物。何時までも持っていられるわけもなく、いつかは捨てる。それならば、古穀物を安く買おうとしているのだ。こちらの利としては、古い穀物がお金になる。あちらの利としては、安く大量の穀物が手に入る。

「それを加味した上で、紙面上の予想額の八割」

「いえ、六割で」

「……七割」

「五割五分」

「ええっ！　なんで下がっているの！」

「分かりました。六割五分でお願いします」

こちらが優位だったはずなのに、いつの間にかこちらがお願いする羽目になる。執事ジークフルという男は、にこやかに書面にサインする。

「毎回、楽しい商談をさせていただきます。私はお茶とお茶菓子を用意してまいります」

「ジーク、御苦労さま。お母様と一緒にお茶をしましょう？」

「そうでございますな。では、奥様を呼んでまいります」

そう言って退室したジークフルの後姿を見て私は、溜息を付く。

「毎度、ジークフル殿には、驚かされます。あれほど有能な人が執事だとは、信じられません」

「私もそう思うわ。ジークは、お父様とお母様が絶対の信頼を置いていたのですもの」

「ぼ、僕も緊張しちゃいました。普通の貴族って値切ったりしませんもの」

「そうなのですか？」

「そうですね。法外な額を提示しなければ、気を良くして買ったりしますね。その点前領主様は、購入したものの多くを民に還元なさっておられました。それが美点であります」

「お父様は、常に民の事を考えておりました。きっと亡くなる最後まで民の事だけを」

僅かに目を伏せて、穏やかな表情で語るセフィリア様。とても親を亡くした子には見えない程に気丈だ。

「メペラ様は、様々な地へ赴き商いをされているのですよね」

「はい、幼いころは私もパライカのようにあちこち連れ回されました」

「メペラ様から見ても領地の問題点を教えていただけなのでしょう？ 私は、外に出たとしてもここからもっとも近い農村だけ。お父様のように各村へと視察することは叶いません」

「そうですね。私は長いこと荷馬車や馬車で移動するので常々思うのですが、道の整備が不十分だと思うのです。「道が良ければ、物の流れも良い。物が多く流れれば、お金も多く動く」と昔師匠に言われたことがあるんです」

「僕は、馬車の移動が何時も怖いな。いつ盗賊や野党に襲われるか分からないから」

申し訳なさそうにするセフィリア様。流石に七歳の子どもにこの話をするのは難しいと思った。

「申し訳ありません。私に力が無いばかりに。何時かは、治安維持を考えているのですが、そこまで手が回りません」

「こら、パライカ」

「ご、ごめんなさい。で、でも他の領地よりは、安全だよ。いつも移動には護衛を何人も雇わないといけないんだ」

「そう言って頂けるとありがたいです。お父様の作り上げた組織がきちんと役割を果たしているのですから」

微笑み返す少女は、きつとりリリー殿に似て皆から愛される程に美人になることが予想できた。ただし、それまでの雰囲気が一転して、実務的な雰囲気帯びる。

「実はお願いがあるのです」

「なんででしょう？ 商人へのお願いには、お金が掛かりますよ」

私は冗談半分で答えれば、ただ微笑で返される。

「珍しい書物が欲しいのです。とりわけ植物図鑑です」

「それはなぜでしょう？」

私は興味を抱いた。この若い少女がなぜそれを欲するのか知りたくなったためだ。

「我が領地のほとんどは農地。ですが、各地域には特産物といえるものは少ない。あるのは、東側の葡萄畑で作られるワインや森で取れる蜂蜜が少々。それも貴重品や貴族好みの趣向品。ですから民に受け入れやすい新たな作物を作りたいのです」

「なるほど、それで植物図鑑なのですか」

「ええ、あと金属が欲しいのです。鉄を」

確かに、鉄は我々商会の扱う商品にある。貴族は自身の装飾品のために高い貴金属を買うが為に、貴族にしては安い買い物だが、その量が普通ではない。まるで何かを作るためのような量だ。

彼女は、静かに本の脇から紙の取り出す。その一枚一枚には、拙いながらも独創的な絵が書かれていた。

「なんですか？　これは、大きな鋤の絵のようですが。でも逆では？」

「はわあ、まるで犁^{すき}みたいですね。でも一本一本の歯は細くて数も多いですね。それに間隔も狭い」

「大きな犁のようなものは、脱穀機と言います。小麦などを稲と実を分ける際農家は、木の棒で叩いて分離します。しかしそれでは非効率なので、髪を梳く櫛のようにして途中の引っかかった物が落ちるのでは、と考えたのです」

「それで農具を作るための鉄なのですね。伺いたいことが幾つかあるのですがよろしいでしょうか？」

「なんです？」

今度は、大人びた笑みを浮かべる。コロコロと見える表情が変わるので彼女の雰囲気呑みこまれそうになるが相手は子ども。私は商人として彼女の行動に対して指摘する。

「なぜそのような重要なことを私ども商人におっしゃるのですか？ 発明は、特許を取ること莫大な利益を上げることが出来るのではないのでしょうか？」

「私は、特許や利益と言った物には、興味はありません。ですが、特許を取るのでしたら工匠会の名を借りて出願しようと考えております。そうすることで工匠会にも利益は落ちます」

「我々がその図を模倣し、特許を申請する可能性を十分考えましたか？」

「そのようなことをすれば、メペラ様とパライカ様の商人としての道は断たれます。商売人の鉄則としては、客の情報を口にする事は、信頼の破綻に繋がります。そしてこれはジークに事前に相談した結果、あなたは信頼に足ると判断されたから話しているのです」

一問一答に的確に答えていく。まるで歴戦の商人と話している感覚に喉が渇く。

「では、もう少し質問を。これほど鉄を使う農具は売れば、かなり高額になります。農家はそれを買うことが出来るのでしょうか？」

「買って頂く必要はありません。領主として各村々に貸し与え、その年の終わりに修理費を税に上乗せすればいいのです。領地以外の販売は工匠会に任せますが、領内はそのような方法を取ります」

「それじゃあ、利益が無いじゃない。ただであげるのと同じだよ」

この少女は、パライカの言葉にただにっこりと微笑む。それは領民を思っているものだろう。だが別の側面から見ればこれは、首輪だ。便利な道具を貸し与えることで、より領民の支持を集めながらも反抗すればそれらを奪う。彼女は善人だからそのような真似はしないだろうし、前領主のダイナモ様は領民からの高い支持を得ているので民も反抗しない。しかし、他の領主ならば一種の鎮圧政策になる。

この領主は、幼いながらも底が見えない。それとも背後に誰かがいるのか？ 誰かの入れ知恵、誰の？ 先代領主の残した政策か？

「では最後に。それらを行う上での資金は御有りですか？ 商人にお金を借りるにしては、額が大きい。大きすぎる。そして、あなたには領主という肩書以外は何もない子ども。お金を貸した際の信用はありません」

「私の私財でお支払い致します。これが当座に蓄えられている額でございます」

その額に私は、目を見張る。私ども商人が一年で稼ぐ額の何倍だ？ 三倍、いや五倍はある。それを七歳の少女が稼ぎ出したと言うのだ。信じられない様子で隣のパライカは口をあんぐりと開けている。

要望の品を買うには十分な額だが、このような大金のからくりを知りたい。

「これほどの額をどうやって」

「東の海軍は最近、軍盤以外に実用的な遊戯を導入したと聞きます」

「それが……まさか、特許!？」

「はい。子どものお遊びで作った物が、まさか大人の手が加わるとあそこまで変わるとは思いませんでした。御蔭で今年の冬は、ジークと二人で良い息抜きが出来ます」

言葉が無かった。この少女は七歳の時点で、既に傑物の域に來ている。商人は本来一人の人間に入れ込んではいけないが、駄目だ。この少女には人を魅せる何かがあるのかもしれない。彼女に興味がある。彼女が何をしてくれるのか、どう変化を生むのが楽しみで仕方が無い。それと同時に、商人の性で、この少女との関わりで自分がどれだけの利益を上げられるのかを打算的に考える。

「では、一つ契約する上で、出来上がった農具や今後の新製品の販売を優先的に私どもにしては頂けないでしょうか？」

「それは最初から考えておりました。商人は利が無い所には寄りつかない。でも逆に利が大きすぎる所は貪られてしまう。私は、商人様に当家専属になって頂いて、私どもを他の商人から守って頂きたいと考えております」

「す、凄い話です！ 師匠」

「商人は、誰かと共にすることはありません。その家が潰れたときの潰しが利かない。商人と顧客は一線を引く形があるべき姿です」

少女は、私の回答に驚き、目を見開くがすぐに納得したような顔になる。

「分かりました。では我々の方で商人・メペラ様とパライカ様以外とは取引しないよう心がけましょう」

「では契約書は、どのように」

それからは談笑を交えて彼女の用意した契約書を確認した。セフィリア・ジルコニアという領主は、有り程で言えば無力だ。だが異常でもある。話せば、子どもらしさはあるが、どこか大人びており、普通の子どもでも知ってる知識に目を輝かせる。

本当に不思議な小さな領主様だ。

「セフィリア。こんなところにいたのね。風邪を引いてしまうわよ」
「お母様、それは先週のお話です。セフィリアは元気です」

「お待たせしましたな。メペラ殿、パライカ殿。当家のお茶菓子で

もどうですか？」

「頂きます」

「わぁ、甘いお菓子だ！」

目の前の母子の姿に先ほどの小さな領主の姿はない。本当に、母の膝に抱きつく普通の親子と言った感じで心が和む。

「お母様。セフィリアは、初めて自分でお買い物をしましたわ」

「そう、それは良かったわね。冬の間に楽しめそうな物は買えたかしら？」

「はい！」

……まさか、あの商談を初めての買い物扱いとは。それに、初めての買い物で大量の鉄とはまた。と苦笑する。ああ、この少女の注文した本の中に流行りの小説でも紛れ込ませて送ろう。そうすれば、少しは自分の異常さに気がついて、恥ずかしい感情でも抱くかもしれない。

色々と目の前の小さな領主との商談で得た純利益や少女自身とのやり取りに、自分も笑みが零れていた。

商人・メペラとパライカ（後書き）

私の商人イメージです。

めっちゃ、互いに目的に為ならと打算的です。はい。

工匠会の工匠・スポパヌス（前書き）

工匠会とは、金属や木材を扱って製品を生み出す組合組織。二次産業です。

農業、酪農は一次産業。

現在時期は、真冬。農業はお休みで皆が家の中に籠る間。工匠たちが頑張ります。

工匠会の工匠・スポパヌス

儂ら工匠は、長年鉄や木材と睨みあってきて腕一本で生きてきた野郎たちだ。

今日は、領主から依頼を受けたのだがそれがまた珍妙なものだっ
た。

「この子どもの絵を作ってくれ、ってか？　これはどういうものなんだ？」

「それが、脱穀機という奴で、収穫した麦を藁から分離するための物らしいのですが……」

「儂らは農民じゃない。農民が求める物を知らなきゃ、物は作れん」

頑固なのは分かっている。だが、これが儂らの性分なのじゃ。物を作るからには妥協は許さん。言われた物を作るのは、二流三流の仕事。物の構造を理解して、そして改良を加えてこそ上級工匠ってもんだ。

「幾ら鉄と現金を送られても、作れん物は作れん。なんで工匠幹部の爺どもは儂にこの仕事を回したんじゃ。仕事の内容を見てないのか？」

「多分、見てないと思いますよ。領主からの依頼なんて普通は、武器か装飾品ですから。もっとも評価の高い師匠に回ってきたと思いますよ」

迷惑な話だ。とぼさぼさ頭を搔く。

「それと、もう一枚。紙がありました。簡易説明と書かれております」

弟子の一人がおずおずと言ってくる。こいつのはつきりしない態度は、気に入らんが、手先が器用なのは認めてはいる。

「『まず、櫛を用意してください。髪の毛を梳く櫛です』だそうです」

「はあ？ 櫛なんか何に使うんじゃ？ まあ良い。作るとするか」

「えっと、誰かに借りないんですか？」

「馬鹿野郎！ ここに女やガキがいるか？ それに工匠は、物を作ってナンボだ」

儂は、近くの手近な木材を手に取り加工を始める。

この仕事をやり立ての頃は、櫛やら動物用のブラシ、近年では活版印刷の細々とした文字を毎日毎日作らされたが、充実した日々を送っていた。それも近年はめっきり作る機会が減った。原因は西側諸国との緊張状態で国が剣やら、鎧やらを必要とするためにそんな血生臭いものばかり作って最近は楽しくない。

細々とした物は、下級工匠に回されているのが現状だ。

儂は、体に染みついた作り方で櫛を仕上げた。

「ほれ、出来たぞ」

「ええっと次は『それを逆さにしてください』とのことです」

「したぞ。うん？　これは、この脱穀機って奴に似てるな」

「そうですね。間隔も狭いし、何より歯の数が多いのが共通点ですね。それで『適当な毛を用意してください。動物の毛で結構です』だそうです。なんでしようね」

ふん。と弟子の頭から髪の毛を一つまみ耨り取る。いきなりの事で、弟子が頭を押さえてその場にしゃがみこんだ。

「師匠。止めてくださいよ。外に犬がいるじゃないですか。それ取ってくださいいいでしょ」

「うるせえ！　時間の無駄だ！」

「もう無茶苦茶なんだから。最後に『毛を動かして逆さのまま梳いてください。これが脱穀機の使い方です。先っぽの麦は、歯の間隔の狭さに引っかかり落ちる』とのことです」

「……！！」

儂は、言い知れぬ感動を得た。これはシンプルだが理にかなっている。従来の脱穀方法を知っているが、ありゃ腕が疲れる。それに比べてこれは、ただ引くだけだ。何度も何度も引けば、歯と歯の隙間に引っかかり、千切れる。これは、農家の労力を大幅に減らす事が出来る。

「おい、領主に返事しとけよ。仕事は受け持つ。って注文通り収穫時期までに全農村分は作る。ってな」

「えっと、作らないんじゃないんですか？ 確かに良い依頼ですけど、全農村分ってちよっと一人じゃ無謀な気も……」

「はあ？ なに言ってるやがる。お前も手伝うんだよ！ あと兄弟子どもにも手伝わせるから呼んで来い！」

儂の一喝と共に、慌てて工房を飛び出す弟子など見向きもせず、子ども達の絵を製図する。

これは、櫛の歯の部分と固定された土台を簡易に書かれているが、木の組み用によっちゃあ、分解して使わない時は納屋にでも収めておける。それに金属の歯は全て鋸のこぎりのように繋がっているが、そんなの一部壊れたときに修理するのは大変だ。儂なら一枚一枚細い金属の板を木に嵌め込んで櫛を作る。そうすれば使う鉄の量も少なくて済む。おっ、そうだ。予備の鉄の歯を作っておけば、農家の奴らが勝手に交換し、自力で直せるな。

この脱穀機というアイデアは、儂の中の創作意欲を刺激し、久しく忘れていた物作りの楽しさと呼び起こしてくれた。

「スポパヌス師匠。暇な職人みつけてきましたよ。許可得ましたよ」
「おう、今製図が終わった所だ。こいつは凄いもんになりそうだ」
「あっ、それと言いついてましたけど、領主様は、この脱穀機の特許は、工匠会と領主様の二つの名で管理してほしいとのことですよ」

「そりゃまた。珍しい」

特許なんて物は、金のなる木だ。その技術やアイデアを認められた時点で、他人は勝手に作ることが出来なくなる。作るには使用料を払う必要がある。まあ、その商品が売れば儲かるが使われなければただのアイデアだが。

だから農ら工匠は、新たな技術や製品を作って大当たりすれば自由気ままな道楽人生だって送れるのだ。農から見てもこの脱穀機は、作れば売れる。それを自分ひとりで独占せずに工匠会で登録することとは、特殊なことなのだ。

「まあ、早い所試作品は作っちゃうぞ。それから工匠会の幹部爺どもに試作品と製図を見せて特許申請をする」

「分かりました。暇な職人と僕で土台作るので、師匠と兄弟子は歯を作ってください」

「おう、分かった。分かった。他の奴らには、これが出来たら飯奢ってやる。って言うっておけよ」

そう、冗談を言って弟子は隣の工房で作業する。

試作機が出来るまでには、そう時間は掛からなかった。ただ、問題は耐久試験だ。時期が時期で脱穀し終えた藁（わら）しかなく、探すのに苦労した。いざ、脱穀すると、梃子（てこ）の力が働いて鉄の歯は軒並み曲がっちゃう。もっと厚く、硬く仕上げれば、今度は藁が痛んで、上手く分離できない。それを何度も繰り返してやっと納得のいくものが出来た。

手伝いに来た職人どもは、喜ぶ。儂は、完成品を幹部爺どもに見せた。その用途、価格、耐久性と様々な情報を教えた上で、特許の事を話せば大きく喜び、この脱穀機の製造を工匠会全体で行うことを決定した。

領主にも製図を送りつければ、想像以上の物になっている。と喜んでそうだ。

それからは、地獄の日々だ。毎日毎日、木を削り、漆を塗り、土台を作り。鉄を打ち、何本も同じ歯を作り上げる。それでも儂の物作りへの情熱はまた蘇った。人を殺す道具よりもこういった生活に即した物を作るのは性に合うようだ。とこの歳で感じてしまう。

完成したのは、その年の春先。領主に納品の旨を伝えれば、ちゃんと依頼料が支払われた。ただ、その時驚いたこともあった。

「えっと手紙では『余った鉄は、生活のために使われるのなら結構です』だそうです。結構豪胆な方ですね」

「こりゃ、領主がただの子どもって考えない方が良さそうだな」
「そうですね。ただ、どうやらダイナモ様の残した計画書の通りに進めているって噂があるようですよ」

「それじゃあ、領主じゃなくて周りの人間が優秀なのか？ まあ良い。この鉄は各職人に分けるか。用途は、武器以外だな」

がはははと儂は、久しぶりに腹の底から笑った。この鉄でどんな農具を作ろうか。儂は歳に似合わずわくわくしていた。

工匠会の工匠・スポパヌス（後書き）

おっちゃん視点です。結構無茶苦茶です。

工匠とは、称号です。上級、中級、下級と分かれています。引退した上級や組織運営の老人たちを幹部と言います。割合良好な組織です。

職人とは、工匠会に加盟している技術屋の事です。

技術屋魂ってかっこいいと思います。二の腕の筋肉がムキムキで白いシャツのおっちゃんが出てくる作品って素敵だと思います

閑話：秋のお手紙（前書き）

設定は、第？部が終わったあたりで書く予定です。じゃないと、自分自身混乱しそうです。

ちょっと一休みのお話。ほのぼの成分補充です。

閑話：秋のお手紙

親愛なる私の友達、セフィリアちゃんへ

私は、秋の収穫祭を終えて、友達であるセフィリアちゃんに手紙を書いている。

「今年の収穫祭は、今まで以上に出来の良い野菜や小麦が取れました。これからの短い期間にまた種まきがあります。でも、今年は、小麦がたくさんで、村の備蓄は豊かです」

そうなのだ。二毛作を実施しているこの村では、麦の後に雑穀を撒いて収穫して冬に備える。それが慣習となりつつあったが、今年の小麦は例年になく出来が良い。そのために今年は、白いパンがたくさん食べられそうなのだ。

「後、脱穀機と言うものは本当に便利です。重い棒を振って叩いていたのが嘘のように小麦がバラバラと落ちて子どもでもできるので皆楽しんでやっていました。お父さんたちは、早く仕事が終わったので皆でお酒を飲んでいました」

私は、思う。本当にセフィリアちゃんと出会ってから幸せな事が多い。

私は、村の老人たちに古い神話や葉草の作り方、文字の読み書きと数の数え方を教わって手紙を掛けるほどになった。それが原因で

十歳を迎えたら貴族への奉公の話が出たこともあるが、今年の収穫が終わった時お父さんは、これだけ豊かなら行かなくて良いと言ってくれた。

私は、貴族への奉公の話が嫌だった。家族と離れるし、何より良い噂が少ないのだ。だけどセフィリアちゃんの話してくれたお伽噺を胸に、いつかは幸せになれると信じていた。それは意外にも早く私に訪れたのだ。

亡くなったダイナモ様の政策とその意志を継いでくれたセフィリアちゃんには、感謝が尽きない。

「ダリア。お夕飯よ」

「お母さん、今行く」

今年の冬は、家族で美味しいお夕飯がたくさん食べられる。とても幸せだ。

「本当に今年の収穫は凄かったな。実は重たいし、何よりたくさんとれた」

「そうだな。このままの収穫量だったら、作る畑を減らしても生活ができるんじゃないか？」

「ねえ、お金に余裕があるなら、次の行商が来たら何か買わない？」

お父さんと一番上のお兄ちゃんの話に、新しい物に興味がある二

番目のお姉ちゃんが言う。

「いや、そこまで余裕はないな。だけど、来年も同じくらいの収穫だったら、家族一人一人に何か買ってやれるかもしれないな」

「ホントに、やった!」

「あなた、無理な約束はしないでね」

「無理な約束じゃないさ。これもダイナモ様のご加護だよ」

私の家族は冬に向かうのに今年は明るいです。この会話もセフィリアちゃんの手紙に書こうと思った。ああ、また会いたいな。セフィリアちゃんはダイナモ様程外には出てないらしいので、色々心配もあります。

閑話：秋のお手紙（後書き）

子ども視点での農家の風景。

領主の憂いと冬至祭（前書き）

領主二年目。八歳の秋は、憂いがいっぱい。気分転換に侍女長とお忍びのお買い物

領主の憂いと冬至祭

春が過ぎ、夏が過ぎ、秋が到来した。

領地の各地からは、豊作の報告が届き私もその知らせに領主就任以来、初めて肩の荷が下りた気がした。収穫量の増大と脱穀機の導入による農業の効率化は、随分楽になった、今年は豊作だったのに棍棒を振らなくて済む、いつもの年より早く小麦を貯蔵庫に収められた。との報告と税収の向上は、目に見える成果と言えよう。

これは、一概に私の政策が良かったからとは言えない。お父様が領主に就任する以前の印刷技術は、羊皮紙に内容を書き写す写本という物が主流だった。それをお父様は、その先見性を持って、王都の学術院より活版印刷技術を導入し、豊かな森林を利用した製紙業は町などに新たな仕事を与えた。

木は、樹皮は紙。中は家具や建築に使われ、不揃いな枝や廃棄される木材は薪に、そして伐採した場所に新たな木を植える植林事業。――生前の近代化した世界でも不可能だった再生可能な世界は、お父様の手でシステム化された。

そしてその紙は、税収や戸籍管理などの記録媒体。官職の仕事内容や法令、教会の教本の発布に大きくこの製紙、印刷業は活躍している。ここ十五年の領地の情報の正確さは、そうした紙の存在が大きく関わっているのだ。

もしもこのシステムが確立されていなかったら、私は冬の間自室に籠り手書きで農業指導書の一つずつ作成し、試験農業に携わった人はそれを持って各村に農業指導をしなければならなかった。活版印刷による画一的な読み物が無ければ、私の計画は全領土に伝わるのは、今年一年では無理だっただろう。

計画を全てお父様の残した物とし発表したために、死後もお父様の評価は留まるところを知らない。死してもなお民を守る守護聖人として一部では扱われるほどである。

しかし、これは今年一年のことである。生前の世界では、効率化を求め機械化した結果人間が要らなくなり、職に溢れた人が現れてくる。そうなれば、このシステムは、破綻してしまう。その兆候は、先日届いたダリアからの手紙だ。これは私の考える最悪のシナリオの入り口だった。

小麦などの収穫量が増大して農家が利益を上げるのが今の農家の現状。

その農家の生活サイクル自体は、変化が無い。今までは、税収と自給自足で精いっぱいな感じだった農家が、蓄えることができるようになることは、二つ。更に作って、売って儲けようとする。そして儲けたお金で土地を拡張人を雇う。『地主』へと変化していく。もう一つの流れは、納税と自分の生活のため最低限の仕事で楽して生

きょうとする『減反』である。

こうなれば、農家には、地主と農奴の二種類の身分が存在することになり、また農家の平等性が失われ、職を溢れた者が増えて治安を悪くする可能性がある。これを回避するために、小麦の生産量を調節しながら、各地方に商品価値の高いものを作らなければならぬ。いわゆる専業農家の成立と特産品を生むことだ。

見本とするのは、東の葡萄畑だ。あれは、葡萄をワインにして出荷している。酪農家は、牛乳をチーズに、肉をソーセージやベーコンに加工する。保存性の高い食品に変えて遠方まで売ることができれば、それ専業の農家と言う形で、農業の発達が期待できるだろう。これは、家の中で過ごす女性の仕事としよう。

そして、肉体労働として期待できる男性には、街道の整備、村の整地、周辺の開拓などを領主からの発注で行って貰う。いわゆる公共事業だ。税収が増えたために出来ることの一つだ。

ここまでは良いだろう。だが問題は、どのような特産品をつくるか。である。

「ジーク、キリコ。農業改革は概ね成功と考えて良いわよね」

「何をおっしゃいますか。モラト・リリフィムの民は皆、通年を通して白いパンが食べられる。と言っておられましたぞ」

「それもこれも、セフィリア様の肥料の力です。まさか私の生ごみ

があのような物になるとは思いませんでした」

そうだ。ジークもキリコも現状を満足している。だが生前の知識がある私には、ここは通過点の一つにすぎないのだ。

「何か珍しい野菜や果物を二人は知らない？ それか珍しい食べ物」
「何が珍しいかの定義が分かりかねますな。何をお悩みで」

私は信頼のおける二人に自分の考えている不安を詳しく説明した。二人は、黙って聞いていると、先ほどの喜びの顔に僅かに影が落ちる。

「確かに、言われて気がつきました。ダリア様の手紙からそれを感じ取るとは」

「それと長期の保存が可能な食べ物ですか。確かに王都へと出荷する品は、小麦や蜂蜜、ワイン、ベーコン、ソーセージと言った物が多いのは事実ですね」

「そう、だから来年からは農家には新しい挑戦をして貰いたいのです。だから植物図鑑を読み深めているのですが、良い作物が思い浮かびません」

幾つか目星は付いている。生産数が少なかったカボチャやタマネギ。珍しい香辛料である唐辛子などを考えているが、他に加工しやすく付加価値の高い物と考えるとどうしても限定されてしまう。

「では一番近い町では、もうじき冬至祭りが行われます。農村が野菜を持ち寄り、遠方から珍しい商品も売り出されることでしょう」
「それは良い考えですね。ついでに息抜きをしてこられるのが良いでしょう。あまり根を詰めて倒れられてはいけません」

それもそうだ。と思った。私は、文献でこの世界の文化を知っているが実際の町並みは一度も見ることが無い。移動する範囲は、領主の城と最も近いラムル村だけだ。

それから冬至祭を私達は迎えた。

その日、私は、キャスケット帽に可愛いコートを着て、右手には小さい紙の束、左手にはペン。商人の子ども、と言う設定でキリコと二人お忍びで着ていた。

町には活気があふれ、樽の酒を飲み交わす中年の男たちに、屋台で野菜や肉を売る人々。露天商たちは、遠方の干物や装飾品、本などを売っている。

「キリコ。毎年、こんな感じなの？」

「ええ、今年は特に活気にあふれております。さあ、食べたいものがあればご自由にどうぞ」

私はキリコを引き連れて、野菜を見る。そこで見た物は、私の憂いを打ち払うの十分なものだった。

ネギ、大根、白菜、カブ、ニンニクが並び、ピーマン、トマト、トウモロコシ、フルーツなどは、乾燥させたものやオリーブ油漬けにされた状態で瓶詰されて売っていた。

「これは、ネギですね。どこで取れたのですか？」

「おっ、嬢ちゃん。良く知ってるね。これは家で作ったんだが、今年は豊作だから試しに出してみたんだ。でも全然売れねえ」

「なぜ売れないの？」

「さあな？ 焼く奴は上手いんだけどな」

「一本頂いても良いかしら」

「おう、毎度あり」

私は、次の露天でも話を聞いてみたが、皆美味しい、でも売れない。と言うのだ。

「キリコ。侍女長として意見を聞かせて、今までこれらの食材を扱ったことがある？」

「ありませんね。今までも見たことはありますが、一度も」

「なぜ？ 教会の教えに、食べてはいけない、という食材なの？」

「いいえ、そんなことはありません。ニンニクなどは、滋養強壮に良いと言われております。ただ――」

「ただ？」

「調理方法が無いのです。どれもただ焼くか、煮るか、蒸すか、ですぐに飽きられてしまいますし」

「つまり、料理が無い？」

静かに首肯するキリコ。別に怒ってないのに申し訳なさそうにしているのは、侍女長としての料理のプライドだろう。

「キリコ？　これらの食材で美味しい料理を作ってみない？」

私はそう提案する。

「ジルコニア家の侍女長だけが持つ秘伝の料理。素敵だとは思わない」

私は、悪戯っぽくキリコに微笑めば、もう五十代を過ぎたキリコの顔は、少女のように明るい色を帯びる。普段は型物のキリコがとても可愛らしく見える。

「なら、珍しい食材を買いましょう。今年の冬は二人で料理の研究よ」

「分かりました。それならさっきの露天に戻ってオリーブ油やニンニクを買いましょう。ああ、他にも酢漬けの野菜や酢も買ってみるのも良いかもしれませんね。他にもあちらには白菜やキャベツが……」

生き生きし出すキリコ。私も今はまだ起きない領内の問題を忘れてこの世界の珍しい物を見て回った。

領主の憂いと冬至祭（後書き）

キリコさんが二十代の眼鏡型物メイドだったら素敵だと思います。
でも現実には五十代。

だって、古くから仕える侍女ならそりゃ年喰ってるよ。

新たな味覚（前書き）

商人パライカの視点

新たな味覚

再びジルコニアのお城にやってきました。メペラ師匠は、今年の豊作を聞いて穀物が売れないかもしれないと言いながらも嬉しそうです。だって脱穀機は、仕入れて他の領地に売り込めば、すぐに買われます。だから今年は、メペラ師匠のお財布は温かいです。

今は、領主のお母さんリリー・ジルコニア様と執事のジークフルさんとお話をしています。僕のお仕事は必要のない時は、黙っていることです。

「今年は、豊作で何よりです。このモラト・リリフイムで取れた小麦は質も良く、大量に出回っているので良い値段で取引されております」

「まあ、あの子が聞いたら喜びそうだわ。それで脱穀機の売れ行きはどう？」

「ええ、飛ぶように売れますよ。他の領主直営の小麦畑でも今年はそれを脱穀機を引く光景がみられるそうですよ。それにモラト・リリフイムは名実ともに【グラードリアの食糧庫】と呼べるでしょう」

「まだまだですわ」

謙遜をしながらも本当に嬉しそうに微笑むリリー様。とても綺麗な人だけど、本当は商人の天敵だと知りました。先ほどまで出荷する小麦の量や価格の話や脱穀機の販売などの話を。ジークフルさんにも引けを取らない交渉術と、終始笑顔な為に、内心悟られない腹芸を。正直、商人見習いの僕は取って食われてしまうのではないかと思いました。

「セフィリア様はどのようにお過ごしですか？ 冬の間に暇を持て余しておられるのならまた本を探してまいります」

「それがね。今は、キリコと一緒に料理をしているのよ。今まで女の子らしい事より父の背を追うことに執着していたから嬉しいわ」

「まだ八歳ですからね。簡単な料理ですと、野菜スープやサンドイッチくらいでしょうか。モラト・リリフイムのハムや野菜は素材が良いですからね」

「それがね。キリコと一緒に新しい料理を研究しているのよ。なんでも、ジルコニア家の侍女長に相応しい秘伝の料理を作るんだとか。時折大人っぽいのに、こういうことは子どもっぽいんだから」

苦笑いを浮かべるリリー様。僕は、どんな料理なんだろうと想像して涎が垂れそうになる。

「それで出来はどうですか？」

「なんでも無い物が多いらしくて二人で四苦八苦。あんなに楽しそうに苦労する姿は初めて見たから嬉しいのです」

その時、廊下をばたばたと足音が響く。

「セフィリア様！ 淑女はどのように走りませんよ！ 落ち着きなられてください！」

「お母様！ ジーク！ 出来たわ！ スープが出来たわ」

前見たときの凛々しい姿はどこへ行ったのだろう。エプロンをした金髪の少女は、満面の笑みで部屋に飛び込んでくる。そして僕らがいることを確認して慌てて身なりを整えて、曖昧な笑顔を作って会釈する。

「まあ、それではみなさんで食べましょう。食事はたくさんの方が楽しいわ」

「そうですね。では、ご相伴に預らせていただきます」

僕たちの前に現れたのは、深い容器の中に、白いスープで満たされ、その中には、黄色い麺とハムや茹でられた野菜が綺麗に並べられている。

麺を使っているけど、パスタかな？ でも、パスタのソースとは違うみたいだし、なんで白いんだろう。と思いながらも僕は口を付ける。

濃厚なスープは、塩味だが塩辛い訳ではない。野菜スープなのだろうが濃厚で美味しい。麺はパスタよりも太く、また珍しい味だ。付け合わせのハムや野菜も美味しい。僕は、黙って食べていた。

「はぁ。美味しかった。お腹の中ぽかぽかです。冬の寒い時期にはとても温まります」

「ええ、これは珍しい料理を作られましたね。これはどういった食

材を使っているのですか？」

「ニンニクやニンジン、タマネギ、あとネギにそれから豚の骨を煮込んで、灰汁を取り塩で味を整えました。パスタの麺に卵を多めに混ぜて作りました」

「他にもどういった料理をお作りで？」

「キリコと一緒に、卵とチーズと牛乳を使ったソースにベーコンを混ぜて胡椒で味を調えたパスタや鶏肉をオリーブ油とニンニクでソテーした物、それから挽肉のお団子をキャベツで巻いてトマトソースで煮込んだ物、炒めた野菜や鶏肉をトマトソースで煮込みパスタと絡めた物、それから……」

そのどれもが珍しい食材を利用したり、各地の特産品を使った料理に僕は口の中に唾液が広がるのを感じる。

「それは、美味しそうです」

「ええ、侍女長のキリコのお墨付き、侍女や執事たちにも好評ですよ。ふふ、これならいつでもお嫁にいけるわね」

「お母様。私はここの領主です。領主はお嫁にはいきません！」

「そうだったわね。私の農民としての感覚だったわね」

母子の楽しそうな会話に僕は、とても温かい目で見ていた。

「ジルコニア家の直営店でも作りますか？ 民の間では話題になりますよ」

「師匠。こんな時まで商売の話に繋げないでください」

母親に抱きついていたセフィリア様は、目を丸くしてこっちを見ている。きょんとした表情は、年相応と言った感じだが、次の瞬間には、感動に声を上げる。

「その方法がありましたわ！」

「どうしました！ セフィリア様。落ち着いてください」

侍女長のキリコに抱きつき、目を輝かせる。

「私は間違っていたわ。民に新しい作物への挑戦は必要なかったのよ！ 元々多くの作物がこの領地にはあるもの。でもその食べ方を知らないだけだったんだわ。だから、領主直営店よ！ 各地の生産量の少ない野菜や特産品を利用し、料理を提供。そして美味しい食べ方を知って貰うことで需要を増やし、各地の特産とする。うん。これだわ！」

僕には言っている事は分からないが、つまり、これだけ美味しい料理が、民間で食べられるのだ。嬉しいことだろう。

「メペラ様、少し相談してもよろしいですか？」

「ええ、私の提供したアイデアです。最後まで見届けさせて頂きましょう」

二人は互いに微笑みあっていた。領主のセフィリア様は、リリイ様やジークフルさんと同じように笑顔でその考えを悟らせない。この家の人間は一筋縄ではないことに。

新たな味覚（後書き）

領地の特産品問題解決へ向けて。

作戦は、美味しい物をたくさん食べるために、生産する。これが特産品となるように仕向ける。です。

安直過ぎますかね？

ラーメンの麺はかんすいを使うようですね。知りませんでした。
なので、太めのパスタで代用品です。ごめんなさい

直営店・ニール・ストール（前書き）

営業開始された直営店。果たしてその成果はいかに

直営店・ニーレ・ストール

私は、このモラト・リリフィムの中央に位置する町で今話題の創作料理店に来ていた。

領主直営の創作料理店、ニーレ・ストールは、入れ替わり立ち替わり人が入っている。店内には、聞いたことのないような料理名と共に、詳しい説明の書かれたボードがあり、客はそれを見ながら料理を注文する。

「あっ、メペラさん。今日はどうしたんですか？」

「野菜を届けに来たついでに寄っただけです。調子はどうですか？」

私を見つけた従業員の女性が声を掛けてきた。

「ええ、多くのお客さんが満足しています。貴族に仕える侍女の創作料理だから敷居が高いと思われるのですがとても庶民的で、最近では噂で遠くから人が集まってきました。特に、寒い冬には、温かいロールキャベツ、やラーメンが人気ですね」

店内の雰囲気は、貴族直営店とは思えない質素さ。表看板に直営の文字が無ければただの酒場と思われるでも仕方が無いほどだ。

「では、私も食べていきましょう。そうですね。パライカは何が食べたいですか？」

「えっと、僕は、ロールキャベツとナポリタンを食べてみたいです」

「では、私は、鶏肉のガーリックソテーと煮込みハンバーグを」

「分かりました。あちらの席へどうぞ」

そう言って案内されたテーブルからは、色んな人が見ることができた。

あの恰好は、新しい物好きの商人だろう、ほかにも靴が汚れた男は野菜を売りに来た農民、あっちで酒を飲み交わしている男たちは、工匠だろう。まるでこの領地の縮図のように同じ店で楽しく食事をしている。

周囲の会話に耳を傾ければ、中々興味深い会話が聞き取ることができた。

「俺、ニンニクを家で作っているんだけど、この料理の作り方教えてくれるか？ 嫁さんにも作れそうだ」

「では、こちらがレシピになります。どうぞ、奥様や周囲の皆さまにも振る舞ってください」

そうして、従業員がエプロンのポケットから一枚の紙を渡す。なるほど、セフィリア様の言っていた需要を増して特産品にするとはこのことか。

あの農民は、自分の家で食べる分だけのニンニクを作ってるが、美味しい調理法を提供することで来年には、もっと多くの量を作るだろう。そして周囲にその味が広まれば、更に需要が増える。こうして特産品が生まれるようにするのだ。

さあ、どのような特産品がこのモラト・リリフイムに生まれるのか今から楽しみで仕様が無い。

「お待たせしました。料理はこちらになります。ごゆっくりと」

「わあ、どれも良い匂い！」

「そうですね。頂きましょう」

私は考えるのを中断して、料理に舌鼓を打つ。これはまた本当に庶民的だ。それでいて上品な味。民との距離も近い貴族が出せる味なのかもしれない。と思う。

もうじき冬が終わり、春になる。そうなれば取れる野菜が一変する。冬の野菜から夏の野菜。そしたら、また別の料理が追加されるかもしれない。その頃にはもう一度ここに来よう。

直営店・ニール・ストール（後書き）

運営は良好なようです。ただ、従業員の経費や生産数の少ない野菜、その少ない野菜の運搬費で利益はほとんどないようです。

むしろセフィリアは、野菜の価値向上のために赤字覚悟だったようです。

三年目の試みは……(前書き)

何も無かったりする

三年目の試みは……

「セフィリア様。今年は、何も主だった政策は提案しないでください」

春。これからが種蒔きの時期にどのような作物を栽培しようかと画策している時にジークに釘を刺された。だから、私はあえて言っている意味を分からないと言う風に答える。

「どうして？ 特産品が増えればそれに伴う税金も増える。公共事業で街道の利用を早く安全に行き来できるようになれば、悪いことはないわ」

「ここ数年は、ダイナモ様の残した政策と言うことでセフィリア様を表舞台から遠ざけ、政策を取ってきました。また直営店も侍女長キリコの創作料理が表向き。セフィリア様の存在は『父の意志を継いだ子ども領主』という評価が領民の間では定着しております。ですがこれ以上大々的な政策は、他の諸侯の目に止まってしまいます」

確かに、それは私も考えていた。急激に力を持てば、あることないこと噂される。最悪、国家反逆罪で仕立て上げられて領地没収となれば、現代知識を利用した領内の発展は潰えることになる。能ある鷹は爪を隠すとは、良く言ったものだ。

「でも、私は止まるわけにはいかないわ。一日でも早い特産品の開発と街道整備。これが第一の目的よ」

私のはつきりと言えば、ジークはとても渋い表情をしている。

「セフィリア様は、まだ八歳。生き急ぐことはないのです」

「ジーク、私はもうじき九歳よ。私も考えてないわけじゃないわ。街道整備の事だけど、少しずつ進めていくつもりよ。五年を目途に中央の町から大きめの農村を繋ぐ太い街道を限定的に整備するの。その他の細い街道は、不作の年の公共事業として……」

「セフィリア様！」

私が得意げに話している時、ジークは怒鳴り声を上げた。今まで叱るときは、落ち着いた優しい口調の彼のそんな声を初めて聞いた。

「ど、どうしたの？ そんな怖い顔して」

「セフィリア様、あなたの意志は素晴らしいですが……」

膝について私の肩を掴んでくる。その手に込められた力は、痛くはないが子どもの力では外せない。

「あなたの身体は、あなた一人の身体ではないのです。もしも倒れた時、私は、我ら領民はどうなるのです。今の仕事だって我ら執事や侍女たちが出来る仕事です。我らは、掃いて捨てていただいて構いませぬ」

「……痛いわ。ジーク」

「申し訳ありません。一介の執事、出過ぎた真似を」

私の肩から手を離し、ジークは深く頭を下げる。この世界に生まれて初めてここまで強く叱ってくれた。今までは生前の記憶で、善悪の区別がついたために注意される以上の事はなかった。また私の立場は、領主。その立場からやはり叱れる者が少ない中でこうして叱ってくれたジークには感謝しなくてはならない。ただ、黙って聞き逃すことの出来ない言葉もあった。

「ジーク、心配は嬉しいわ。でも掃いて捨てる、という言葉は聞き捨てなりません。私から執事長に罰を言い渡します」

「……セフィリア様」

どのような罰でも受ける。と言った感じでジークは深く頭を下げ、目を瞑っている。

「これから私は休憩に入ります。キリコと一緒に新しい料理を作ります。その試作品を食べてください」

「セフィリア様。それは罰ではないのでは」

「また口答えですか。では更に罰を追加して、お母様や私達の分のお茶の準備もよろしくお願いします」

ジークは目を丸くして、今度こそ私の罰を受け取る。

私は、満足げに笑って返せば、ジークは苦笑を浮かべて返してくれる。

「あと、ジーク。今年は、休養と言うことで、各地への視察を許可していただけますか？」

「分かりました。日程は私が管理します。リリー様と共に親子の時間を過ごしてくださいませ」

その返答に私は、上機嫌で厨房に向かう。

途中であった侍女や執事達は、私の様子を見て、笑顔で見つめている。

厨房では、既にキリコが料理の準備をしていた。だから、キリコには特別さっきの事を話そうかと思う。

「ジークがね。私を心配してくれたわ。急に怒鳴ったのは驚いたけど、とても嬉しいわ。それに、今年は多くの視察を許可してくれたわ」

「左様でございますか。ジークフルは、セフィリア様の事を孫のよう可愛がっております。存分に我わに頼ってください」

「ええ、キリコの舌と料理の技術は信頼しているわ」

ニーレ・ストールで創作料理として出してる料理は、私がアイデアや構想を提案しているだけの現状。いくら生前、図書館で料理マンガを読み漁り知識を持っていると言ってもレシピは、うろ覚え。私が食べたことのある料理なら大凡出来るが、やはり素人の感覚。一応、この世界の料理のレシピを調べてみたが、ハンバーグはあっても煮込みハンバーグは無い。シチューはあるが、ビーフシチューは無い。と言った具合で存外、やり応えがある。

その素人のアイディアからキリコと共に試行錯誤を繰り返し、夏の追加メニューのレシピを完成させている。

実は、最近料理が趣味の一つになりつつあるのだ。

「セフィリア様。今日はどのような料理をお作りになるおつもりで？」

「それはね。オリーブ油を混ぜたパン生地を薄く延ばして、トマトソースを塗って好きな具を並べたら、チーズで蓋をするの。季節によって上に乗る具が変われば、一年の長い時期を通して食べられるでしょ？」

「では、パン生地は、どれほどの大きさと厚さで」

「うーん。これくらい？ それとも、もうちょつと大きく？」

私が生地の短い手で円を描くが、どうもしっくりこない。あれって大きすぎて特に決まって無かった気がする。

「分かりました。二枚作ってみましょう。そうすれば、具の組み合わせも考えられますし」

「そうね。小さめの生地には、タマネギ、ピーマン、ベーコン。大きめの生地には、スライストマト、ソーセージ、あと、アスパラも良いかも」

「それと、香草なども使ってみてはいかがでしょう？ 香りは食欲を増進させますぞ」

「良い考えね」

私達は、延棒でちぎったパン生地を円形に伸ばし、トマトソース

と重ねて塗る。その上からたくさんのタマネギやピーマンなどの具をばら撒き、最後に細かく刻んだチーズを振りかけて竈に入れる。

私は、奥で真っ赤に燃える竈の熱気にな得ながら、熱で焼かれる生地を眺める。チーズが良い感じで解けてきた。ああっ！火に近い方が少し焼け過ぎてるかも、生地を回して熱の伝わり方を均一にしないと、あとちょっと、うん、もう少し……今だ！

取り出した生地の上のチーズは、ぷつぷつと沸き立ち、オリーブ油とチーズの香りが食欲をそそる。

「完成ですか？ 小さい生地でも結構な量だと思うのですが」

「違うわ。これを八等分や十等分に切るの。こう、三角形の形になるでしょ？ 端の所も持って先っぽから食べるの」

切り分けて、一切れその場で食べて見せる。うん、昔食べたものよりも断然美味しい。素材も良い、何より自分の手で作った料理は、一層美味しく感じる。

「セフィリア様の考えは、本当に庶民らしい料理ですね」

「そうなの？」

「ええ、貴族の食事とは、厳かな雰囲気を重ね、マナーに縛られて食べるものです。また社交界などのパーティーは、立ちながら簡単に食べられると言っても、素手で食べるなどと言うことは一切ありません」

「そうね。でも私の料理は、どちらかと言うと合理的なアイディアだと思うわ。領内にある食材を余すところなく美味しく頂く料理。」

それがこういった庶民に親しみやすい姿に変わるのよ。だから、キリコも食べましょう」

私は、一切れお皿に移してキリコに差し出す。それを受けたキリコは、頬を綻ばせる。

「ピーマンは、早い出来で苦みが強いですが美味しいです。チーズが蕩けて良い香りです。これなら魚介類を乗せても美味しいのではないのでしょうか？」

「でもこのモラト・リリフイムには海は無いわ。いつか海に行ったら、魚介のピザを作りましょう」

私達がピザの感想を言い合っている間にも、二枚目が出来た。

「これを持って休憩中の使用人やお母様に振る舞いましょう。今頃、ジークがお茶の用意をしているはずよ」

「そうですね。私が庭先に運んで置きますので、セフィリア様は先に待っていてください」

「私が皆を呼んでまいります。皆の期待する顔から綻ぶ顔を見るのが楽しみなの」

「分かりました。楽しんでください」

そう言って、キリコに送り出された。

快晴の空の下、ジルコニア家の庭では使用人たちの笑顔が見られる。毎回出来る食べたこともない料理がこの城に仕えているために一番最初に食べられる。そんな役得に幸せそうに目を細める皆の顔を嬉しそうに私は眺めていた。

三年目の試みは……（後書き）

- ・セフィリアは、領主三年目の春を迎えた。
- ・セフィリアは、新たな趣味として料理を獲得した。
- ・セフィリアのレシピに、ピザが追加された。

ゲーム風に纏めてみました。まえがきとあとがきは、基本おふざけです。遅いですがご了承ください。

役人子爵・イラケス子爵（前書き）

少し変わった青年子爵さんの領地の視察風景

役人子爵・イラケス子爵

私は、北西のとある村に来ていた。今日は、工匠会の依頼品を届けるついでに視察に来ていた。

「あれまー、イラケスさん。いらっしやい。今日はどうしたの？」

「今日は、村長に届け物ですよ。村長いらっしやいます？」

「そろそろ戻ってきますよ。ただ鼻摘まんでた方が良いでしょう」

のどかな小麦畑と遠くに見える牧草地から風に運ばれて若草の香りが鼻に届く中で、なぜ鼻を摘ままなければならぬのか分からなかった。

だが、その答えはすぐに分かってしまった。

「おう、貴族の兄ちゃんじゃねえか！ どうした？ 今日は」

「うっ、くさっ……」

泥だらけで現れた村長に顔を顰め、咄嗟に息を止める。服は汚れ、蠅を引き連れているために近付きたくない。

「がはははっ、皆最初は、この臭いにやられるんだよな」

「なんですか、この臭いは」

私は、涙目になりながらも尋ねる。酷い臭いに逃げ出したくなるが、そもいかな。

「肥貯だよ、肥貯。村中の動物の糞を穴に埋めてる途中に足滑らせて、落ちたんだ。まあ、風下に設置したから村中がこの臭いに包まれることは無いがな」

「早く洗ってきてください！」

「おう、分かった分かった」

陽気に愉快に、そう表現が適切な村長が服を脱ぎ、水を貯めている桶の水を頭から被り汚れを一気に流す。それだけで臭いは減るが、やはりまだ臭う。

「おう、終わったぞ」

「川に行って全身を洗ってきてくださいよ。それじゃあ、汚れが落ちませんよ」

「後で行くよ。それで用件はなんだ？」

「工匠会から脱穀機の予備の歯を預かってきました。それと視察に来ました。なにか領主に要望があれば言ってください」

「全く、ホントにこの領地の貴族は貴族らしくねえな。普通の貴族なんて俺らのような農民に要望聞かねえぞ」

「同意します」

「まあ、あんたが一番変な貴族だがな」

「それは遺憾ですね」

私は、イラケス・ファールウ子爵。爵位四位の貴族なのだが、あ

まり貴族らしくない。

一般人の貴族のイメージとしては、毎晩社交界でワインや美味しい料理を飲み食いしている知識人のようだが、現実が違う。領主階級の貴族はそういう生活らしいが、子爵以下の貴族は、領地は無く、ただ給料の良い役人仕事をしているだけだ。

この王国の領地の分け方は、王都と二十四の領地からなるだが、それ一つ一つは大きい。それを一人の領主で統治しようなど無理があるで普通の領主は、更に分割して軍人貴族に領地を代理統治させて代わりに有事の際は軍隊を招集させる方式を取っている。そのために立場や運が良ければ、子爵や男爵でも社交界に出席する機会を得られる。それ以外の下級貴族だって選民意識が強く、税制優遇などで農民よりも遥かに贅沢ができる。

まあこのモラト・リリフィムでは、徹底的な組織化と役人の増員、税の還元で下級貴族と農民の差があまりない。そのために、領主一人が子どもでもこの広大な土地を管理できるのだ。

「最近はどうですか？ その肥野で作った肥料って奴は」

「不思議な事にあれだけ痩せた土地も肥料を混ぜて耕せば元気な野菜が出来るんだ。ちょっと元気ねえな。と思った作物に追加すれば、他と大差ない程度に成長するんだ。村の備蓄も豊かで去年から冬の心配はないくらいだ」

「そうですか。今年も美味しい野菜を期待できそうですね」

そういつて私は聞いた事を紙にメモしていく。視察なのだから聞き取ったことを報告しないといけないからだ。

「あー、でもよ。問題はあるんだよな」

「なんですか？」

「金が余る」

「あー、なるほど」

金が余るがなぜ問題なのか、とはこの周辺の環境を見れば分かる。何もないのだ。酒場も雑貨屋も何もない。物が欲しければ、物々交換。家具なんかは、町へ行くより作った方が早い。

町に行けば、お金は必需品。だが多くの農村は、税を納めるために得るだけである。ここ最近では、豊作が続いて小麦や野菜が多く売れるので、その分手元に残るお金が増える。まあ、余ると言っても納税二年分がせいぜいなのだが。

「でも貯めておいてくださいよ。いつ飢饉になるか分からないんですから。小麦が一切取れないと、その年は、そのお金で生活しなきゃいけないんですから」

「分かってるよ。せいぜい行商が来た時に使うって」

「他に何かありますか？」

「ある。大ありだ」

急に神秘的な表情になる村長に私も息を呑む。

「お前、町の役人なんだろう！ 町で噂の直営店の料理はどんな味なんだよ！」

「あー、あのニーレ・ストールってお店ですか？ 私は入ったことないんですよ。貴族の料理って敷居が高そうで」

「おまえ、本当に貴族か？」

「うっ……でも、仕事でこっちの視察に来ると決まった時にこれを渡されたんですよ」

私は、荷物の中にある紙に穴を開けて紐を通したただけの本を取り出す。

「そのお店の料理の作り方が載っているそうです。なんでもセフィリア様の配慮だそうですよ」

「うおおおおお！ 子ども領主様、万歳！」

「止めてくださいよ。村長、皆見てますから」

私がジトつとした目付きで見るのだが、村長の興奮は天井知らず。

「おーい、ヨニール。料理作ってくれ！ 皆に振る舞うぞ！ てか、酒も飲むぞ！」

「喧しい！ 黙ってもう一仕事していきな！」

「よーし、貴族の兄ちゃんも一仕事汗掻いて、飯と酒食うぞ！ 俺の奢りだ！」

「えっ、嫌ですよ！ まだ仕事中ですし！ って抱きつかないでください！ 臭いですって」

「貴族なのに言葉遣いになってないな！ ホントに貴族か？」

「貴族です！　ただ、貧乏ですけど！」

がはははっ、と豪快に笑う北西の村の村長と引きずられていく私。持ちなれない鍬を振り、素手で野菜を収穫したりで服が汚れた。もうこの格好で帰ったらなんて言われるか分からない。

私は、作業中にふと、気がついた事を言う。

「キノコが無いですね。キノコのシチューが好きなんですよ。私」

「はあ？　キノコは畑じゃ取れんぞ。森の中に行かなきゃな」

「えっ、野菜じゃないんですか？」

「馬鹿野郎、キノコは野菜じゃねえ！　これだから貴族は農業知らねえんだな！　あと、蜂蜜も山で取れるぞ」

「なんでですか？」

「蜂の巣は山に多いんだよ。まあ、牛舎の屋根に巣作ることはあるけど、殆ど大きくなる前に退けちまう」

「勿体ないですね」

「馬鹿か？　蜂に大群で襲われたら、死なないまでも刺されて腫れあがる。それに、牛や馬が刺されて暴れられたら堪ったもんじゃない。それで怪我人や死人が出たことだってある。

俺達が蜂の巣を落とす時は、藁を燃やした煙で全部追い払ってから棒で巣を落とすんだが、それでも危ないから蜂蜜は高級品扱いなんだ」

「へえ」

農家の話は面白い。私自身、貴族になんの感慨もないので貴族を

止めて農家にでも転職しようかとさえ思った。

「料理出来たわよ！ なんでもピザって料理らしいわ！」

「おう、今行く。ほら、イラケスの兄ちゃんも食いに行くぞ」

「では、お付き合いさせていただきます」

薄いパン生地に、真っ赤なソースとベーコンのチーズの載った料理をみんなは素手で食べていた。

「なんで素手で食べるんですか？ ナイフやフォーク使わないんですか？」

「どうやらこれが正しい食べ方らしいわよ。ほら、あんたもお食べ」

村長の奥さんに勧められ、素手で一切れ掴む。

とろりと垂れるチーズに慌てて私は口の中に押し込む。その味は、とても貴族らしからぬ親しみやすさを持っていた。まるでこの領地のように優しく口の中に広がる。

「そうだ。報告書にこのことを書こう」

後日、役所に帰った私は、北西の村の温かみ、村長の豪快な性格、野菜の生育状況、お金の使い道が無いこと、キノコと蜂蜜は山で採れること。そして、ピザが私のお気に入り料理になったこと。

それを所長のコンリーエ子爵に提出したら、怒られた。

役人子爵・イラケス子爵（後書き）

社交界に出席する貴族は、その家族含めて百数十人はいる設定です。今回は、質問にあった貨幣制度の状況についても織り交ぜての農民視点で領地の状況中間報告。

貨幣状況は、町では浸透しているが、農村部ではまだ物々交換が主流。お金があれば嬉しいが、無くてもどうってことないものです。

キノコや蜂蜜は、山の恵みです。夏野菜の季節が終わる秋に山で多く収穫されて、乾燥キノコにされて町に行きます。

蜂蜜が高級品な理由は、危険だからです。貴重な甘味料として貴族に重宝されています。庶民は手が届きません

最後に、イラケスさんの報告書はちゃんと領主に届けられました。変わっているが、ちゃんと農民視点で書かれているからです。

港町という窓から見えるのは（前書き）

ちよつとした世界観補足会です。

港町のいう窓から見えるのは

私は、この夏初めての遠出をしている。

お母様と侍女長のキリコ。それと若手の執事に旅の必需品やお土産と共に馬車に揺られ、モラト・リリフイムの東。ランドルス侯爵領の最大の港町・エラネットに来ていた。夏の照りつけるような太陽の下で豊富な魚介類と海上貿易で運ばれる他国の商品で栄える東最大の町へ赴いたのには、訳があった。

「セフィリア様。今年もランドルス侯爵家のキュピル様から立食会の御誘いが来ております」

立食会とは、昼間行われる社交界だ。基本は子どもの社交界訓練のために開かれたり、誕生日を祝うために開かれているのだが、私自身行く気も行く暇もなかったのだが。

「毎年多忙を理由に断っていたけど、今年は視察を重点的にしているからどうしましょう？」

「会場は、港町のエラネットでございます。港町ならではの商品や料理を奥様と楽しんでこられてはいかがでしょうか？」

「分かったわ。諸外国の貿易品で領地に栽培してみたい作物があれば、買ってくることにしましょう」

「では、計画を調整しておきます」

お父様の作り上げた組織は私の不在でも有事に対処できる。エラネットへは、往復で一週間ほどの旅。その途中の農村に視察まではいかないが、挨拶も出来るので悪いことではないとその時思っていた。向かう農村では、元気な姿に多くの村民は安心を持ち、私がお父様の意志を継いでいる事を宣言すれば、賛同してくださる。

それから領地の悪路を実感しつつ、領地境界の関所を抜けて辿り着いた港町の塩の香りに私は、興奮していた。

「セフィリア。あまりはしゃぎ過ぎないのよ」

「分かっております。お母様はゆっくりしてください」

目に映る物は、生前の異世界では見劣りするが、この世界、いや私の領地では手に入り難い物が多くあった。

その多くは魚だったり、貝だったり海の幸がほとんどであった。

「これは、随分大きいお魚ですね」

「おう、今朝取れたたでぜ」

「この他にも保存性の高い魚はありますか？」

「保存性？ ああ、長持ちするね。それだったら、やっぱり干物だな。あとあっちの方に、内臓取り出して燻製にした魚なんかも並んでいるぞ」

「ありがとうございます。では、エビを頂きましょうか。二十四ほど、あと干物と燻製のお魚も」

「おう、毎度」

私から代金を受け取る露店のお兄さんは、そう言うてにかつと歯を見せる。その後も私は、キリコとお母様と一緒に市場を歩いた。私は装飾品には興味は無いのだが、お母様は値打ちの装飾品を見つけており購入した。お母様には不釣り合いなほど煌びやかなネックレスだったので尋ねたら「今度、メペラさんが来たら買って貰うんです」との事。流石商人の血筋が含まれているだけあって強かだ。

私は、根気よくある様々な物について聞いた。

城で見る資料では限界があるので、こうして物資の流動が激しい港町で話を聞くことができたのは有意義だった。

まずは、南方の状況だ。南方は、ここより温暖なために砂糖黍や多くのスパイスを栽培、輸出している。ただ南方の海上航路での輸送の危険性は非常に高く、その分割高になってしまっているのが現状だ。せめて領地で甘味料の生産を考えているのだが、砂糖黍さとうきびでの生産は気候には不向きなようだ。落胆しかけた私は、北方のエラヴェール皇国からも極少量の砂糖は取れる話を聞いたが詳しい話は聞けなかった。帰ってより詳しい調査が必要になった。

続いて、西方の状況だ。

グラードリア王国の国土の半分を有する西方領地とそれに隣接する諸国は、数十年に渡り小さな衝突を繰り返している。

輸出品の中にモラト・リリフイムの小麦が多くあるのは、戦場での兵士の食糧になると聞けば、少し複雑な心境になる。

領主直属の軍人である騎士たちの少ないモラト・リリフイムは、北方が友好国であると同時に、周辺に領地が囲っているのも、もしもの軍はあまり必要が無い。そのために農民に兵役を課すことは無いのだが、別の視点で言えばこれは小麦で兵を借りて平和を守って

いるのだ。

農民が作った小麦を西方や周辺領地へと売られ、それがあつたために兵士は戦える。逆に小麦を売らなければ、兵の戦線は維持できずにこちらが戦火に巻き込まれる可能性がある。

平和の裏の戦火。戦火の上の繁栄。

これは割り切れるものではない。どうすることも出来ない。

「セフィリア様、もうお買い物はよろしいですか？」

「ええ、立食会へと参りましょう。そこで買ったばかりのエビを使ったピザを作りましょう？」

私は努めて明るく答える。キリコは今の話を聞いた私を心配してくれたようだが私は平気だった。

「セフィリア。こういう時まで自分の使命に忠実に生きなくて良いの。今日は久しぶりにお友達に会うのだから大人にならなくて良いのよ」

「分かりました。お母様」

そっと肩に手を添えられた私は、その手に自分の手を重ねて呟く。

「では行きましょう。キュピルくん、我がモラト・リリフイム領の料理を振る舞うのです」

「ええ、その意気だわ」

「ご立派です。セフィリア様」

二人を促し私達は、ランドルス侯爵の城を目指した。

港町のいう窓から見えるのは（後書き）

感想に、料理名がいきなり出てきたので違和感を覚えた。というものがありません。

料理の名前や由来を新たに考えたり、既存の料理の名前を振ると更に違和感を覚えると思って料理名は、ストレートに分かりやすく書きました。

貴族の立食会（前書き）

・多くの指摘ありがとうございます。その指摘も今後の物語に上手く絡めたいと思います。

今回は、久々登場のとある貴族少年の視点

貴族の立食会

僕は、朝から待ち切れず自分の部屋の中を忙しく歩いてきた。久しぶりに会えるのだ。四年ぶりだ。最後にあったのは、彼女の城で僕は得意の軍盤で負けた。優しい笑顔で微笑んでくれるセフィアの姿が忘れられない。でも、もっと忘れられないのはジークに負けて悔しそうにする彼女の顔だ。

もっと彼女の色々な顔を見たい。姿を見たい。そう思って毎年この時期の立食会に招待状を送るのだが、去年一昨年は来れなかった。理由は知っているが残念で仕方が無い。

しかし今年は来てくれた。僕は彼女に言うんだ。――僕の妻になってくれ。って。

「キュピル様、そろそろお時間です」
「分かった。行くよ」

僕は、仕立て上げられた正装で屋敷のホールへと向かう。既に父上が招待客である領内の貴族たちと話をしていたので、僕は、父上に並び挨拶をする。

「お久しぶりでございます。ハウブ子爵、レイモン男爵」
「キュピル、久しいではないか、塩梅はどうだ？」

「なんでも直接海軍へ赴き軍盤の師事を仰いでいるそうじゃないか」
「はい、僕も父のような立派な將軍になりたいので。そして、軍盤で勝ちたい人がいるんです」

僕が丁寧に応えれば、父はその背を叩きながら、大いに笑う。

「今日は、親しい者だけを集めた立食会だ。お前も特に言葉に気を
使う必要はないぞ」

「父上、親しき仲にも礼儀あり、ですよ」

「ははは、ランドルス侯爵も息子には型なしですな」

二人の貴族に笑われるも父上は、逆に笑っている。東の海上將軍は、多少にことで動じない。

「父上、彼女は来ておりますか？」

「うん？　彼女とは誰だ？　淑女たちはあちらで談笑の真っ最中だが」

茶化す様に会場に集まっている目に痛い金の刺繍のドレスを着た少し年上の少女たちにウィンクをする父上。全く、子どもをからかうのは止めてほしい。

「違いますよ。セフィリア・ジルコニアは来ておらないのですか？」
「まだだな。まあ、時間ではないし、そう焦るな」

「ほほう、モラト・リリフィムの領主様がこちらに来られるのですか？」

「領主に就任しても滅多に表に出ないと聞いておりましたが、婚約者という噂も聞いておりますぞ」

「いやいや、亡くなったダイナモとは良き友だったが、その噂は嘘だ。彼の娘であるセフィリア嬢と息子を合わせた事があるがな。とても聡明なお嬢さんだったぞ」

父上は、朗々と話していた二人の貴族に簡単な説明をしている時、入り口からしんと水を打つように静まり返る。

何事かと目を向ければ、金髪、紅眼の美少女が、同じ髪で同じ顔立ちの母親と五十代を超えた侍女を引き連れてこちらに歩いてくる。僕は、そのあまりの凜然とした姿に目が離せなくなる。

「ご無沙汰しております、ランドルス侯爵。このような場にお招き頂きありがとうございます」

「久しぶりですな。セフィリア嬢。いやジルコニア伯爵とお呼びするべきべきかな？」

「セフィリア嬢で構いません。私はまだ伯爵という器ありませんから。それにジルコニア伯爵はお父様を差す言葉ですので……」

「そうか……。ここは俺の親しい者が集まった立食会だ。子ども同士気楽に話すと良い」

「お心遣い痛み入ります。キリコ、礼に物をお願い」

半歩後に待機していた侍女は、手に持つ革張りのトランクを開く。

「こちらは、私が領主に就任してから献上された最上級のワインです。ランドルス侯爵はお父様と旧知の仲と聞いております。よろしければ、こちらをお受け取ってください」

「良いのか？　ここ数年のモラト・リリフィム産の赤ワインは中央でも高値で取引されるほど出来が良いと聞くが？」

「ええ、華やかよりも質素を好むお父様ならば、中央貴族の元に売られるのならば友と飲み明かそうとするでしょう」

「分かった。ありがたく受け取る事にしよう」

侍女長のキリコから近くの執事がトランクを受け取りどこかへ持っていく。父上の表情は先ほどまでの陽気な雰囲気から苦い物でも食べたかのように顰められていた。

前に会った時の優しい少女然とした表情とは別で、酷く大人びた雰囲気は父上もどう声を掛けて良いのか分からないようだ。

目線で僕に声にかけるように指示をするが、僕だってどうセフィに声を掛けて良いか分からない。

十秒か、一分か、五分か、緊張で時間が長く引き伸ばされた気がする。それでも僕は、目の前の少女に声を掛ける。

「セ、セフィー？」

「久しぶりね。キュピルくん」

すつ、と先ほどまでの凜然とした姿は幻のように消え去る。昔と変わらない子どもらしい笑顔。言いたい事や話したい事がいっぱいあったのだが、全部忘れてしまった。

「セフィーが領主をしているのを聞いたよ。大丈夫？」

「大丈夫、お母様やキリコ、ジーク。それに騎士や役人が皆力を貸してくれるわ」

近くにいたジルコニア夫人に微笑み掛けるセフィーに安堵する。
ちゃんと話ができる。

「キュピルくんは何をしてるの？」

「僕！？ 僕は、えっと勉強とかをしていたよ。父上に追い付くために、海軍で剣の練習や僕らの創ったゲームや軍盤を」
「そうなんだ」

彼女も安心したのか、ほっと短い溜息をこぼす。

「ねえ、セフィー。久しぶりに会ったし、勝負しない？」

「勝負？ 軍盤」

「うん」

僕は、今までの考えていた過程を全て飛ばしてそんなことを口走ってしまった。だが、目の前の少女は即答した。

「いいわ。冬の間はジークに鍛えて貰っているから前より強いのよ」

「僕だって海軍の参謀に直接教えて貰っているんだ」

「じゃあ、やりましょう」

僕らは、軍盤を用意し互いに対面する。周囲にいる貴族やその子どもたちも僕らの対局に注目する。

「じゃあ、先行は僕が貰うね」

「分かったわ」

僕は、常道通り、突撃力の高い使徒兵の動き易いように歩兵を動かす。セフィーも同様に常道で動かす。しばし常道で動くのだが、次第に局面が僕の攻め、セフィーの守りに変わる。だが昔と同じでセフィーの守りは硬く、下手に攻めれば、最小限の被害で駒が奪われる。かと言って無駄に時間を掛ければ、僕の奪われた駒がセフィーの守りとは別で攻めに転じてくる。

ただ昔と違うのは、僕の手元にある駒が集中していることだ。騎馬兵と斥候兵。突撃力、移動力の高いこの二駒を一直直進に並べ、突貫の掛ける。

一列目に騎馬兵が歩兵を奪い陣地に食い込む。だが元々捨て駒。互いに三手以内にこの駒を使えない。次は斥候兵で騎馬兵を奪った重槍兵と交換だ。王手だが使徒兵が動き奪われる。

二手三手と繰り返し、奪う奪われるでこちらは総力戦で奪ったが、結果は駄目だった。詰めが甘い。最後は詰め切れずに、三手前に奪われた騎馬兵がこちらの王に向かってきたのだ。

「負けた」

「強くなったわ。前は、ただ無為な突撃を繰り返していたのが、今度は一極集中の攻めだった。危なかった」

「でも、負けたよ。セフィー強過ぎる」

僕らの周りの貴族たちは皆、僕が勝つと思っていたようで、間拔けな顔をしているのが少し笑えた。

セフィーを田舎貴族だと思っているのが殆どだろう。だけど、セフィーの軍盤は多分下っ端軍人でも敵わないほどだ。

「どうする？ またやる？」

「いや、大人しく負けを認めるよ。今は立食会だ。次は食事でもしようか」

「なら、キリコに作らせましょう。朝一番で港で買ってきたエビで作りたい料理があるの」

「料理？ セフィーは領主でしょ？」

「あら、私は領主以前に女の子よ」

口を尖らせて不服を言うセフィー。そうだ、女の子らしい女の子だ。金の刺繍などないシンプルな桃色のドレスだが、セフィー自身が素敵過ぎてもう他が見えないくらいだ。

それからしばらく待って出てきた料理は、円形のパン生地が放射状に切り込みの入った料理だ。見たこともないが、その上に乗るトマトソースとエビとチーズが香ばしい匂いを振りまく。

「私とキリコで考えたの。こうやって食べるのよ」

「えっ、素手で!？」

立食会では、取り皿とフォークで自由に並べられた料理を食べる

様式な為に、取り皿に乗せられたパン生地を素手で食べるセフィーに驚く。

だが、こういった食べ方が正しいの。と言われれば、そう従う。アツアツのチーズがとろんと溶けて、慌てて大口開けて食べる。

「美味しい」

率直な感想だ。新鮮なエビとトマトとチーズが良くあう。更に、生地のオリーブ油の香りがまた良いアクセントを生んでいる。

「他にも、モラト・リリフィムには新しい料理があるのよ」

「良いな、食べてみたいな」

「領地の特産品が生まれれば、周りにそれを使った料理がきっと広まるわ」

セフィーは嬉しそうに語る。

僕は、この姿に今は満足して言いたかった言葉を言えなかった。

貴族の立食会（後書き）

キュピルの初恋が精神年齢三十歳超えのお方だと知ったらどういう反応するんでしょうね。それも元男。

今回は特に進展のないほのぼのの会です。ちょっと内容に不満な部分がありましたら感想、コメントよろしくお願いします

裏・貴族の立食会（前書き）

本来、貴族の社交場は策謀渦巻く腹の探り合い空間なのです。

裏・貴族の立食会

私は、セフィリアと一緒にこの立食会に来ただけだけど私は心配があった。

セフィリアは、一度も貴族たちの社交場に出てきたことが無かったのだ。八歳だからと言ってお披露目には遅いくらいだ。

またこういった場では、腹の探り合いが常。子どもの貴族だからと言っても大人は自らの手中に収めようとする。

しかしその全ては、杞憂に終わった。

「これは失礼。ここは俺の親しい者が集まった立食会だ。子ども同士気楽に話すと良い」

ランドルス侯爵は、そう言ったのだ。つまり、ここにはセフィリアを手懷けたからと言ってどうこう出来るだけの貴族はこの場にいる。

と、なると自然とセフィリアよりも大人同士の話に流れる。

「お初にお目にかかります、ジルコニア夫人。私は、ハウブ・ジンコルク子爵」

「はじめまして、ハウブ子爵」

「ダイナモ伯爵の事はお悔やみ申し上げます。素晴らしき名君を失ったと聞きます」

「お心遣いありがとうございます。私が愛したダイナモは、領民に

慕われておりました」

そう、私が愛したダイナモ。感の良い貴族ならこの時点で諦めるだろう。

「そうですか。ですが、母一人子一人では辛いことも多いでしょう。再婚の予定はありでしょうか？」

「いえ、現在はそのような予定はありません」

「では、今からでも……」

「おいおい、ハウブ子爵。こういう碎けた場だからと言ってあまりに直接的な言葉は淑女に嫌われますぞ」

ハウブ子爵の言葉をランドルス侯爵が遮る。ハウブ子爵の執拗な再婚。つまり、自身が義父となりセフィリアを背後から操るなり考えたのだろう。あまりの直球さに見かねたランドルス侯爵には感謝が尽きない。

「これは失礼しました。あまりにお美しいので我を忘れておりました」

「まあ、私はこれでも三十ですよ。もういい年です」

「いやいや、ご謙遜を」

互いに微妙な牽制をし合った後、ハウブ子爵は他の貴族への挨拶へと向かう。

私はその後ろ姿に溜息をついて、思わず口に手を当てた。まだ傍

にランドルス侯爵がいらっしやる。

「気にするな。俺は、こういう碎けた場で疲れる話はしたくは無い」
「お心遣い感謝します。ですが、いつかは再婚も考えなければなら
ないのかもしれないね」

私の心の中には、ダイナモただ一人だ。だがセフィリアには後ろ
盾が無い。中央貴族には、王族。教会派には、教会権威。そうした
ものが無いのだ。ならば、私がどこか有力な貴族と再婚して両家の
結び付きを強くすることで外圧から領内を守らねばならない時が来
るのかもしれない。

「あまり気を負う必要はない。結婚云々は個人間の話だ。ダイナモ
やその父ケーニスと貴族間での婚姻を嫌ったのは、対等な立場にな
らない事だ。どちらかが操り、どちらかが従属する。この関係には
平等性が無い。結婚とは本来、平等性がある物だというのが、俺の
教会の教えだ」

「それは、中央ですか？」

「いや、地方の小さな教会だ。だから考えるのならダイナモと同等
であり、ダイナモの存在を認めるような男にすることを勧める」

「それでは、条件に見合う殿方は、ランドルス侯爵ただ一人と言う
ことになりますよ。それともキュピルに海上將軍を継がせないおつ
もりですか？」

「むう、流石に恋路が絡む政治は扱いが難しい」

ランドルス侯爵も一人身。話によれば一人息子のキュピル出産の

折、母体が耐えられなかったそうだ。

ランドルス侯爵の妹君が乳母を務めるなどして周囲の支えがありキュピルは順調に成長し、将来はこの東の海上将軍の後を継ぐ事を期待されている。

だが恋の相手がセフィリアだとするならば、難しい。ジルコニア家で直接血を引いているのは、セフィリアだけ。だから東の海上将軍としての未来を諦め婿養子に来てくれるのならばこちらは問題ないが、ランドルス侯爵に後継ぎがない。最良の選択肢としては、私がランドルス侯爵と結婚し、新たに子を設け、この子を海上将軍に。キュピルをジルコニア家の婿養子にすることで丸く収まるのだろう。

この将来は、キュピルの海上将軍の夢とセフィリアの父より受け継ぐ矜持を捨てることになる。

「難しい話です」

「まあ、貴族の結婚などもう少し先の話。その頃にはもう一度相談させて貰おう。だが、俺はセフィリア嬢をキュピルの伴侶とすることを諦めてはいなかな」

「そうですね。では、今は立食会。本来の目的に戻り食事でも楽しみませんか？ 当家の侍女長・キリコの料理が運ばれてまいりましたよ」

「ほう、最近では領民の間で珍しい料理が流行っていると聞くと、これがそうか？」

「ええ、セフィリアとキリコの二人が考えた料理だそうよ。モラトリリフィムの食材を使うのだけれど、今日は海の幸を使っているみたいね」

「それは楽しみだ」

運ばれてきたピザを私達はセフィリアにならって素手で食べる。
珍しい食べ方、珍しい料理に皆が顔を見合わせる。

ランドルス侯爵は、ピザを食べてとても気に入ったらしい。モラ
ト・リリフィムを「グラードリアの食糧庫」から「グラードリアの
台所」と呼び名を変えた方が良いかもしれないなど、嬉しい冗談を
言ってくれる。

今日の立食会では、モラト・リリフィムの珍しい料理が話題を攫
ったことで田舎領地などと蔑みの目はこの場ではなくなるだろう。

裏・貴族の立食会（後書き）

ほのぼのの裏側は、大人と政治事情。

簡単に恋路は達成させませんよ。恋路は挫折の繰り返しですよ。もしかしたら心変りが起こる間も知れませんかよ。

作者は、最後の落ちが分かるように作ってはいけないと思うのです。ラブコメだって幼馴染との時間は長いのに、新しく現れた女の子が全て攫って行くのが最後の落ちだっていうテンプレート。これは過程を楽しむもの。

私の作品は、過程を楽しんで頂く物……あれ？ 同じだ。

では、生温かい目で見守って頂けたら幸いです

北部の村の改革（前編）（前書き）

九歳の冬。悩みに悩んでおります。

北部の村の改革（前編）

私は、春から秋にかけての種撒きから収穫までの季節に近隣の農地へと赴き視察したが、やはり問題は北部に集中していた。

「これは北部の村を潰して街道工事の労働者として雇う方が良いのでしょうか？」

「ジーク、安易にそう言った事は云わないで頂戴。それじゃあ、農村部の人々の生活基盤が無くなるのよ」

私は、珍しく苛立たしげにジークに返答した。それが本来、不当なものだと反省しすぐに、ごめんなさい、と呟く。

「北部は早急に対処した方が良いのは確かです。生活基盤を失うものが増えるのも確かですが、常駐兵の問題もありますから」

北部の村々は、北のエラヴェール皇国に近いために農業の時期が他より短い。エラヴェールの農業に準じた作物であるジャガイモをこの村々では主食としているがこの国での価値は、雑穀程度。専ら自給自足のため。僅かばかりに栽培している小麦やその他の作物は、納税のための収入源だ。

更に、北のエラヴェール皇国とは幾ら友好国だからと言っても宣戦布告しないとは限らない。有事の保険である常駐兵の拠点である北の村々を失えば、常駐兵の存在意義、そして私の領主能力が問われる。

ならば、別に村を潰さなくても良いのでは？ それは村に住む人々の心理状況によるのだ。

ここは貧しい。他も大差ないという話ならば人は動かない。だが他が豊かならば自分たちもそちらに動けば豊かになると確信したのならば、村は一気に過疎化して廃れる。

その弊害として、無職人の流入や治安悪化だ。

「やはり、この北部は領主主導で特産品を開発しなければいけないよね。夏に港で聞いたのだけれども、北方でも僅かに砂糖が生産されているようなの。その作物や製法は知らない？」

「北方ですか。砂糖と言えば、南方の砂糖黍が主ですからな。それよりもジャガイモを利用した料理を直営店で広めてみてはどうですか？」

確かに考えたがジャガイモ主体の料理と言えば、肉ジャガだが醬油が無い。大豆が収穫されるので製造できなくはないが、翌年より効果の現す策ではない。ほか、ポテトチップスやフライドポテトなどの油を大量に使う料理は油の増産が必要になる。この世界では、植物油はオリブ油が主流で他が少量。後は、牛脂などの動物性の油が容易に手に入るが、時間が経てば白く油が固まる。

「ああっ！ 砂糖の案は駄目。ジャガイモをメインの料理が難しい！ 他に案は……」

やっぱり大量の穀物を税収で購入し、それを北の村々に渡して何とか流出を阻止するしかないのだろうか。本日何度目かの溜息が洩れる。

「これは商人のメペラ殿に相談するのが良いかと思います」

「ええ、北の村々の農民流出を阻止するためにどれだけの穀物が必要か計算して貰える？ 足りない分は私の個人資産を投入して良いから」

「分かりました」

ふう、とジークの去った後で深い溜息を吐き出して、天井を仰ぐ。問題は山積みだ。

組織としての不備はないが、基盤の農民の生産性とそれに伴う生活の変化、また流通に必要な街道整備、増加するだろう農村部のための農地開拓、経済化する農村、過去の歴史を知る私は予言でも出来るようにこれらを危惧していた。だがまだ起きてないために、今はそれほど心配する程の物でも無いはずなのに。

「気分転換にダリアからの手紙でも読もう。ダリアの手紙が凄く上達しているのよね」

執務机の引き出しの中から革張りのファイルを取り出し、時系列順に並べられたダリアの手紙を順々に読む。

今年の春は、肥貯が満杯になったために別の穴を掘ったこと。夏は、町から新しい料理のレシピが届いたこと、そして秋の手紙。これからの二毛作が不要になりそうなほど近年は実りが良いこと。

要約したが政策のヒントは得られた。

全領地で冬の二毛作が不要になれば、その間農村部の労働者は働く時間が短くなる。だから彼らに村の周囲の街道整備の公共事業をして貰いそれに応じた賃金を支払えば良いのだが。

税収は、収穫量の増大でここ数年増えているから払うお金はある。農民もお金を持つようにもなった。だが、そのお金の使い道が無いことが現在のネックだ。

そうなれば、領主主導の教育機関でも作るべきか？ その農民の金余り解消のために子どもに教育を……駄目だ。思考の埒埒に嵌りそうだ。考えるのを止めよう。

「本格的に休んだ方が良いのかもしれないわね」

私は近くのソファアに倒れ込むように寝る。はしたない、行儀が悪いのは、今だけは気にしたくない。完全に職業病だ。休もうと思っても全然領地の開発が頭から離れない。

それから数日の間は、寝ても覚めても領内の性急な開発の案を紙に書いては、ボツにするだけの作業。別に業務自体は滞っていないが、私という高水準の世界を知る者にとっては、何も変化できない現在に多分なストレスを受ける。

「お久しぶりです、セフィリア様。あまり顔色がよろしくないようです」

「ええ、少し考えに詰まってしまっ

折を見て来ていただいたメペラ様に対していつもの笑顔が出来ない。朝、鏡を見た自分の顔はとても酷いものだったが、こうして足を運んでくれたのだ。少し話をしよう。

「商談以外にも話を聞きますよ。商人に対しての相談料は無料です。それから信頼が発展するんですから」

「ありがとうございます。では、お言葉に甘えて」

ぽつり、ぽつりと私は話していく。ただ、全部は話さない。彼らに対しての初期のお願いだけを話すのだがそれだけで大分心が軽くなる。

時折相槌を打ってくださるので、安心して話せる。

最後に話終えて、ジークの出してくれたお茶を口につけたら、もうすっかり冷えていた。

「なるほど、貴重な甘味料の領内生産。それと寒冷地でも取れる砂糖の話ですか」

「ええ、でも……あれは噂だったんですよ。噂の信憑性を元に考えたのがいけなかったのかもしれませんが」

「いえ、その作物。あるにはあるのです。甜菜という作物だと思うのですが、如何せん量が多く取れないので主な用途が家畜の飼料なんです」

「ほん、とうですか？」

私は、驚きに目を見開く。商人のメペラ様は私のその様子に逆に驚いていらっしまった。

「え、ええ。私も顧客の趣味嗜好に合わせて各地の農作物について最近調べていましたから。他にも直営店で使っていない野菜や主食となる作物もありますよ。米とか」

「……!？」

私は、対面したソファから立ちあがってしまった。横で黙って座っていたパライカ様が怯えるようにメペラ様に身体を傾けたが私は、この十年来の付き合いである友の健在でも聞いたような心持ちだ。

「それが、それが本当なら。改革の目途が！ ジーク！ キリコ！」

「「お呼びでしょうか？」」

「春先からの北部の村々を領主直営の農業試験場とします。また、村人に対しての優遇策として穀物の備蓄を我々が負担するように計ります。その予算と計画書を作ってください！」

「分かりました！」

「それと、クローバーの種子も集めて貰いたい。後は、可能な限り国内の寒冷地に適した作物とその生育方法も資料に纏めて」

目の前で執事長のジークと侍女長のキリコに指示を飛ばす私に終始呆然としているメペラ様。

私は、心の底から笑顔で二人の商人に言葉を送る。

「ありがとうございます。お二方の御蔭で来年も忙しくなりそうで

す
」

一見して皮肉のようだが、私にはこれ以上の気持ちは無い。なに
も出来ない歯がゆさよりも全力疾走の方が気持ちが良いのだから。

北部の村の改革（前編）（後書き）

初めての分割？ 元々一つの政策に対して分割で表記すれば分かりやすかったのかもしれませんが。

毎回、誤字脱字の指摘、文の指摘ありがとうございます。今回のお話は、領内での貧富の差が激しくなる前に、特産物を。と言うお話です。

所々に、意味深な単語がありますよね。分かる人にはわかると思います。多分。そしてちゃんとそれらのフラグを回収したいと思います。

北部の村の改革（中編）（前書き）

九歳、春。最中の北部では、山の頂上にまだ雪が残っています。

北部の村の改革（中編）

私は、ジークと騎士と共に、長い道のりを北上した。数日かけてゆつくりと進むのだが、北に進むにつれて悪路になり、振動でお尻が痛くなるのだった。それを紛らわすためにも、私は今一度持っている資料に目を通し、不備が無いことを確認する。

「これが成功すれば、様々な農業が自立化し出すわ。でも……」

「セフィリア様、我々には意味の理解できない単語が多々ありました。それにこれで大丈夫なのでしょうかね？」

「私も、不安だわ。でも、お願いしないと始まらない。誠心誠意伝えられないわ」

確かに、今回の計画書には、不備は無くとも不安はある。

不安を口にするジーク。作っている時は感じなかったのだが、いざ農村視点に立って気がつく怪しさに。

そうこうしている内に、北部の農村の一つに到着した。既に他の村の村長たちも集まり私達を出迎えてくれる。

「はじめまして、領主様。この度は遠路遙々ようこそお越しくださいました」

「はじめまして、北の農村の村長方。私の提案した話し合いの場に集まって頂き、感謝します」

この村の村長と私の会話もほどほどにして村の家の一つに入る。なぜなら、春先でもこの地域はまだ時折霜が降りることがあるほど

寒い。

村長方の表情は、怪訝そのものだ。まあ、子ども領主が提案する案件なのだから疑って当然だ。だが疑われるだけの理由は他にもある。最大の不安要素にこの案件は、私自身が提案したのだから。

今までは、お父様であるダイナモ・ジルコニアの残した政策としてやってきたが、これからは私自身の政策でなければ、長期的な領民の、そして農村部の信頼を得られない。

「まずは、これから皆さまの村々を領主の直轄地となって頂いた上で作って頂きたい作物や試して頂きたいことがあるのです」

「話にもよります。作る作物とはなんですか？」

領主の直轄地というのは珍しい話ではない。鉱山がある領地では、鉱山を含む土地だけを直轄地として他を代理領主を立てる。それにより鉱山より産出される金属を自分が独占できるのだ。他にも東の海上将軍も塩に関して同じことをしている。だから、村長たちもそれに關しては突っ込んでこない。

「甜菜という作物が主になります。今まで小麦を作っていた畑の半分をこれに変えて貰いたいのです」

「それはどういった作物で、主にどのような目的が？」

「資料にある通り、甜菜とは、見た目は大根やカブのように白い根菜類で、地面より養分を吸い上げ根に甘い汁を蓄える野菜です。それからこの村々では砂糖にして貰いたいと思います」

周りがざわめく。一般の農民が砂糖など作れるとは思っていなかったようだ。子どもの虚言だと言われても仕方が無い。

「砂糖は基本。南方の黍や椰子から取れるのが普通だろ。なんで大根から取れるんだ？」

「なんで？　と言われましてもそう言う作物ですから」

「じゃあ、他に作っている所があるだろ。そんなの聞いた事ないぞ」
「来たのエラヴェールの一部では、この甜菜は家畜の飼料や葉っぱを食用としているそうです。ただ、砂糖を作るには大量の搾り汁を煮詰めて結晶化しないといけません。詳しい製法は、その資料載っております」

「ならどこでも作れるんじゃないのか？　ここより温かい南の方が出来は良いと覆うぞ」

「それが駄目なのです。昼夜の温度差が激しい場所でははいけない寒冷地の作物なのです。だから、この北の村々が適切なのです」

一つ一つの確に答えていく。最後の質問が来た――

「これは、領主様の案かい？　どこでこんな知識を仕入れてきた。王都の学者様かい？」

「私が本を片手に無い知識を絞り、話を聞きに行き、商人様の手を借りて探しました。この貧しい北の村々を『甘味の村』と呼ばれるように。」

その言葉は、蕩けるように皆の耳に響いた。貧しい村から脱する

ことができる。蔑まれない、前の領主であるダイナモ様は自分たちに飢える前に穀物を届けてくださった恩。また、もうお荷物とは言われたくない意地。様々な思いで各村々の村長は話を決めていく。

「俺は、構わない。ただ、不作の時は見捨てないでくれ」

「もちろん、抜かりはありません。ちゃんと各農村のために備蓄の穀物を責任を持って用意させて貰います」

それからポツリ、ポツリと賛成が上がり、全員の賛成が得られた。だが資料の紙はまだ半分に差し掛かったただけだ。

「おい、これまだ続きがあるぞ」

「はい。今のは、各農村での砂糖作りの政策の部分。今度は長期的な政策です。ジーク」

私の声に従い、ジークは自分の手元の資料から顔を上げる。今まで簡単な説明しかしなかったために今この場で理解し、悩んでいたのだろう。顔を上げたときの初老の一瞬何が起こったのか理解できないという顔に一度微笑み、正気に戻す。

「は、はい。セフィリア様」

皆が囲むテーブルの周りには、男女の顔の輪郭の紙とバラバラの顔のパーツ。それも色々な特徴の顔のパーツだ。

「皆さまは作物や家畜に特徴があるのをご存知ですか？」

「えっ、ああ、まあ色々あるな」

差し出された紙に呆気に取りられて、私へ生返事を返すが、私は気にせずに話を続ける。

「動物や植物、人間はみな同じなんです。特徴がある。例えば、家族の特徴が父親は一重で母親は二重、その他にも別々の特徴が……」

そうやって並べる顔の特徴。

「その二人の間の子どもは、これらの顔の特徴を受け継いだりします」

「まあ、そうだな。俺の家は四人子ども要るけど、俺似、かみさん似、あとどっちにも結構似たりするな」

「ええ、それも動物や植物に適応させるのです。乳を多く出す牛の子どもは乳を多く出す。肉質の良い豚に子どもは肉質が良い。背が低く、稲穂の実りが良い小麦の種は、背が低く、稲穂の実りが良いのです。そう言った植物や家畜を人為的に交配させて、生産性を上げる——「品種改良」の農業実験場になって貰いたいのです」

ここまでの話は理解できているはずだ。だが、当然疑問も出てくる。

「俺は、親父とお袋には似てねえんだよ。どっちかと言うと婆さん似だけど、それじゃあ、俺は親父やお袋の子どもじゃないことになるぞ」

「もちろん、そう言う場合があります。ですが、特徴というものは優劣があるんです」

「優劣？」

私は、ジークの用意した色のついた小石を取り出す。赤、青の二色。人の顔にそれぞれを色々な組み合わせに持ち並べる。

「例えばの話、この祖父のとある特徴の一つを赤二つとします。祖母の特徴は青二つとします。これらから一つずつ特徴が子どもに受け継がれる場合、何通りになりますか？」

「えっと、赤青だけだな」

「その時、赤の方の特徴に優先されると赤の特徴が浮かび上がります。次に、赤青の特徴同士の子どもはどうなりますか？」

「赤赤、赤青二つに、青が一つだ」

「はい、この時。赤二つのある子どもは祖父と同じ特徴、青青のある子は祖母に似ます。ですから両親に似ていないで祖父母に似ているのは、こういう理由なのです」

そう言って、間の親の世代には祖母の特徴が無いが子どもの一人はその特徴が現れる。

最後に、私は一言付け加える。

「これはあくまで仮定の話です。私の観察した物に対する理論です。そして証明するのに何年も掛かってしまいます。甜菜の栽培とは別です。ちゃんと穀物の備蓄も送ります。皆さまには拒否していただいて構いません。それを承知で私のこの実験に協力していただけないでしょうか！」

私は領主らしからぬ事をする。村長たちに頭を下げるのだ。ジークが慌てて止めようとするが、私は言葉が続ける。

「未熟な領主の私が、お父様のような領主になるのは実績が無いのです！ 周囲の人間を納得させるだけの実績を得るためにも、私が領主を続けるためにも、どうかよろしくお願いします！」

「セフィリア様……」

ジークは、私の肩に手を置き、座らせた。これで大まかな内容は全部だ。答えを静かに待つ。

「子ども相手に、親子や爺さん婆さんがなんで似てるのかを教えられるとは思わなかった。俺の村は協力するぞ」

「別に、食べる物を作るのならば手間を惜しまない方が良いでしょう。私の村も協力します」

「ダイナモ様の恩だ。五年でも十年でも俺らを使ってくれ！」

そう、皆から肯定的な意見が聞けた。その瞬間、ほっとしたのか、緊張が解けたのか、つうーと何かが頬を伝う。

「セフィリア様！ どうかなさいましたか！」

「えっ、あれ？ なんで泣いてるの？ 嬉しいはずなのに」

そのまましばらく泣き続けた。悲しくは無い。嬉しいのだ。嬉しい過ぎて、暖か過ぎて涙が出てくる。

村長たちはみな微笑み、私が落ち着くまで見てくれる。

それから私は細かい話を詰めた。休作地には、クローバーを撒くことの推奨とその理由。

クローバーはマメ科の植物で、マメ科の植物には、空気中の窒素を地面に吸収する力を持っている。それを牧草として家畜を育て、最後にクローバーを潰して緑肥にする。これも一サイクル中に似た土地でどれだけの差があるかも検証しなければいけない。

「長い話し合いにお付き合い頂きありがとうございます。皆さんには、記録を書いて貰ったりと手間が多いですが、どうか協力お願いします」

「良いつてことよ。それで領主様は、これからどうするんだい？」

「その、数日間。こちらに滞在してから帰ろうと思います」

「なら、今晚の夕飯は豪勢にしないとな！」

皆が、おおーと声を上げる。

その夜は、村の子どもたちが私を囲み、色々なお話をした。特に異世界の童話を聞かせれば、目を輝かせる姿は、初めてあったダリアを思い出す。

他にも、持ってきた赤青の石を指で弾く『お弾き』や目を瞑り、人の顔のパーツを輪郭に嵌める『福笑い』は、子どもたちが夢中になって遊んだ。

私達は、北の村の子どもたちに良いお姉ちゃんという存在として受け入れられた。

北部の村の改革（中編）（後書き）

中編です。まだ続いちゃいます。

感想ありがとうございます。プロットに色々なネタの追加と構想の練り直しが大変です。

えー今まで言わなかったのですが、このモラト・リリフイム領地には農業上の問題があります。

一つ、北部が寒い。めっちゃ寒い。そのくせ、気温の差が激しいので、みなさん辛い思いをしているそうです。

もうひとつは、西部から南西部に掛けて広い沼地や泥濘、地盤が所があります。農地開発の計画は、この地域なんですよ。水抜いて、土入れて、大きな石や木を退かして、作物が作れるように。

では、最後までありがとうございます。次回をまた。

北部の村の改革（後編）（前書き）

えっと、三つに分けて書きました。今後、一つの政策や対応をこのように複数に分けて書いていく場合があると思います。

誤字脱字、感想ありがとうございます。えっと、感想を私なりに要約した物に対して前書きで少しずつ返答します。

本文では説明不足ですが、本文で今更そのことを言うのもちよつと変になりそうあたりさわりない内容。またここには感想にはプロット上の政策を話しまいネタばれ気味になってしまうのでご了承ください。

まず『領民の態度が横暴では？』の返答です。

ごめんなさい。上下関係とか全く考えてませんでした。直す事があれば、会話を熟考して直したいと思っています。

では、本編をお楽しみください。次回も質問の一つに返答します。

北部の村の改革（後編）

「セフィリアお姉ちゃんは、僕と遊ぶんだ！」

「ちがうよ！ 私の遊ぶの！」

目の前で二人の子どもがやんややんやと私を取り合い合っている。懐かしいな、生前の孤児院に居たころは、目の前でおもちゃを取り合いしていた年下たちを見ていたが、まさか自分がその中心に居るとは。

「じゃあ、皆で遊びましょう？ 皆で出来る遊びを考えるの」

「うーん、分かった！」

「お姉ちゃんがそう言うなら、一緒に遊ぶ！」

自分より二歳ほど年下で素直で良い子たちだ。この村には他にも子どもがいるが、泊めていただいている村長宅の双子の兄妹だ。

「今日は何して遊ぶ？」

「お外に行って遊ぶの！」

「じゃあ、温かい格好をして出かけよう！ 温かいけど、まだ寒い
の」

子どもの言葉は要領を得ないが、要約すると『普段より温かいがまだ寒い』だ。私もコートを羽織り、二人に手を引かれるようにし

て外に出る。随分と懐いたと思う。二人と一緒に、疎らな草地を走り、地面に円を書いてそこで片足、片足、両足と『けんけん』を教えた。こうした身体を動かす遊びは、子どもは総じて好きなようだ。

「ねえ、僕らも一緒に入れて」

周囲の子どもも集まってくる。皆と同じくらいか、それ以下の子どもだ。

「いいわよ。人数が増えたし、何して遊びましょうか？」

頬に手を当てて考える。『かごめかごめ』『鬼ごっこ』それから

……

だがジークが物凄く心配そうな表情で見ている。あまり危ない遊びは駄目かもしれない。

「それじゃあ、山に行こうよ！ お姉ちゃんに秘密を教えてあげる！」

「秘密？」

「甘い秘密！ ちょっと苦かったりもするけど甘い秘密だよ」

双子が悪戯っぽく笑う。私も普段周囲の大人にこんな風に笑っているのかな？と感慨っぽいものを感じてその後を複数の子どもに手を引かれ付いていく。その時、ジークはどこに追いやられて私と一緒に来ることができなかった。

まあ、森と言っても森の本当に端っこ。そこには、立派な木々が立ち並んでいた。

「凄い木ね」

「うん、お父さんは、これは薪にしか使えないって言うんだ！」

「柔らか過ぎて、家具に使えないって。だから森の中には、あんまり入らないの！」

「それで、甘い秘密ってなに？」

私が腰をかがめて二人に尋ねると二人は、ニコツと笑って木の根元に駆け寄る。

「これが私達の甘い秘密！」

「舐めると甘いんだ！」

二人の指先には、てらてらと光る物がある。水あめよりも水っぽくそれを二人は咥える。

ダリア教えて貰った自然の甘い物に、小さな紫色の花の花弁を抜いてその根元を吸っていた。ほんの一瞬甘い程度で砂糖よりも遥かに劣るが、砂糖などが高級品のこの子たちにはこういった物も貴重な自然の甘味料となる。

「へえー、甘いんだ。私も知っているよ。紫色のぼんぼんみたいなお花の花弁の根元を吸うと甘いんだ」

「そんなの知ってるよ！　ここでは、夏にあるんだ！　でもこの甘いのは春のこの時期だけなんだ！」

「ここの子どもたち皆が見つけたの！　木に石で傷つけて、家から持ってきたお皿を置いて置くの！　時間が掛るけど、一日でも結構出てくるよ」

周りにいる子どもたちは、にこっと自慢げに笑っている。

私も根元の樹液を掬って指で舐める。ああ、なんか遠くで甘さを感じる気がする。

この木は子どもたちにとって凄い木なんだな、と思い木を見上げて私は、目を見開く。落ちてくる青々とした葉っぱは、掌のような形をしている。

これは、まさか。これは、この子どもたちだけじゃない！　村にとっての宝になる。宝の山に等しい！

「お姉ちゃん？　セフィリアお姉ちゃん」

腕を引かれて、私は我に返った。

「ごめんなさい。この木が凄くて。皆は、塩味のスープを飲んだことがあるわよね」

「当然だよ！　冬は、それにジャガイモが入るんだぜ！」

一人の男の子が胸を張って威張る。

「それを長く煮込むとどうなる？」

「美味しくない。僕のお母さん、編み物に夢中で塩の味がキツイのが出来た」

一人はしょんぼり体験談を語る。

「それと同じで物は煮込むと味が濃くなるのが分かる？」

その場にいる子どもたちがみんな首を縦に振る。

「この木から染み出す液をたくさん集めたら、きつと蜂蜜のようになるわよ」

子どもたちはきよとした表情でいる。蜂蜜などの甘味料は高級品だったことを忘れてつい手順を間違えた。

「この液がもっと甘くなるのよ」

「これより甘いの！」

「凄い！ 私舐めてみたい！」

「じゃあ、私達だけでこっそりやりましょう。大人たちを驚かせるの」

子どもを巻き込んだ実験。子どもたちにとっての悪戯。この瞬間、始まった。私は、ジークに言って滞在を延長する旨を伝え、私も村の人たちに料理を振る舞うことで厨房を手に入れた。後は、子どもたちが集めてくれた鍋一杯の樹液を煮詰めた。

皆代わる代わる私に近づくので、不信がられないように良い訳として「つまみ食いをしていた。お姉ちゃんがくれた」と言うことになった。

私は、シンプルな料理を村の人たちにポテトサラダとクロツケを振る舞った。まあ、即席であり合わせにしては上手く出来たし皆には好評だが、クロツケの油が牛脂で時間が経つと白い油が浮くので、私は常に揚げ続けなければならず、樹液を煮込み、浮いてきた灰汁を取るのを村長の双子の妹に手伝わせてしまった。

樹液は、深夜に煮込み終えた。その時には、用意された薪を大量に使ってしまい、鍋一杯の液も瓶一本分くらいに濃縮されていた。

それを白い布で木の屑やほこりを越し取り、ビンに移す。

翌朝、子どもたちを集めて、瓶の中の琥珀色の液に注目が集まる。

「みんな、舐めてみて頂戴」

恐る恐ると言った感じ。掬って舐める。皆の反応は、それぞれ違う。村長の双子の兄は、目を見開き驚き、妹はうっとりとした表情をしている。他の男の子は、あまりの甘さに咽返り、女の子は名残惜しそうに指をしゃぶっている。

「これはね。あの木の液を煮詰めた物なの」

「凄い！ セフィリアお姉ちゃん凄い！」

「ううん、違うの。私は凄くないよ。みんなが凄いの。これを見つけた皆が凄いのよ。だから――」

次の言葉に全員の表情が悪戯の最終段階に入ったことを理解した。

その後、私は、村長夫妻と面談した。外には子どもたちがこっそりと待機している。

「お話と言うのはなんですか？」

「実は、これを見ていただきたいんです」

「あらあら、何かしら、綺麗だけど」

私は作った琥珀色の液体を二人に見せる。

「これを舐めて頂きたいんです。大変驚かれると思いますよ」

「セフィリア様、我々をさらに驚かせてどうするつもりですか？」

「嬉しい驚きなら大歓迎よ」

二人はティースプーンに琥珀色の液体を掬って、口に運ぶ。舐めた瞬間、理解できない、なんだこれは、という沈黙をする二人。何とか、言葉を絞り出したようだ。

「これは、あの蜂蜜。と言う奴か？　でも、村の森にでも入ったのか？」

「こんなに甘いのは初めてだわ」

「いえ、これは蜂蜜ではないのです。木の樹液なのです。皆入ってきて良いよ！」

その声に一斉に子どもたちが私の周りに集まる。何事かと驚いた村長夫妻は、子どもたちの言葉に更に驚く。

「あのね、この村の木の液って甘いんだ！」

「それをね。セフィリアお姉ちゃんが、煮込んだもののなの！」

「俺たちが見つけたんだ！」

「あの森は、お宝なんだって！」

村長は、理解できない事が重なって放心状態だったが、ちょっと

ずつ声を漏らしてくる。

「つまり、あの森は、薪以外の活用法があるのですか？ 狩猟と管理以外では人の入らないあの森が」

「はい。あれは、カエデという木の中でも特殊な木なのです。

他の家具に出来るカエデは、硬かったり柔らかかったりと家具に適しているのに対して、こちらの木はあまり適しません。ですが雪解けのこの季節、地面からたくさん水分を吸収するカエデの樹液の粘度は、下がり取り出すことが容易になります。そして取り出した樹液を濃縮することで、この琥珀色の甘味料——メイプルシロップになるのです」

「メイプル……まさに木の女神の恵みだ。ありがとうございます、セフィリア様」

「いいえ、これを見つけたのは子どもたちです。この子たちが一番の功労者です」

私は子どもたちの肩に優しく手を置く。照れくさそうに身を振る皆に村長の視線が向く。

「これは、この短い時期にした取れない貴重な甘味料です。そしてこれを少し流通させてみませんか？」

「はい、そもそも。直轄領の我らに承諾の必要がありましたでしょうか？」

「では、この北部の村々でのメイプルシロップの生産を計画しましょう。子どもたちに甘いものを食べさせたいので」

「それは、良い考えです」

そうして、私達は、延長期間でメイプルシロップの増産と流通計画の大枠を作り上げた。

商品名…木の女神の雫メイプルシロップとしてこの世に新たな甘味料が誕生した。

北部の村の改革（後編）（後書き）

本来、サトウカエデの木の樹液って甘く感じないようですね。ただ、物語上。甘く感じるようにしています。

ジルコニア家の目下の心配事（前書き）

セフィリア九歳の初夏。セフィリア以外のジルコニア家での出来事。

えー、前回に引き続き、感想への返答。世界観補足のコーナーです。
質問『理論は農業以外にあるでしょうに……』

はい、農業以外にあります。工業、商業、社会福祉、教育、道徳、
公共事業等あります。ですが初期設定が『国の食糧庫』と呼ばれる
としたので、農業の生産性を先に上げているだけです。

では、本編お楽しみください

ジルコニア家の目下の心配事

私達は、午後のお茶の時間を親子の語らいの時間として今、一つの小瓶を間に置いて話している。

「まあ、蜂蜜とは違う甘さね。これがメイプルシロップなのね。私は蜂蜜の甘さも好きだけど、メイプルシロップの甘さの方が好みだわ。」

「お母様に気に入って貰えて嬉しいです。メイプルシロップの生産の時期が終わりましたが、来年はもっと早い時期に製造計画を立てて流通させようと思います」

「メペラさんには、製造したメイプルシロップの二割を納品しているから残りは、こういった配分で流通させるの？」

私は疑問に思った。これだけの甘味料だ。王都方面に流通させれば、物好きな貴族たちが高値で買ってくれるだろう。だが娘のセフィリアは、その考えをあっさりと否定する。

「勿体ないです。ニーレ・ストールの新しいメニューにメイプルシロップを練り込んだ甘いパンなどの朝食メニューをキリコと考案中なんです。それに蜂蜜と類似品のメイプルシロップを同じ販売層にぶつけばどちらかが値割れを起こしてしまうわ。元々蜂蜜より安価で作れるのですからあまり利益を優先し過ぎてはいけません」

「つまり、蜂蜜は、貴族向けに。メイプルシロップは領地向けに販売するのね」

「はい、兼ねてからの特産品。これを利用してモラト・リリフイム領内を盛り上げて参りたいと考えております」

相変わらず頭の回転が速いセフィリアに私は、いつも親ながらに脱帽させられる。でも、次の一言でああ、そう言う理由か。と納得した。

「それに、華やかよりも質素を好むお父様なら、領民にも食べさせたがるでしょう」

「ふふふ、そうね。ダイナモらしく、あなたらしい答えね。でも、あまり無理をしちゃダメよ」

「分かってます。では私は、キリコとも相談して秋の新メニューの開発をして来ます」

「行ってらっしゃい」

セフィリアが楽しそうにしている後ろ姿に私は親ながらに心配を覚える。

「ねえ、ジーク？ 私はセフィリアが心配だわ。六歳から領主をしているから他の子よりも友達が少ないと思うの」

今まで彫像のように黙っていたジークも私の意見に同意してくれる。

「そうでございますな。ですが北の村で子どもたちと戯れた姿はとても生き生きしておりました。領主として以外のセフィリア様は久

しぶりに見ました」

「親としては、あまりに早い一人立ちには寂しい物を感じるわ」

「私입니다。かつて、膝に抱きついてきた愛くるしいセフィリア様がここまで立派になられてしまい逆に不安で。周囲に友や仲間と言った者たちが少ないので我々がもし亡くなった後は、孤高の道に進んでしまわれるかもしれませぬ」

「やっぱり学院には行かせるべきよね。ランドルス侯爵のキュピルも通うために勉学に励んでいるそうだし、そこで知識と友を見つけてくれればいいのですけれど」

学院。それは、王都に存在する高等教育機関の通称。正式名称は、王立・アロン学芸技術学院。王国内から様々な秀才が集まり、多種多様な知識を共有し、技術の習得、新たな知識を見つける場所。十三歳から十八歳までの五年間を基礎課程とし、それ以降学院に残る場合、主に研究開発、技術向上などの最先端を研究していくことになる。まあ、専ら金持ちの貴族や一部の商人が通う学院なのだ。

「ええ、セフィリア様は、領主の仕事をこなしておりますが、学院には貴族の子どもなどが多く通い、領主になるための講座も開講されております。ですが、入学試験は……」

王立と言うからには、敷居は高い。歴史、教養、計算の三種類の試験からなるが、中には特殊な入学事例も存在する。

「そこでセフィリアには、少し家庭教師を雇おうと思うの。あの子、ダイナモの書斎の本を読んでいたから歴史は強いはずなのよ。それに、基本的な計算だって大丈夫だと思うの。でも入学試験の計算は

もつと高度だから今から学べば遅くない筈だし、そうになると教養だけを専門的に教えるのは……」

私自身、教養などジルコニア家に嫁ぐまでは農民の娘で侍女だった。貴族式の教養など知るはずもなく、それが意外と重要である。

「ですが、ジルコニア家に招くほどの信頼と教養のある人物は居られますか？ また他の貴族は三歳や四歳と言った年齢から貴族式の教養を付けております。そう言った方々に比べてセフィリア様は、ダイナモ様と同じです」

「それに、セフィリアが今更家庭教師を付けるなどと言えぱきつと反発するでしょうね。ダイナモの後を追うことに必死になって寄り道を知らない。むしろ寄り道を教えてくれるような人の方が良いと思うのよ」

「信頼のできる貴族の教養を持ちながら、寄り道を教える方ですか？ そのように都合の良い人物は居りませぬぞ」

「一人だけいるのよ。偏屈、変人、無神論者で有名なノレー伯爵の第二子・トレイル・ノレー学士。ダイナモの学術院時代の友人らしいの。最近では、学院の教会派と喧嘩して自由研究の名目で学院を離れているわ」

「……あの方がセフィリア様に良い影響を与えろとは思いません」

ジークが渋い顔で呟く。まあ、私も同意見だ。だがダイナモが友人として懇意に繋がりを持っていた人物。ダイナモの先見性や人を見る目は確かなので、一応は候補なのだ。

「まあ、一度呼んでみましょう。セフィリアには、家庭教師という事は伏せてダイナモの友人と言うことで。相性が悪ければお断りすれば良いし」

「まあ、奥様がそう言うのでしたら。私は異議をいう権利がございません」

「ありがと、ジーク」

私は、トレイル・ノレー学士に手紙を書いた。返事が来たのは具体的はこちらに来訪する時期と一言『ダイナモの娘に興味がある。ついでに暇だから』と素っ気ない文字。私は、やっぱりあの愛想のない人物にどう接して良いのか分からなかった。

ジルコニア家の目下の心配事（後書き）

はい。貴族的には遅いですが、家庭教師の選考が秘密裏に始まりました。

短いですが、投稿しました。

今のところ、セフィリアの友達は、ダリアとキュピルくらいしかいないですね。

学士・トレイル（前書き）

区切りが良かったので、メイプルシロップまでを第？部としました。
これからは、第？部です。

時期は、セフィリア九歳の夏。もうじき十歳だ。

学士・トレイル

俺は、一通の手紙を旅装の内ポケットから取り出し、もう一度確かめる。

内容は、家庭教師を頼みたい。娘との相性を知るために一度来てほしい。だそうだ。全く面倒だと思いつながらも、俺は馬車で領主の城へと向かう。

ここに来る途中、領地の村々を見て回ったが前回来た時よりも大きな改善点がいくつも見る事ができた。ダイナモが領主だった頃は頻繁に地元の村に調査をしたが、随分小奇麗になったものだ。

「行く先、行く先でダイナモ万歳か。死んでも愛されているな」

別に皮肉じゃないが、死んだ後に評価されるのはいつの時代の天才、鬼才は同じだなと思う。

「着きました。トレイル様」

「俺の様は要らん。貴族なんて堅苦しい称号は好きじゃないでね」

ジルコニア家の若い執事が微妙な表情で見つめる。まあそうだろう。今から会う人物は、同じ伯爵位でも俺は粗野な中年男だ。今の恰好だって、旅装の下は、よれた白衣なのだからな。

「荷物は俺が持つ。あと、旅装は頼むぞ」

それだけ言って、丸めた旅装を胸元に押し付け、革張りのトランクを持ち城の中にずかずかと入る。

「お久しぶりです。ようこそいらつしゃいました。トレイル殿」

「ご健勝何よりだ、ジーク翁。キリコとリリイは？」

「今は、それぞれ仕事をしておられます。セフィリア様もすぐにや
つてこられるでしょう」

「そうか。では待たせて貰おう。ダイナモの友人として」

ダイナモの娘とこつそりと家庭教師の面談。この家の人間は考
えることが分らん。まあ、俺自身ダイナモの娘じゃなければ断つて
いた。面談とは別で聞きたいこともあるしな。

少し待っている間に、ドアがノックされた。

「お待ちせしました。お初にお目にかかります。私は、モラト・リ
リフィム領の領主、セフィリア・ジルコニアと申します」

「お初にお目にかかります。俺は、学院で講師をしていトレイル・
ノレーと言う者だ。ダイナモとは友人関係にあった」

「はい。話に聞いております。私もお父様の友人とお話ししてみ
たいと思っております。ジーク、お茶をお願いします」

「畏まりました」

かちやかちやとティーセットを用意するジーク翁。俺は、目の前
の少女に対してどう声を掛けるか悩む。単刀直入に言うか？ 苦手
な世間話か？ 貴族社会を捨てた俺には、こういう場面はほとほと
弱い事を痛感させられる。

「あの？ トレイル様？」

「ああ、様は要らん。俺は堅苦しいのは嫌いなんだ」

「では、トレイルさんは、学院で講師をされているそうですが何
を研究されているのですか？」

「まあ、色々だ。凡人には理解されない学問を、ね」

凡人には理解できない。と言った瞬間、子どもらしい笑顔のまま目だけが存在感を増す。こいつは、九歳で腹芸も出来るのか。と感心する。

「具体的にどのような事を？」

「手を広げ過ぎて分かんが、言うなれば『環境学問』って所だ。植物や農業、酪農、農地の構造、農業概念の開発、農村部の納税組織の事も扱っている」

「そうですか。では農地の専門家からこのモラト・リリフイムの領地はどのように見えるのでしょうか？」

「良いのか？ 言っても」

俺は、含みと雰囲気を込めて返す。普通ならこれで話が詰まるがこのセフィリアって子どもは全く物怖じしない所を見ると凄い自信だ。

「では言おう。この領地は他の領地に比べて数段豊かで先進的だ。

ここ数年での生産力の増大に一役買っている【肥料】やそれを作る

【肥貯】の存在は、土に必要な養分を補う存在と、村の衛生状況を改善する為に一役買っている。

農村部の若い子どもの病気の原因の一つに、衛生状況の悪さがある。道端に転がる糞尿も一か所に集めることで、衛生状況は大分改善されるからな」

「専門家の方にそう言って頂けるとお父様の残した政策はやはり凄

いものだと分かります」

セフィリアのその言葉に、俺は目を細める。じつとその内心を探ろうとする。為に、あえて持ち上げた話を落とす。

「だがな。問題点もある」

「えっ……」

「糞尿を肥料とする場合、そのまま畑に投入しても効果はあるが、土壌には悪い影響もある。これを見ろ」

俺は、トランクの中から二枚の押し花を取り出す。

「これは、なんの花か分かるか？」

「いえ……花卉が小さ過ぎて分かりません。青と赤紫っぽい花卉ですね」

「これは、同じ花だ。紫陽花という雨の時期に咲く花だがこいつの力はそれじゃねえ。土壌の様子が分かるんだよ」

今までの微笑みを消して真剣な表情のセフィリアがこちらの目をしっかりと見つめる。良い表情をしてるじゃねえか。と内心にやにやとしながら、俺は淡々と講義を続ける。

「青は土が硬くて根腐れを起こしやすい土。赤は柔らかい肥沃な土に咲き易いのが特徴なんだが、この花は青は肥料。赤はこの領地で言うところの腐葉土を混ぜて育ててある」

「どうして腐葉土の事を……」

確かに、森の柔らかい土を利用するのは、この領地だけだ。それに腐葉土という名で通るのもこの領地。それも森に隣接する農村部だけだ。だが、俺は学士。新たな物には目が無いんだ。

「俺は二年前、この領地の村に調査に来たから詳しいんだよ。まあそれは良い。つまり、肥料ってのは栄養を補給するのに適した物であると同時に土地を硬くしちまうんだ。それに、虫の温床になるから畑に虫がわき易くもなる」

「……」

「だがな。経験則「大地に恵みは、地に帰す」は正しい。腐葉土の性質は、長時間掛けて腐った土。それなら肥料を長時間掛ければ、腐葉土と同じように肥沃な物になる。その目安は、臭いの有無だ。だから今後の農業指導は、一年ごとに肥料を作り、三年ほど放置した臭いの薄い物を利用するのを勧める」

「……ありがとうございます。今後の指導にその意見を取り入れさせて貰います」

セフィリアの表情は硬い。つい、普段の厳しい物良いをしてしまったので、すぐに補足を加える。

「まあ、その。あまり赤過ぎても良い土とは言えないんだ、紫色。がちょうど良い。他にも、色によって適した作物がある。だからあまり気にする必要はない」

「ふふふ、トレイルさんはお優しいですね」

「大人を茶化すな」

俺は、そう言って笑うセフィリアに安堵の笑みを浮かべるが、すぐに顔から表情を消す。お茶を用意しているジーク翁から『セフィ

リア様になんて無遠慮な物良いを』のような嫌な視線を受けるが無視しつつ、今日聞きたい核心に迫る。

「それで、セフィリア。聞くが、これは本当にダイナモの残した政策か？」

「はい。お父様は最後まで領民を：「嘘だな」」

途中でセフィリアの言葉を遮る。あまり褒められた事じゃないが、話し合いの主導権を得るためだ。教会被れの馬鹿どもと口先で渡り合う俺には、これは当然の事だ。

「ダイナモの政策は領内の効率的な組織化。農村部との連携を重視していた。第一、あいつ自体はそれほど深い農業の知識は無い。視察も農民の抱える問題を直接聞くためだ」

「それは、お父様は、領内の組織化をした次に……」

「残念だが、ダイナモの政策は、俺達が学院時代に考えた物だ。それを更に活版印刷を取り入れたあいつなりのアレンジだ。それによる製紙業の発生と安い記録媒体による大量の情報保持、間伐材の利用と植林の概念の定着。まさに俺に扱う『環境学問』が基本だ。だがこの肥料は全く別種の政策だ」

「……」

セフィリアは、完全に俯いている。だが、二度三度深呼吸をして引き締まった顔でこちらを見つめ返してくる。

「これは、全部私が考えました」

「セフィリア様！ それは」

「良いのです。もうトレイルさんは、気が付いているのですから」

ジーク翁の反応を見る限り、やっぱりダイナモを隠れ蓑にした政策だったようだ。

「それが本当なら、神童や鬼才って言われても不思議じゃないな。それで、なぜ隠していた？」

「隠していた訳ではありません。私は子どもです。子どもの言ったことを、はい、そうですか。と納得して受け入れられるでしょうか？ 無理なのです。ですからお父様の名を借り、近くの農地での実証のデータを採取してから領地に広めたのです」

「子どもながらに裏付けを取るとか……こりゃ驚いた。学術院ですから、自身の空想をそのまま垂れ流す輩が多いのに」

「それでは学問ではないと思うのですが……」

「違えね」

セフィリアは、子どもっぽく頬に指を添えて小首を傾げる。その様子に俺は事実主義の大人びた側面と今の子供っぽい側面のギャップに笑ってしまう。

「それで？　これだけが領内に施した政策じゃない筈だ。他に何をした？」

「他と言われましても、まだ明確な結果が出ていない物が多いので伝えることは……」

「教えてくれ。それらも評価をさせてくれ」

「……分かりました。ジーク、私の執務室から資料を持ってきてください」

「ですが。あれらの実態はなるべく秘匿すべき案件でございます。部外者であるトレイル殿に見せるのは……」

あのジーク翁が歯切れが悪い姿に、重要な内容か、部外者である俺への忌避を感じられた。

「ああ、俺は話さないぞ。まあ、もしも話したら捕まえて殺すなりすればいいさ」

「……畏まりました」

ジーク翁がすぐに反応を示さなかったが、結果は了承してくれた。まあ重要な政策に軍備増強があれば、それだけで反逆罪に繋がりにかねない。ただでさえ小麦が安定供給できるモラト・リリフィムだ。不用意に武力を持てば、そう言う意思が無くても嫉妬に駆られた貴族がある事ない事を吹聴するだろう。

だが俺の前に出てきた政策は、どれも軍備とは無関係。いや、どちらかと言うと戦など無縁な政策ばかり。その内容には、専門分野が含まれており、目を見開き興奮する。

「まさかこれほどとは！ あの『脱穀機』はセフィリアの発明か！それに、そうか特産品の成立による交易重視政策！ 需要のない作物に需要を持たせるための新作料理の開発と直営店！ 一番の驚きは、生産力の低い北部で商品価値の高いものを生産する！ それでは『砂糖』と新たな甘味料か！」

俺の興奮した姿に対するジーク翁の視線など気にしない。だが初

対面のセフィリアが俺のこの姿には相当面を食らったようで、咳払いをして俺は誤魔化する。

「ごほんっ、すまない。とても良く考えられた政策だ。だが、分からないアイデアがある。この『農業試験場』と『品種改良』って言葉はなんだ？ 今年から始めたようだが」

「農業試験場とは、私が農業での様々な作物のデータを採取するために作った物です。今そこでは長期的に『品種改良』という人間に都合のいい作物を作る作業をしています」

「……作物を作る？ 言葉だけなら作物の創造のように聞こえるが？」

「いいえ、『品種改良』とは作物を配合して人間が飼育し易い能力を持たせるのです。親と子の顔の造形が似ているのも形質に受け継ぎ、と言うのでしょうか」

「なるほど。つまり、長期的に配合を繰り返し、対虫、対病気、雨風に倒れにくい、実りの多い、といった特徴の作物を作るんだな。これを論文にして発表すればどれだけ学术界に反響が及ぶんだろうな。論文にして発表して良いか？」

ジーク翁が今までにない殺気を放つ。つい口を滑らせた。本来この情報は秘匿だった事を思い出し、冗談だと言付け加える。

「それで、トレイルさんから見てもこれらの政策の評価は？」

「多少の改良点はあるだろうが、政策に改良は付き物だ。合格以上か他の領主よりも有能だよ。セフィリアは」

「それは良かったです」

ほっと胸を撫で下ろす。本当にそうだ。まあ、他の領主が糞過ぎるのも領主の合格ラインを下けている要因なのだが、これは言わないでおこう。

「トレイルさん。一つご相談があるのですが？」

「なんだい？ 俺自身は大した学士じゃないが聞けるのなら聞こう」
「広く学問を扱っているトレイルさんは先ほど『学術院ですら、自身の空想をそのまま垂れ流す輩が多いのに』と仰いましたが、学術院に対して思い入れは強いのでしょうか？」

「いや、あそこは金羽振りは良いだけだ。俺の研究や論文に対しての明確な反論材料なしでの文句が多くて困る」

「でしたら、私の。いえ、ジルコニア家がパトロンとなります。当家で農業研究をしてみませんか？」

「セ、セフィア様！ トレイル様は教会と揉め事を起こした学士ですぞ！ そのような者に対してパトロンなどと！」

俺だってなんの冗談だと思う。パトロンと言えば、簡単に言って後援者の事だ。音楽や芸術を趣味とする貴族が己が欲望を満たすために音楽家や芸術家に金銭的な支援するのだが……

「ジーク翁の言うとおりだ。俺の出した論文は教会に目を付けられた。いや、正確には教会派の貴族の政策を真っ向から批判した内容で、潰されたんだ」

「ちなみに内容をうかがっても構いませんか？」

「ああ、西部の戦線に送る武器を作るために山の木を切り倒し炭にし、鉾山から鉄鉾石を採掘するって計画だ。その影響について書

いた」

僅かに自嘲気味に語る。これを聞いた教会派の連中は、蛮族に恐れる者の言葉。我が祖国を守るための行為を否定するとはもしや敵国の間諜か。とさえ言われたのだ。あまりの物良いに呆れて物が言えないので、俺は一時的に学院を離れてほとぼりが冷めるのを待っているのだ。

「なるほど、その考えは正しいと思います。ジーク？ 間違っているのは教会の方だと私は考えるのだけれど」

「確かに武器を作る事は、死者を増やす事。あまり戦争が激しくなる事は正しいとは思いませんぬ」

「違うわ。そう言う事じゃないの。これは長期的に農民の生活を苦しくするわ」

「なぜ、そう思う？」

俺は、驚く。王都の学院ですら認めなかった俺の論文をセフィリアは、認めるのだ。それも俺の説いた農民の生活との密接な関係性を何も言わずに行き着く。

「森には高い保水性があります。もしも森の木を大規模に伐採してしまえば、森の保水性は失われ、山は雨水を蓄えられずにただ流れてしまう。いつかは、水を蓄えられずに地下水は無くなり、近くの川や井戸が枯れてしまう可能性があると思っています。」

それに、山肌が曝されることで山の土砂が流れやすくなり、土砂災害の発生が増えると考えております。だからお父様は、山火事の

禿げた土地に植林をしていたのです」

「そ、そうなのですか！？ トレイル殿！」

「模範解答ありがとう。ついでに補足すれば、過去に鉱山開発で周囲の農村での作物不良が起こる事例が存在する。このことから鉱山からは環境に悪影響を及ぼす何かが流れている可能性がある。とこんなところだ」

「……それが本当ならば、その領民の生活はどうなったのですか？ トレイル殿」

「さあ？ まだ結果待ちだ。何年も後に出る可能性の話だ。今すぐにじゃない。だが、俺も馬鹿どもにこれを教えようとして失敗したんだよ。分かりやすくして簡単な説明が思いつかなかった」

そうだ。俺はこれを過去の事例から取り上げただけで目の前で証明できなかった。まあ、出来る筈もない。森を焼き払って実証するなんて俺には出来ない。

「ですが私はトレイルさんの考えを支持した結果、パトロンになりたいのです」

「先ほどは失礼しました。学院の鬼才であるトレイル・ノレー学士殿を疑うような真似をして」

セフィリアは、俺に対して尊敬の眼差しを向け、ジーク翁は深く頭を下げる。

二人はなんと潔い事か。貴族は、教会と揉め事を起こしたくない輩も多い為に俺を腫れ物扱いするが、このセフィリアは簡単に俺の意見を認め、正確に理解した。ジーク翁も自己の間違いを認めるだけの器量がある。

だから、俺は答えが決まった。

「残念だが、パトロンの話は断らせて貰おう」

「……っ!？」

「ただし、別の方の依頼。家庭教師は、是非とも俺が受け持ちたい。パトロンになってしまっただけという時に学院に戻れないという理由があるのでね」

「……家庭教師。なんの話ですか？」

セフィリアが小首を傾げる。

その後、リリーとキリコを加えての説明でセフィリアは、かなりご立腹だった。第一学院には行かないらしい。そこはこの家の人間の説得する事だが、セフィリアも俺が入ったように家庭教師を取ることを認めた。

「では、今後ともよろしくお願いします。トレイル先生」

その一言に結構照れたのは、俺一人の秘密だ。

学士・トレイル（後書き）

今回は会話が多かったですね。理論屋と学士が会話するときとうなるだろう。と言う話。

凄い貴族同士の会話じゃないですね。あとジーク一人置き去り気味だった気がする

家庭教師のいる日常（前書き）

今回は、セフィリア九歳夏の終わりごろ。
セフィリアから見た家庭教師との特殊な師弟関係です。

家庭教師のいる日常

領主の城に新たに一人、王都の学術院の学士・トレイル先生を住み込みで招いている。

朝は、不規則な生活をしていたトレイル先生が侍女たちに叩き起こされ、朝食の席では眠い目を擦りながらパンを食べている。その姿は、生前の孤児院に居た小さな子どもたちを思い出すので、少し笑えた。

昼間は、長時間私に家庭教師として勉強を教えてくれるのかと思っていたが、明確な週のスケジュールが決められた。

そして、暇な時間は――

「トレイル先生？ 何をされているのですか？」

「うん？ セフィリアか。いや過去の資料を読み直している。ダイナモの残した組織の客観的な再評価だ」

「そうですか。でも、どうして？」

「いや、組織自体は問題ないが、税の計算。この城での総合計算のミスは少ないが、もっと大本、役人たちの計算ミスが多いな。思っただけだ。あと、暇潰しに過去の農地の収穫状況をセフィリアのいう可視化してみた」

「これは、ありがとうございます」

「いや、この国の食糧を支えるモラト・リリフィムのかつての脆弱さと今の強固さが良く分かる。このグラフ化という情報の可視化は、知識のないものでも視覚的な比較ができて非常に便利だ」

トレイル先生は、このように領地の情報を改めてチェックしている。別に頼んだ訳じゃないのだが、自らの研究に役立ちそうな内容は率先することだ。

あと、たまに馬一頭を拝借して近くの農村や町にふらりと出掛ける行動力は、貴族だったのかと問いたくなるほどの軽さだ。

「先生。今日は、授業の日ではありませんか？」

「忘れてないさ。俺みたいなただ飯喰らいはこういった細かな仕事しかできないからな。お前は実質的なパトロンのようなものさ」

「もう、先生はそう言ってご自身の価値を貶める行為は、褒められませんよ。それに、私は先生の助言があるおかげで画一的な農地指導書の信頼性も上がるんですから」

「そりゃどうも」

トレイル先生は、ペンを置き自分の作業を中断してこちらに向く。

「それじゃあ、セフィリア。これから勉強を教えるが、教える内容は『教養』の一点だけだ。他の歴史や数学といった内容は、必要とあらば教えよう」

「先生。質問なのですが、その『教養』とは何を学ぶんですか？」

私は、事前に学院の試験の分類は聞いていたが、その細かな内容までは知らない。

「教養ってのは、貴族の教養だ。元々は貴族のための学問機関だからな。そう言ったものが慣習化したんだ。俺個人の考えでは要らん気がするが」

ふう、と溜息を吐き出す先生に、私は笑ってしまう。なぜなら目の前の人物は貴族と言うよりも酒場の一角に居る平民と言った方が似合う風貌なのだから。

「でだ。セフィリア。君に問題だ。貴族の教養にはどのようなものがあると思う？」

「えっ、それは……」

私は突然話を振られて、すぐには答えられなかった。だが、数度深呼吸をして私なりの考えを述べる。

「貴族。と言うからには、貴族に適応される法律や王家の持つ組織に関する知識問題でしょうか？」

「三割って所だな。それは筆記に約半数。残りの筆記は、各領地の特産品や戦争問題、領地管理問題だ。そして、残り半分に実技もある」

「実技ですか？」

私がオウム返しに聞き返してしまう。だって、実技で何を図るのか分からないのだから。

「そうだ。実技は二つ。一つは、一般的な貴族の嗜み。いわゆる社交ダンスなどがある。そしてもう一つは、専門実技だ。例えば武門の家なら軍盤と剣術。商家の家なら商売のいろはと高等計算。芸術に精通するものならば、作品や音楽を披露すれば良い。これは選択だ。ジルコニア家はどのどれも当てはまらないために逆にどれを選んでも問題ない。得意な事はあるか？」

私は、聞いた内容を頭の中で反芻させて、答えを返す。

「得意なのは、軍盤だけです。後は貴族らしいことなんかはやったことが無いんです。申し訳ありません」

「謝る必要はない。だが、なぜ軍盤？ 剣術は習っているのかい？」

「いえ、軍盤は友達のキュピルくんに教わって、それからジークを相手に冬場の暇潰しで。あと商売も出来る自信がありませんし、芸術も出来ません」

なんだか、私は物凄い場違いな状況に置かれている気がする。領主としてはやっているが、貴族としては全くなのだ。社交ダンスですら踊れる自信が無い。

「そうか。まあ、今までの生い立ちを聞いた限り、そう言った専門教育は受けていないことが分かる。だが、試しに俺の作った課題をやって貰って適正を図ろう」

そうして始まった授業だが、私は早くも挫折する。

「……ここまで貴族の教養無しで領主を出来るのは、一種の才能だな」

「先生。それは褒めていません」

「いや、すまない。まさか、ダンスの基礎すら」

そうなのだ。社交ダンスですらまともに出来ない。他、マナーは最低限叩きこまれたから問題ないが、細々とした貴族社会のマナーなどもう目が回りそうな程だ。

「まあ、今日はここまでだ。明日は休養日だからゆっくり休むように」

「はい。ありがとうございます」

私は、ここ数年で積み上げた領主としての自尊心は完膚なきまでに叩きのめされた。こんな気持ちになるのなら時間の全てを好きな料理や新たな技術開発に向けて尽力した方が良い。

「はあ、私って本当に才能無いのですね」

一人ごちる。生前もそう言った教養は無い。学校の授業は筆記は良好だが技能一般は頗る悪かった。そして転生してからそれが解消されたり、新たに二物を与えられるのかと思っていたがそんな事は無いようだ。

「少し気分転換しましょうか」

私は、自室に戻り紙束を引き出しから取り出す。今度作る物のアイデアを一つ一つ絵で纏めているのだ。その中の一枚を取り出しアイデアと現在の実現可能な度合いを深く考察する。

「サイロ……は、機密性の保持とレンガの耐久性の問題があるから建設コストが掛るし。せめてセメントがあれば違うんだけど。ああ、ならセメントを作ればいいかしら。耐水セメントなら需要は多そうね」

だが耐水セメントの作り方を私は知らない。ならこの世界で探すしかないか。古代ローマの時代にはすでにセメントは存在していた。もしかしたらあるのかもしれない。

「じゃあ次は、水車ね。前に見せて貰った水車は、粉挽き用の水車で揚水式じゃないからこれは改良出来そうね。そうすれば低い位置の川の水を積極的に町や農村に引けるから衛生状況が更に改善される。ついでに、上下水道ももう少し整備した方が良いわね」

更に別の紙にアイデアを纏める。今度は、二枚の紙を取り出し左右を見比べて唸りを上げる。

「右のワイン造りの圧搾機か、左のレモン栽培か」

どちらも効率化という面では貴重だ。東部の葡萄を絞った果汁でワインを作るのだが、これは昔ながらの足踏み式。これを圧搾式に変えれば、家畜を労力として無駄のない分離が可能になるが、文化を大切にしたいと思うので躊躇っているのだ。

また片方のレモン栽培は、チーズ作りに必要だ。チーズの製法は、酢などの酸性の液体を使って動物の乳を凝固させているのだ。だが酢は、それほど多くが出回っていない。穀物酢や果実酢などは、酒や果実酒を更に発酵させなければいけ為に時間も手間も掛かり、逆に商品価値が下がる。

「酢を使った料理が少ないのがイケないのかもしれないけど。美味しい筈なのですが」

だからだ。酢の絶対量が輸出用のチーズ製造に対して若干少ない。それを補うために地域によっては、子羊の胃を取り出し、胃の凝固作用のある酵素を利用する方法でチーズを精製しているのだ。それでは、羊の個体数は増やせない。多くなれば、羊皮紙を使っている地域に向けて、家畜の輸出も視野に入れた政策が出来る。

私は、酢の価値を上げる案も考えたが、ここはあえて製造の多様性を求めてレモン汁を使った製法の確立とレモンの食用などを考えている。

「レモンの栽培ができれば、レモンの皮を使った砂糖菓子とかも出来るそうね」

更にアイディアを書きこむ。直営店でのお菓子のアイディア。ああ、この時間が一番楽しい。

「セフィリア。話があるんだが」

「っ！　せ、先生！　ノックくらいしてください！」

私は慌てて卓上の紙を仕舞う。

「おう、悪い。少し話をな」

「なんですか？」

私は少し不機嫌そうに言いつつも、内心は先ほどしまった紙束を言及されないかドキドキしていた。

「さっき見ていた資料の中にダイナモの農地開拓計画があったんだが、それがお前の時から手付かずなんだ？　どうしてだ」

「ああ、それは――」

就任直後にジークの言われたあれである。他意はない為に答えを飾らない、偽らない。

「あの時は、私の出した肥料による農地改革の方が効率が良いと判断したためです。それが何か？」

「いや、そうだよな。うん。理由はどうあれあそこに手を付けないのは正解だ」

「どういうことですか？」

「実はな、あの一帯は、西部は湿地帯なんだ。だから普通よりも開拓に時間が掛る上に、領地の境の川は良く荒れることで有名だ。あの周辺に村はあるがどれも小高い丘の上にある理由はそれだな」

「小高いって事はどこか高い所から水を引いているんですか？」

「いや、あの辺は湿地帯だから、少し穴を掘れば水が染み出す。ただ農業用であって生活用水としては川に汲み良くのが現状だ。上流の北西部の村々は、川から水が上手く引けるが、西部、南西部は、地理的に川が村より低い。つつい難しく言って仕舞ったが問題ないか？」

「ええ、丁寧な説明ありがとうございます」

トレイル先生は、きょんとした顔を一瞬するがすぐに真剣な表情に戻る。

「そういう理由で、開拓よりも先に河川の決壊防止が優先しなければならぬ。あと、川の氾濫で木造の橋はその度に流されるから頑丈な石橋も欲しいな」

「分かりました。助言ありがとうございます」

「ああ、他にも気がついた事があれば報告する」

そう言って出て行ったトレイル先生は部屋を出る。私は気配が遠ざかった事を確認して、領内西部の地図と紙を拡げ、今提示された問題に対する可決策をいくつも書きこむ。家庭教師であるトレイル先生が来てから領内の問題点解消がスムーズになった。

生徒の私と家庭教師のトレイル先生の日常は、勉強よりも仕事仲間と言った方がしっくりきます。

家庭教師のいる日常（後書き）

最近、メモ帳に適当にネタを書きこんでいたら、見方が分からなくなってきた。整理をしたい。

閑話：工匠の試み（前書き）

脱穀機を開発して三年。悩み続けたスポパヌスはある行動に出る。

閑話：工匠の試み

儂は、今日も直営店・ニーレ・ストールで仕事終わりの酒を弟子たちと飲み交わしていた。

「何か良いアイディアはないかのう？」

「また言っているんですか、師匠。いい加減にあの貰った鉄を打たないと錆ついちゃいますよ」

そうなのだ。脱穀機を制作する際、余った鉄を儂は新たな便利な道具のために思案していた。

「他の兄弟子たちは、水車の軸部分だとか、斧や鍬にしたのに、当の師匠がまだ何も作ってないんじゃないしが付きませんよ」

「分かっているんだがよ。どうにもこうにも、ただ作るだけじゃ面白みがねえんだ」

「そうやって。子供みたいに固執しないで大人になってくださいよ」

普段は、おどおどした態度だがこの弟子は酒が入ると容赦が無い。たとえ師匠の儂であっても。

「ああっ！ 喧しい！ 儂は少し工房から離れる！ あとはお前が仕事をしておけ！」

「えっ、ちょ、し、師匠！？ 待ってください！ お会計は僕が払うんですか！ 待ってくださいよ！」

本当に大人げない。腹いせに弟子に仕事を丸投げして、儂は、ただ飯喰らって帰る。

その翌日は、早朝の農家の馬車に乗せて貰い、近くのラムル村に実際に赴いてみる。農村風景など殆ど見たことが無い儂にとっては色々と新鮮に映る。

「俺も一緒に行って村長に挨拶してくるだよ」

「うむ。かたじけない」

そう言って案内された農村は本当に喉かだ。小麦畑の金色と遠くの別の畑の緑がまたなんとも言えないコントラストにステンドグラスのアイディアの一つとして浮かぶ。

そうこうしている内に、村長の家の前に辿り着いた。

「そーんちよう。お客さんだよ」

「はいよ。どちらさんだい？」

中から出てきたのは、がっちりとした筋肉質の中年男だ。すこし鋭く涼しげな顔立ちは上に立つ者の風貌である。

「はじめまして。儂は町の工匠・スポパヌスと言う者だ。実は新たな道具を開発するためにこの村にやってきた」

「そうですか。村には案内が必要でしょう。ダリア」

母屋の奥から呼ばれたのは十歳程の少女だ。綺麗な赤毛を三編みにしておっとりとした少女が出てきた。町の同年代の子どもよりも大分発育が良いのが見て取れる。

「ダリア。村を案内してあげなさい。一通り村を回ったら、戻ってくると良い」

「分かったわ、お父さん。スポパヌスさん、こちらです」

「ああ、ありがとうよ」

とても丁寧な様子で儂は驚く。儂が同じ年の頃は、悪戯しては良
く親に叱られたものだ。

「村はそれほど広くありませんが色々ありますよ」

「うん。見せてくれ」

それほど広くないなど謙遜だった。広すぎる。

儂は、北側からぐると反時計回りで回った。北の村共有の粉挽
き小屋とその隣の水車。村の中央部には畑があり、畑の傍を通った
時、少し歪んだ鍬で畑を耕していたので、儂が槌で打ち付けて形を
整えてやったら、使いやすいと喜んでいた。外周部には牧草地や酪
農をしており、それから南の洗い場を通して村の風下・北東の所で
儂は、顔を顰めた。

「なんじゃ、この臭いは」

「これは肥料って言うんです。畑に混ぜると作物が良く育つん
ですよ」

「だからってこの臭いは酷い。鼻が曲がりそうじゃわい」

「でもこれがあるから美味しい野菜が取れるんです。感謝しないと。
それに、最初に作った肥料はもうあまり臭わないですよ」

そう言って村長の娘のダリアは、嬉しそうに微笑んでいる。

そして村長の家の前まで戻ってくるまでに気がついた事がある。

——なんで作物の種をあややってばら撒いているんだ？

その疑問が拭えないでいた。一つ粒一粒植えた方が効率が良さそ
うな物を。

「なあ……」

「あっ、トレイルさんだ。トレイルさん、こんにちは」

儂が話掛けようとした時ダリアは、目の前の一人の男に挨拶した。トレイルという男は、よれよれの服を来てぼけっと畑を眺めていた。

「おう、ダリアか。そちらの方は？」

「なんでも新しい道具を作るためにこの村にやってきた工匠さんです」

「そうか。そろそろお昼を持ってきてくれないか？」

「あつ、はい。分かりました」

トレイルという男に従順に従うダリア。この男は、村ではどういった立場の人物なのだろう。農夫のように筋肉質ではない身体では判断できない。

「のう、あんたはこの村の者かい？」

「俺は違うよ。暇だから村まで足を運んで、農業風景を楽しんでいるだけさ」

「そうか。実は気になった事があるんじゃないが、なぜ、種をああやって蒔く？」

「うん？ 種を撒く？ そりゃ、種を撒かなきゃ芽は出ないからな」
「儂が言いたいのはそういう事じゃないんじや。種をああやって乱雑に撒いては効率が悪いのではないか？ 少し土を盛れば、水捌けも良くなるだろうに」

「ああ、そういうことか。種は全部が全部発芽する訳じゃない。だからああやって神頼みで撒いているんだ。だが、土を盛って水捌けか。詳しく話を聞かせてくれ」

儂はトレイルという男に考えを伝えた。種を広い土地で撒く非効率性を、密集して出来てしまった苗は抜いて整える事、ダリアから聞いた村の傾斜のない南西部は水捌けが悪く根腐れが起こしやすい事を、だ。

「ふむ、では。スポパヌスは種を撒く行為を効率化すれば良いと考えているんだな」

「ああ、種だけ別の狭い場所で育て、ある程度に育てた苗を等間隔で置いていけばいいと考えた」

「なるほど、苗を育てて、それを植える。植林に似た概念だな。それに土を盛ることで水捌けを良くするのか」

「そうだろう？ 本棚が列を為してるから取りやすんであって、作物も列を為さなければ取り辛いと思うんだが」

「だが、問題がある。苗を育てたは良いが、それを植えるのはどうする。土をそのまま移動させる手間を掛けるのか？」

「うーん。それはだな」

石で地面に絵を描いている大の大人二人。儂はふと顔を上げるとそれを楽しそうにダリアがにこにこして見ていた。

「楽しそうですね。何を書いていたんですか？」

「うん？ ああちょっと村の農業を話していた」

「そうですか。お昼持ってきましたよ。パンとロールキャベツです」
「ほう。この村でもロールキャベツが食べられるとは」

儂は石を置き、トレイルという男と並んで昼飯を食べた。うん、肉とキャベツが上手い。パンも焼き立てのようでふわふわだ。農村部は、何時も硬い黒パンだという話を聞くが、むしろ良い食事を取っているのではないかと思い、隣に聞いてみる。

「食事が上手いのう」

「そうだな。俺も適当な物しか食わなかったけど、最近は食にうるさくなり始めて困っている」

「ああ、本当に毎週ニーレ・ストールに通うようになって嫁にも同

じ料理を作らせるようになって食卓が豊かになった。何故じやろうな？」

「さあ？ 民の暮らしが安定するのは領主が善政を敷いているからだろ。収穫量が増えたから税も一時的に増やす領地なんて腐るほどある」

「そうですね。私もこの領地に生まれて良かったです。それに領主のフィリアちゃんは優しいです」

「ほう、領主を知っているのかい？ どんな人だった」

「可愛らしい人です」

ダリアが微笑んでいる。あまり要領を得ないが、とにかく悪い人ではないようだ。

三人で並んで食べた昼食は、お腹を満たし空を見上げる。ああ、青空じゃ。このままここで農村部の工匠にでもなろうかな？ などのほほんとした考えが過る。

「食休みしてください。私は食器を片づけますね」

「おう、ありがとよ」

そう言って首だけ振り返り、儂はお盆に食器を乗せるダリアを見て閃いた。

地面の石を広い、適当に絵を書いていく。

「どうしたんだい？」

「いや、苗を植える道具を思いついたんだ。鉄のお盆に砂を詰めて、そこに種を撒けばいい」

「なるほど、お盆なら持ち運びが容易いからな。だが、お盆に水を満たしても水捌けは悪い。穴を開けておく事を勧めるぞ」

「あるほど、穴をあけるのか。だが、これじゃあ穴から土が流れないか？」

「それは麻布を敷いて、その上から砂を被せるんだ。麻布は通気性が良いから土が流れないが水はちゃんと流れる」

「そうか、なるほど。これは良い考えだ」

「ただ、金属だ。腐食するだろう。耐久性問題もあるな」

「そこは農ら工匠の仕事じゃ！ 失敗を元に何度も作りなおしてやるわい！」

「じゃあ、土を盛る案は俺の仕事だな。中々に有意義な時間だった」

農らの間には友情が芽生えた。その夜は夜を通して酒を飲み明かし、翌日の早朝。酒の抜けない頭で村へと向かう馬車に乗せて貰い帰った。

その後は鉄を打って、鉄製の長方形のお盆を作り、ラムル村に試して貰った。

結果が出たのは、二年後だった。

余談じゃが、鉄製のお盆の話を聞いた料理長が穴を増やしたものを作ってくれと言ったので作ったら、揚げ物の油切りとして使われた時、泣いた農がいたのは秘密じゃ

閑話：工匠の試み（後書き）

こうして世界にトレーが誕生した。そして苗木の概念も同時に誕生したのである。

ダリア成長しました。赤毛の美人になりそうです。そばかすは無いですね。

最低最悪の教養講座（前書き）

セフィリア十歳。納税の秋が差し迫る中、向かう場所は……

最低最悪の教養講座

私は、三日を費やして一つの町。いや都市に向かっていた。

「セフィリア。途中での休憩の少ない長旅はどうだ？」

「そうですね。農村部への挨拶が出来ないのが心残りです。ですがとても勉強になる物が多かったです」

私は不機嫌を隠さずに対面に座るトレイル先生に返答する。

「お前にああいう他の領地の光景を間近に見せるのは教育上良くないと判断したんだ。それに外面を見ただけで賢いセフィリアなら大体は分かるだろう」

そう、ここに来るまでに見た光景は本来の貴族の政策そのままだ。町の衛生状態はモラト・リリフイムより悪い。治安は兵が多いために悪くはならないが、どこか威圧的な雰囲気がある。途中で通るかかる農村部の小麦畑などは、一面の金色なのにも関わらず農民の表情は暗い。きっと実など殆どないスカスカな状態なのだろう。連作障害が酷いのだ。

「先生、なぜ貴族たちがああなるまで放置し、王都の社交界に出かけるのは分かりません」

「そこは、貴族ごとの事情だ。今回の社交界は出たくないかもしれないが、十歳になったんだ他の貴族たちのちゃんとしたお披露目をするのが大体の伝統だ。俺だって二男という立場でも出たんだ我慢しろ」

そう言うトレイル先生は、今回の付き人だ。パリッと糊の聞いた

シャツにタキシードと普段の彼に見慣れているために、酷く違和感を覚える。

「それにだ。セフィリアが今回出席するのは、マナーの勉強のためでもある。吸収できる物は吸収して帰るぞ」

「先生も出たくは無さそうですね。こんなことなら来年度の予算編成を作るべきでした」

「ああ、だが税收管理は、リリーや侍女隊の管轄だ。まだ税收が集計できない以上何もできない。それに最終決定を下すお前が領地を離れていてもある程度はマニュアルで対応できる」

ここ数日、正論を言ってくるトレイル先生に対して少し苛立ちを覚える。だがもうじき王都。そこで少しでも学ぶことをしよう

私達は、馬車に揺られ、グラーディア王国の王都であるアロン・ニュソロンに辿り着いた。遠くから見えるのは王都の防壁とそれを囲む広大な畑。外周を囲む高い防壁。王城を中心に放射状に展開された町。どうやら三重の防壁で隔絶して、一重目の区画が庶民区域、二重目が商業区、三重目が貴族、商人の居住区。中央に王城が聳え立っている。

「ここが王都ですか。王都には確か先生の居られた学院もありますよね」

「ああ、思い出したいくない忌々しい場所だが、ダイナモと出会ったのもあそこだ。興味はあるか？」

「お父様の通った場所には興味があります。ですが先生と一緒に何かと不都合があるでしょう？」

そう言って、トレイル先生は苦笑いを浮かべた。まあ、これから向かう場所も貴族がいるのだ。多少トレイル先生の事を知っている

者がいれば皮肉も言われよう。それは我慢すると心に誓う。

会場となったのは、第三区画の文官長の屋敷。そこには煌びやかなシャンデリア、豪華な衣装、色取り取りの刺繍と宝石を身に付けた老若男女が着飾っている。

はつきりと自分たちの恰好が貧相だ。と言うことには劣等感は抱かない。むしろ誇りに思う。逆に、あまりの着飾り様に吐き気すら沸き起こる。

「トレイル先生……」

エスコートするトレイル先生を少し不安になり見上げるが、その表情は普段の気だるげな様子一変、明るいポーカーフェイスでいる。そして悟る。ああ、これが腹芸か。本当は先生も嫌だけど、私に正しいマナーを教える為なのだ。と理解した。

だから私も笑顔を作る。いくら脂ぎった禿頭の男の息が臭かろうと、幾ら淑女の香水の匂いが牛糞と変わらない程に酷いものだろうと、私は堪えて見せる。

トレイル先生にエスコートされながら、進む中で私は周囲の注目を浴びる。と言っても貴族の約半数だ。

注目の殆どはトレイルに。『鬼才の変人』『追放された学士』『ノレー家の面汚し』などと軽く罵られているのに予想では分かっていたが、大分堪えるものがあった。

残りの視線は私に集まる。『あれは誰だ?』『知らない』『みすぼらしい』と私に向けても侮蔑の陰口が向かう。もうすでに居心地が悪いが、遠くから人が近づいてくる。

近付いてきた男性で、髪と目の色が違うこそすれトレイル先生と

顔の造形が似ている。

「トレイル。最近、学院を去ったと聞いたが、どこに行っていた」

どことなく怒気を孕んでいるような言葉に私は少し、怖くなった。

「久しぶりですね、クレイラル伯爵。ご健勝なによりで」

「ふん。家を飛び出したお前に言われたくないわ」

家という単語からこの人がノレー家の当主なのだと判断した。

「そちらのお嬢さんは？」

「こちらモラト・リリフィム領・領主のセフィリア・ジルコニア伯爵です」

「お初にお目にかかります」

ドレスの端を摘まんで軽く会釈する。そのマナーは間違っていない筈だ。だが鼻を鳴らされた。トドメに『女が領主など』という小言が聞こえた。

これは明らかな女性蔑視。生前男性だった私が男性から女性蔑視などおかしい話だが、領主としての矜持を傷つけられる。だが、それでも笑顔を忘れないように努めて努力する。

「して、セフィリア殿と愚弟はどのような関係で？」

「トレイル先生は、その貴重な知識を当領地で存分に振るって頂いております」

「つまり、パトロンの関係か」

平然と弟を愚弟呼ばわり。私はフォローに回るがそれですら侮蔑の視線が混じっている。

その後は少し会話を重ねたが、終始私が感情を抑え、クレイラルが嫌味を言う構図。

その後も、挨拶に来る貴族の中には、私達を侮蔑し上下関係をはつきりさせたい者、ただの商売の鴨にしようとする者、遠まわしに

領主を手放す事を勧める者。みな総じて私を『田舎者』『何もない領主』『無能貴族』というレッテル付けを続けた。

もう、我慢の限界だ。と言う時、一人の公爵に挨拶された。

「お久しぶりですな。セフィリア嬢」

「お久しぶりです。セフィー」

目の前には同年代の少年とその父親。三度目となるが彼の顔を良く覚えていた。

「お久しぶりです。ランドルス侯爵。キュピルくん」

「はじめまして、ランドルス侯爵」

「お前がダイナモの友人というトレイルか。中々に面白い男らしいな。悪評よりも俺はお前の持つ知識に興味ある」

これはこの会場に来て初めての悪意以外の言葉。それに私は少し安堵する。味方がいるのだと言う事を知って。

「いえ、俺の論文は教会の教えに反するようでして」

「なに、有用な物は教義を無視してでも使えば良い。優秀な者は後世に評価されるが、現在利用できれば多大な恩恵を得られる。俺はそう考えている」

「そのお心遣い、感謝します」

トレイル先生とランドルス侯爵は、近くのワインを貰い何やら語らいを始める。私は、キュピルくんと置き去りの状況だが、それを気遣った二人は一言。二人でゆっくりしろ。学べる事を学べ。というニュアンスの言葉をそれぞれから頂いた。

「セフィー。どう？ 楽しんでいる？」

「ええ、楽しんでいるわ」

「そう。食べ物があるから何か食べようか？」

「そうね。何か珍しいものはある？」

セルフ式の会場では、各領地の料理が振る舞われているのだが……どれも似たり寄ったりで自分の領地の料理——主にベーコンやチーズなど——を食べていた。

その後は、私の食欲を奪う出来事があった。今まで侮蔑の表情を浮かべていた貴族たちの視線が猛禽類の目になる。もちろん、捕食される側にいるのは私だ。

「これはこれは、ジルコニア伯爵。どうですか？　我が領地の料理は」

「ええ、好きな人には好まれますね」

私のせめてもの抵抗だ。直接善し悪しと言えないから、せめて『好きな人には好き』裏側の意味で、私は好きではない。と伝える。だがそれを良い意味で受け取った見ず知らぬ貴族は、気を良くしてキュピルに話を振ってくる。

「ランドルス家のキュピル殿は、ジルコニア伯爵とはどのようなご関係で？」

「セフィーとは、仲の良い友人です。彼女はとても才覚のある人ですよ」

「それはそれは、ランドルス家を背負って立つ方がそのような評価とは、とても興味がわきますな」

舐めるような視線。気持ち悪さに食欲が無くなる。どうせ考えている事は、私を足がかりに、将来ランドルス家の当主となるキュピルとの関わりを持つとうと考えるのだろう。

その後も、何人もの貴族が話しかけてくる。最初の侮蔑。すぐに手の平返し。こんな場所に長く居れば人間不信にでもなりそうだ。もう、お母様やジーク、キリコ、侍女たちに農家の人たちの顔が懐かしい。

「セフィリア。そろそろお時間です。俺達はこれでお暇させて貰おう」

「セフィーは、帰るの？」

「ええ、あまりお話出来なかったけど、楽しかったわ。次はゆつくり話しましょう」

「そうだね。その時は軍盤でもしようか」

「ええ、約束よ」

周囲が、微笑ましい。などと声を掛けてくれる。上辺だけの言葉に最後まで笑顔を貫いた自分を褒めたかった。

馬車の中、やっとこの王都より離れる事が出来る安堵感と同時に疲労感に襲われる。

「お疲れ様。良く耐えたな。何か学べた物はあったかい？」

理不尽に言われた事を思いだしそうなので、ただ脱力しながら答える。

「ええ、貴族って上辺だけが多いんですね。それに、自分より下を見下すのが好きなようで」

「あれが全部貴族って訳じゃないが、そういう貴族もいるのさ。それと同時に、自分の領地がどれほど恵まれているか？ いや豊かになったか分かったか？」

「ええ、料理の味で分かりましたわ。他は酷かったわ。第一、野菜が少ないんですもの。あれに魚があれば良かったのだけれど、流石に魚は無理なようね」

私の溜息に「干した魚をツマミに酒を飲むと旨いらしい」とランドルス侯爵から聞いたらしい。それを嬉しそうに話すトレイル先生は、どこにそんな元気があるのか不思議に思う。

「それで、見下し好きの貴族がどうしてころっと態度を変えたか分かるか？」

「私がランドルス侯爵とキュピルくんとの関わりがあると分かったからですよね。私に関わっても得る者は無いのに」

自嘲気味に言うのだが、トレイル先生は同意してくれない。むしろ、ここで真剣な表情になられた。

「セフィリア。自分の領地と他人の領地を比較して思ったことはあるか？」

「ええ、重税に加えて、農作物の収穫量が上がらないのが原因で農民が苦しんでいたわ」

「いや、領地自体の地力だ。モラト・リリフイムは、まだ開拓する余地がありながらも、あれだけ豊かだ。今は他の領主や貴族たちが君やモラト・リリフイムをただの田舎と考えているが、気がついた時、掌を返して全て筆られる可能性がある」

その瞬間、私の背中に寒気が走る。あの空間に存在していた猛禽類の目は、自分一人だけじゃなくて、領民まで筆り取ろうとしていた事実に行き着いて戦慄した。

「だから、今回の貴族の教養は『貴族からの危機意識』だ。これからの政策に役立ててくれよ」

「先生、意地が悪いですね」

「こればかりは、実地で学ばないとどうにもできない。セフィリア

は、専門教養は、どの部門でも半分は完璧だけど半分がからつきしだ。軍盤出来て剣術出来ない。速い速度で金勘定は出来ても優し過ぎて商売は儲けが疎か、芸術もピアノはある程度扱えるようだが、駄目だ。お前はどんな領主よりも善政を敷く一方で、他の貴族との関わり方が出来ていない。アンバランスなんだよ」

「それは……最悪の授業ですね」

「これを機に、増税して対外用の騎士を増やすか？」

私は、その案は却下した。確かに増税すれば領民の金余り状態は解消されるが、それで不必要な騎士を増やすよりは、別の方面に金を工面する。

まあ、対外用に何かの策を用意するのは悪い話ではない。と私は一人馬車の中で考える。

最低最悪の教養講座（後書き）

約半数は、歯牙にもかけない。残り半数は陥れる。極僅かに興味を持った者の要る貴族の社交界。特にダンスを踊ったりは無かったです。ね。ごめんなさい。

成り上がり騎士・シュタイニーの調査レポート・その一（前書き）

所変わって成り上がり騎士様のお話。

成り上がり騎士・シュタイニーの調査レポート・その一

私は、シュタイニー・ウィスプ。騎士である。

ついこの間までは学院で剣術指導員をしていたが、その評判で何時の間にか王宮での剣術指導をしていた。分らない。

先日第三皇子のユースピム・アロン様や三大貴族の御子息に剣術指導をしたりしたのだが、子どもの相手は苦手だ。いや、むしろ嫌いだ。

今日は、そんな剣術指導の仕事を離れ、王都の次席文官のナタリと仕事の話をしていた。

「ねえ、あんた先日の文官長の屋敷でも社交界の警備に当たったのよね」

「ああ、相変わらず気持ち悪い場だ。腹の探り合い、騙し合いだ」

「ふーん、で、何か面白いものはあった？」

仕事の話……だったはずだが、仕事熱心だが噂好きの彼女は、時々噂を元にとんでもない事件を引っ張ってくる。前も侯爵の領地での人身売買が発覚し、実際に出勤したのは私だ。

まあ、そのお陰で男爵だった私は、事件解決の功労者の一人でここまで出世が出来たのだが。

「あんな所に面白いものなどあるわけが無い。中央の貴族と教会派で牽制し合う状況だ。それ以外の平凡な領主たちなど萎縮するか、関わらない事を決めていたぞ」

「ふーん。いつも通りだったんだ」

「だが、注目する人物はいたな。トレイルが居た」

「はあ？　トレイルって、まさか」

「ああ、学院を離れて休職中のトレイル・ノレーが居たよ。どうやらパトロンを得たようだ」

ナタリーは、目を白黒させていた。教会からもっとも疎まれている学士であるトレイルがそんな場所に居るのだ。何かあると彼女は感じたのか、身を乗り出して聞いてくる。

「ねえ、他には！ 何かあった！ そのパトロンは誰！」

「私が見たのはほんの少しだ」

「そう、なんだか面白そうなものが見れると思ったのに」

「それなら名簿でも見れば良いんじゃないか？ 私が覚えている範囲でなら絞れるぞ」

「ホント！ ありがと、助かるわ！」

私も本当にお人よしだ。まあ、これで何か出世の手がかりがあれば、次は騎士団でも引き入れるかもしれない。子どものお守は懲り懲りだ。

それから名簿から中央貴族と教会派を排除し、残りの貴族たちを選別する。

「確か、女性だったぞ」

「へー、物好きね。あいつの言っている事硬くて理解できない人が多いのに」

「それで領主らしいがそれは良く分からない」

「じゃあ、領主、もしくは領主代理で探すね。ああ、三人いるわね」

「なんでも、ランドルス侯爵との仲は良好らしい」

「ああ、この二人駄目ね。一度ランドルス侯爵に求婚したんだけど、当時手ひどい振られっぷりしたらしいわ……って残ったの十歳の女の子じゃない！？」

「ああ、そのくらいの年齢の女性だな」

「あんた、もつと言ひ回しを簡潔にしなさい！」

持っている紙束で頭を叩かれた。これが五年前に使われていた羊皮紙の束だったらどんなに痛かったか、と思いながら抗議する。

「何をする。大切な資料じゃないのか？」

「あつ、そうだった」

「それで、誰なんだ？ トレイルのパトロンは」

「モラト・リリフイム領のセフィリア・ジルコニア伯爵よ。モラト・リリフイムって言えばドの付く田舎領地でしょ？ 小麦しかない」

「私は、黒パンが好きだな。あの硬さが癖になる」

あんたは黙ってなさい、と言われる。ただ、ナタリーは顎に手を当てて紙面と睨めっこをしている。

「ねえ、今の領地の農業状態って知ってる？」

「いや、全く。だが、北のエラヴェエールからの穀物輸入が多いと聞くが」

「知っているじゃない。そうよ。北では、広い土地があるから休作を多くして品質の安定した穀物を生産しているの。その余剰穀物をグラードリアに輸出しているのよ。輸出要因の一つは、グラードリアが倒れれば、西部の国々が流れ込んでくるのを恐れた後方支援のようなものだけだね」

「あの国自体はそれほど強い軍事力は無いからな。それで、これがトレイルとモラト・リリフイムとどう関わる？」

「トレイルの研究分野は、農業の含まれていたはずよ。農作物の作れる土地の多いモラト・リリフイムの農地改革をトレイル主導で行っているかもしれないわ」

「それで……私にどうしろと？」

「うん。調査してきて。一か月ほどみっちり」と

「……嫌だ」

「大丈夫よ。王子様たちの訓練には適当な理由を付けてあげるから、農村部にでも行つてのほほんとしてきなさい。休暇だと思って」

「よし、行こう。旅費は必要経費で降りるだろうな」

「もちろんよ」

私は、とても幸運な気分でもラト・リリフイムへと調査に向かった。

旅装で旅人の真似をして、必要な物だけを荷物として持って、商人のキャラバンに同行させて貰う。

二日間ずっと、痩せこけた農夫が辛そうに脱穀する風景や衛生状態の悪い町を見てきたために、モラト・リリフイムへの期待はゼロと言つても良かった。だが、南西部よりこの領地に入った私は目を疑った。

この領地では、もう脱穀が終わっていた。そして普通の農業ならばここから二毛作を始める筈だが、どれだけ畑を休めようか、普段私が食べない野菜を作る計画、などの話をしていたので。

ナタリーの考えたトレイルの農地改革は既に完成しているのかもしれない。

私は、まずこの村から調査を開始することにした。

「すまない。少し聞きたい事があるんだが」

「うん？ 旅の人かい？ どしたんだ」

「なぜ、脱穀が終わっているのです？ ここに来るまでの農村部ではまだ脱穀をしていたので」

「ああ、あれがある御蔭だよ。脱穀機」

脱穀機？ そんな物は聞いたことが無い。だが、農夫の案内で向かえば、何やら棘の生えた拷問器具のような物が上を向いている。

「なんですか？ あれ？」

「脱穀機だよ。あるのは、この領地と北の一部らしいけど、良く知らん」

「……これは今年からあるのですか？」

「いや、いつだったかな？ 三年くらい前か？ 領主様が全部の農村に一台ずつ貸して下さったんです」

三年前？ トレイルがパトロンを得たのは、この一年の間じゃないのか？ でも、もしかしてそれ以前から交友があった可能性が……

「他の領地は豊かじゃないって聞くけど、どうなんですか？」

「そうですね。実りも良くないし税が厳しいらしいですよ。それで領主が裕福な暮らしをしてると聞いています」

「ほく、そかそか。ダイナモ様の時から税はそんなに苦しくないかな。モラト・リリフームに生まれて良かった」

私は、この村を調査しようと考えた。

「すみません。一つお願いがあるのですが」

「なんだ？」

「この村に泊めて貰えませんか？ 実は町に行く旅費が少なくて」

「あー、お前さん。若くて良い体つきだから農作業手伝ってくれるなら良いぞ。一週間後に町に豚さんと牛さん売りに行くからその時行こうか」

「ありがとうございます」

私は、この村での調査が始まった。

そこでナタリーの考えていた推測の多くが裏切られる事になる。

成り上がり騎士・シュタイニーの調査レポート・その一（後書き）

成り上がりの男爵騎士さん。結構、外面は良いけど、身内^{ナタリー}に対してはぶっきらぼうです。そう言う二面性のキャラが欲しくなりました。

成り上がり騎士・シュタイニーの調査レポート・その二(前書き)

成り上がり騎士の調査は、始まった。

成り上がり騎士・シュタイニーの調査レポート・その二

私は、泊めてくれている農夫とその奥さんと共に夕飯を囲んでいる。普通の農家の夕食が、黒パン、豆の薄味スープだとするならば、この村の普通は、白いパン、野菜のスープ、ハムもしくはソーセージにサラダ。飲み物は乳である。

今は四日目。本当に同じような食事が続く。

「……あの、客と言うことで豪勢なのですか？　でしたら申し訳ない」

初日にそのメニューを見たときの私の反応はこれだ。しかし、夫婦は揃って笑いかけて答える。

「それでも俺達の食事は質素だぞ」

「いや、これは良い宿並みの食事ですよ」

「あらあら、お世辞が上手だ事」

嘘ではない。騎士と言う事で多少の不味さや飢えを耐えられるように訓練されているために黒パンが至高と思い込んでいたが、違うのだ。

黒パンが美味しく感じるのは、あの薄味の豆のスープでは満足できないために、硬いパンをただひたすらに噛んで得る満足感だった。それに対して、スープの味は、塩コショウ、ほんの少しのベーコンが良い味を出している。それにふわふわのパンが甘く感じるのだ。飲み物の乳は羊らしいが、癖があるけど美味しい。他の料理も全部の食事が多い。

本当に量が多い。このまま冬に向かって大丈夫か心配になる。

「それにしても、冬場もこのような食事を？　　備蓄は大丈夫なので
すか？」

「備蓄は、数年前から雑穀から小麦に変えていて、雑穀少し、小麦
が殆どという状態だぞ。他の村でも最近では餓死者や身売り話は聞か
ないな」

「……それは良い話ですね」

「そうね。でも、ここは領地の境界に近いから身売りの話は良く聞
くわ」

「ええ、労働力となる男性は、適正が図られて魔法兵になったり、
単純な労働力として王都周辺で開拓団をするか、鉱山に行きますね。
若い女性は、学があれば、貴族への奉公。ない場合は、娼館に売ら
れます。一番酷い場合は、奴隷という顛末です」

暗い話になってしまった。

だが身売りの場合、一番良いのは、男は魔法兵。女は貴族への奉
公だ。給金は良く、扱いは平民より上になるためだ。魔法兵は兵役
の三十年をこなせば、更に金が支払われ、故郷に帰れる。貴族への
奉仕も同様だ。例外を除いた身売りは、前金ありの終身雇用制度の
ようなもので、過重労働への配慮も必要となる。まあ、配慮してい
るのは一部の者だけだがそれを言うところが無い。

一番最悪なのは、男女ともに奴隷だ。前金だけ、人としての尊厳
などない。

奴隷制度は基本ないが、西部だけは違う。貴族が多い分、領主が
多い。その領主たちが結託して困窮した農民の子どもを買い取り、
様々な嗜好を満たす。まさに腐敗した政治だ。

ナタリーの引っ張り出したとんでもない案件は、その人身売買に
直接侯爵が係わったためだ。踏み込んでみて見た光景はおぞましい。
人の所業じゃない。思い出しだしたくもない。

「どうかしたか？ 暗い顔して」

「いえ、自分で言っておきながら嫌な話ですね」

「そうかそうか。だが、むしろ貴族に身売りしたいって輩もいる話だぞ」

「はあ？ それはどこに」

「ここの領主。女の子だからな。男貴族より安心だ。それに遠出する時は、途中の村々に訪れて挨拶するんだ。『何時も視察に来れなくてごめんなさい。お加減は？』だとさ。ダイナモ様の意思を継いで良い領主になってくださるだろう」

「そうね。何時までもこんな幸せな日が続けば良いわね」

夫婦そろって楽しそうにしていた。

聞いたのは、このモラト・リリフームでは領民が身売りするほど困窮していない点だ。むしろ領主への身売り自体が優良就職先と考えていた。

そしてご飯が美味しい。こんな美味しいご飯が今まで続いているためにもう騎士の食事には戻れないかもしれない。ここの農民になりたい。

翌日は、畑仕事の手伝い。鍬を持って畑を耕し、雑草を抜く。酪農をやる農家が麻袋に糞を詰めて運ぶ姿もう慣れた。

最初に肥貯の臭いを嗅いだ時、戦場の血生臭い匂いとは違い、酷い生理的嫌悪の臭いに卒倒しかけた。だが、慣れれば問題ない。近づかなければ問題ない。あれの中身を畑に入れて、土と混ぜて作物を作ると成長が良いらしい。ここは専門的な内容で良く分からない。詳しい説明の入った指導書は村長が管理しているために見せては貰えないらしい。残念だ。

「ふう。終わりましたよ」

「はい。ごくろうさん。今日はホワイトシチューだぞ。にんじんが
とろとろで美味いらしいぞ」

「それは楽しみですね」

「こんにちは。お変わりありませんか？」

私達が農夫の家に戻る途中、後から声を掛けられた。振り返ると、
馬に乗った軽装の男性だ。彼のような人が他に六人。彼らは、巡回
中の騎士らしい。領内の治安維持のために村々の街道を移動し、不
審な点を探す。そうした地道な活動で治安が良いようだ。

「タイニーさん、明日にはこの村出るんですか？」

「はい、馬車に乗せて貰って町まで。そこから一度中央の町へ」

「良いですね。私はこの辺で巡回ずつとしているので中央の町に行
く機会が無いんですよ。是非、創作料理店行って味を教えてください
いね」

「はい。所で、この巡回の仕事って何時からやっているんですか？」

「うん？ 私が入った時にはやってました。隊長、何時からですか
？」

「ダイナモ様が統治を始めてすぐから十数年前からだな。慣れる
まで苦労した。中には反発する騎士も居たが、目に見えて治安が良
くなるから何時しか仕事にやりがいを持てるようになった」

「それは良かったですね。最近は何か、ありましたか？」

「最近なんて、街道にイノシシが出て馬車に当たるくらいだ。それ
を俺らが仕留めて村でイノシシ食うんだ。酒を飲みながら」

楽しそうに騎士の隊長と若い騎士の話。どうやらダイナモは治安
維持に関して就任当初からかなり尽力していたらしい。外部への兵
力よりも内部の維持に対する配分でこの領地は安定しているのだろ
うと私見を入れてみる。

「そうじゃ、うちらもシチューのあと酒を飲むか？　ぬるい麦酒」

「良いんですか？　私なんかが頂いて」

「お前さん。若いのに良い仕事したからな。騎士のみなさんも飲むかい？」

「本当ですか！？」

「駄目だ。仕事が終わってから。非番の時にでも飲むぞ」

そう言って去っていく騎士たちを見送る私達。この牧歌的な雰囲気は私は好きだ。

この一週間で見た事を詳細に荷物の紙とインクに書き残す。脱穀機の出所は、領主の貸出だが製造は工匠会が主体らしい。一度伺ってみる必要があるそうだ。

肥貯や肥料と言った物の御蔭で農作物の生育は良好らしい。だが、どこでそんな知識を仕入れたのだろうか。トレイルは、最低三年前から関わりを持っていたと推測される。

治安は良く、身売りの話も殆どない。食べ物も美味しく定住したくなる。子どものお守で騎士をやるくらいなら、騎士の称号を捨ててこのまま逃亡したいという衝動に駆られてしまうほどだ。

最後に、農夫夫妻は温かい人だが、子どもが居ないのが気になったのは、私情を挟み過ぎたのだろうと思う。

私は紙面を見直し、長く息を吐き出す。うむ。殆ど日記だがナタリーならば解読してくれよう。

今日は早々に寝て、明日の朝早くに私は馬車で町へ向かうのだ。
お休み

成り上がり騎士・シュタイニーの調査レポート・その二（後書き）

会話文の少ないほぼ一人語りのようなシュタイニーさん。偽名はタイニー。

成り上がり騎士・シュタイニーの調査レポート・その三（前書き）

秋の成り上がり騎士さんの旅は終盤。殆ど食い道楽で終わりそうですが。

成り上がり騎士・シュタイニーの調査レポート・その三

私は、この調査を初めて三週間目に入る。これまで色々な場所をゆつくりと巡って聞き込みをしたが、町に近づく程に領主仕えの侍女長の創作料理のお店・ニーレ・ストールの話を詳しく聞けた。

途中に寄った村でもその料理を食べる事が出来たのだが、王都にはない独特な料理。そして、王都では栽培されていない野菜を使っているために物珍しさが際立つ。乳製品の多いこの領地では乳製品をふんだんに使ったカルボナーラという料理は、とても濃厚で印象深かった。

食べ物以外の話をすれば、どの農村も豊作で脱穀機一台を村で利用して楽しんでいた。時に、村長に領主からの農業指導書を見せて貰えるように願ったが、駄目だった。無理に見せて貰うわけにもいかないし、あまり押しが強いと不信がられる。今は諦めよう。

工匠会にも寄り、脱穀機の製造者の事を詳しく聞こうと思ったがどうやら特許が関わっているようだ。一介の騎士には特許と言うものが良く分からなかったために事務の女性が丁寧に説明してくれた。

特許とは、大陸協定によって保護されるべき知的財産の事だ。無断でその技術を盗用すれば、様々な術が発動し、それを阻止するのだとか。

ここら辺は魔法や神学の領域だから私は手出しができない。特許の発案者や特許保持者の情報も開示して貰えなかった。また販売は領主にのみ納品しており、領主もしくは領主と取引している商人に掛け合わないと手に入らないようだ。

「……ここまで来るとどうもきな臭いな」

農業指導書の部外者の閲覧は禁止されていること、脱穀機を取り巻く全体の様相。どうも核心が隠匿されている気配がする。また行く先々で、ダイナモ様のご加護。死しても我らの事を気遣ってくれている。という言葉を目にするが、前領主のダイナモの行った治安維持や組織の効率化は隠匿されている気配が無い。何やらトレイルとダイナモに深い関係があるように思えるのだが、やはり頭を使う仕事はナタリーに任せるとしよう。

私は、今回の旅の最終目的と定めた直営店・ニーレ・ストールへと足を踏み入れた。

外観は、普通の酒場。内部に入って一番最初に驚いたのは、奥にメニューが書かれていたことだ。今までの農村部では村長など一部の人間が農業指導書を読めるのを確認したが、ここでは全員がそれを見ているのだ。

普通の酒場は、店員にその日のお勧めを聞く。これは非効率的だが文字が読めない者が多いためにそれが普通なのだ。

「すまない」

「はい？　いらっしゃいませ、なんででしょう」

店員の女性がテーブルの食器を持った後こちらに振り返る。

「何故、文字がある？」

「あっ、はい。文字が分かりませんか？　それでしたら上から順番に料理の説明をしますが」

「頼む」

「上から順番に、一番上のラーメンは、スープにパスタ麺を付けた

料理で温まりますよ。他にも……」

中々珍しい。文字を読めないふりをしたが、店員の説明でより料理の内容が想像し易くなる。

「一つ聞いて良いか？」

「はい。なんでしょう？」

「どうして皆、あれが読めるんだ？ 普段彼らはどのような事をしているのだ」

「さあ？ でも皆さん。値段は分かるのと周囲の言葉と料理でどれか確認している人が多いですよ」

「……そうか。では、私はロールキャベツと煮込みハンバーグとピザを頼もう」

「ありがとうございます。レシピはどうします？」

「レシピ？」

「はい。料理の作り方を記した物です。こちらが今注文した料理のレシピになります」

エプロンのポケットから取り出した物に私は驚く。薄いひらひらとした物。紙だ。王都とこの領地が紙産業の主流となっているが、王都でもこのような店には浸透していない。

「……全種類のレシピを貰えるか？ 知り合いは文字を読めるのでそいつに料理を作って貰うために」

「はい。分かりました。こちらをどうぞ」

更に数枚の紙が渡された。全部に目を通すと、簡単な単語と単位と絵。なるほど、文字を読めない者でも、この程度ならある程度理解は出来るだろう。また分からなければ、農村部の年長者に聞けば良いかもしれない。本当に良く出来た場所だ。

しばらく店内を観察し、出てきた料理に舌鼓を打つ。これもまた珍しい料理だ。素手手食べる料理やひき肉の塊を煮込む料理などあまりない。そしてどれも美味しい。これは帰ってナタリーに食べさせたいと思う。

「三度みたびすまない。この料理に使われている野菜は私の地域では作っていないんだ。もし種があれば分けて欲しいんだが」

「えっと……種は無いですね。申し訳ありません」
「そうか……」

私は落胆した。ピーマンが無い。他の料理のレシピを見れば、ニンニク、ネギ、ナスと滅多に出回らない食材がある。

「では、お会計を済まそう」

「はい。お土産に如何ですか？」

「……蜂蜜か？　そこまで余裕はないぞ」

「いえいえ、違います。メイプルシロップという商品です。女性の方が気に入ると思います。こちらはそのレシピとなります」

「では、二本貰おう」

私は満足してその日宿に帰った。今回の調査はこれで終わりと思っていなかったが、まさか人に後を着けられようとは。

町の裏路地へと入り、追手を撒こうとする。現役騎士がこんな暗殺者紛いの行為をするなどと苦笑を浮かべつつ、移動するが――相手が上手だった。

「何とか撒いたようだな」

「それはどうかな？」

「っ!？」

フード付きのコートが視界の端に見える。顔まで隠していたが声からして女性だろう。背中にひんやりと硬いものが押し付けられている事から何らかの得物を持っている事が予想出来た。

「貴様は何者だ？」

「……ただの旅人だ。遠方より噂を聞いてここまで来た」

「では、なぜ最近領地内を探るような行動を取る？」

「好奇心だ」

「荷物を降ろせ」

私は、ここで迷う。拒否して戦闘した場合、どうなるかだ。下手をすれば怪我を負うだろうが女性一人を相手にして負けるつもりはない。ここで大人しく受諾して隙を見て逃げるのも考えた。

だが、すぐ近くの路地からすっと新たに二人コートを着た男が現れた。これはいよいよ下手な博打を打てなくなってきた。

「分かった」

俺が静かに荷物を降ろし、手を頭の後ろに組む。

警戒して近づいてきた二人は、地面の荷物を取り、中身を確認していく。私の旅装の内側にある護身用のナイフを奪い、服から全ての物を奪っていく。

また一人が私の荷袋の奥から隠していた物を見つけた。

「こ、これは、蜂の紋章！？ 身分は騎士！」

蜂の紋章は、蜂の先兵・ハニールを象った騎士の紋章。しかも、これは銀のエンブレムだ。最高位が將軍職の白金だがそれに次いで王家、三大貴族直属の金。更に下に銀、銅と続く。この銀とは王都の精鋭騎士に相当する印。下手な行為は不敬罪になり、現在の行動

はそれに当てはまる。だがこの場に居る三人は、一瞬目配せをして、更に裏路地から三人が取り囲む。

「只のごろつきではなさそうだな。何者だ？」

「それに答える義務は無い。何故、騎士がこのモラト・リリフィムを嗅ぎまわる。どこの回し者だ」

「……」

「答えろ」

背中に当たる刃物が僅かに押し込まれる。これはそろそろ腹を括った方が良いか。

「私は、シュタイナー・ウィスプ。王都第二師団の騎士だ。爵位は男爵。この度の調査は、王都の次席文官殿の依頼で、休暇の片手間でやっている」

「では、貴殿はこの周辺の領主の手の物ではないと。それを証明するには？」

「その蜂の紋章がそれである。銀の蜂は王都の騎士の明かし。領主仕えの騎士は銅の蜂。よって私は全くの無関係」

「依頼主が次席文官……更に銀の蜂」

女性は悩んでいるようだ。王都の文官の高潔さは有名だ。中央貴族と教会派との間でも政治を滞りなく行う姿は有名だ。そして私の身分である銀の蜂自体も一種の特許の一種らしい。無断では複製できないために絶対の身分証明になる。

「失礼した。引け！」

女性の一声を受けて、蜂の紋章と金以外の全てを持って撤収された。命があるだけまだマシだ。

「こちらは名乗った。そちらも名乗って貰おうか」

「我らは、深森の者。森の奥底から怪しいネズミを狙う者たちだ。我らは様々所に存在する。それを忘れるな」

「それはどういう……」

ふっと刃物の感触が消え、振り返ると既に女性は路地へと消えていた。

不思議な体験だ。これはつまり、広い情報網と組織力を持つ。という意味だろう。そうでなければ、私がここ最近の行動を知る由もない。

この領地全部。もしくは、他の領地にまでこのような集団が存在するかもしれない。

組織の効率化を重視していたダイナモが作り上げた諜報機関だと考えても良いだろう。大きな収穫だがこれはしゃべれないだろう。意味深な言葉を吐き、見逃すと言うことは下手に情報を吐露すれば、私のみならず周囲にまで被害が及ぶだろう。

私は、それからほどなくして王都へと戻った。

「どうだった？ モアト・リリフィムには何か面白いものがあった？」

「ああ、農民たちが皆優しかった。近年は豊作らしいな」

「……それだけ？」

「ああ。後は無いぞ」

「あんた、一か月本当にのほほんと過ごしてんじゃないわよ！ 調査をしない調査を！ 全く」

かなりご立腹のナタリーに迎えられたがここは彼女を守るために黙っていることにした。

後日、私の元に荷物が届いた。差し出し名は――深森の者。

中には、私から奪った調査報告書以外の荷物全てとお詫びの品として新しい料理のレシピと作物の種と生育法を記録した用紙。更にメイプルシロップの瓶が一本多い。

手紙には『勝手ながらあなたの身边を調査しました。あなたに危険性が低いと判断しました。お詫びとして種と育て方とメイプルシロップをお送りします。どうか、周りの方に料理を振る舞ってください。ただし、モラト・リリフィムの事は心の奥底に』と書かれていた。

改めて、ダイナモの作り上げた深森の者という組織の力に戦慄を覚える。何もしない分には害はないようだ。そして料理に関してはむしろ拡げて欲しい節が見受けられる。

私は、騎士の宿舎の裏庭の許可を得て畑にした。この時期では取れる野菜は少ないが来年の夏にはピザを食べようと心に誓う。

ナタリーには、差し入れとしてレシピを元にメイプルシロップを練り込んだマーブルパンを渡したら今まで見たことが無いほど蕩けた表情をしていた。

「こんなに甘いパンは食べた事が無いわ。これ高いんでしょうね」
「知り合いから分けてもらったんだ。気に入って貰えて良かった」
「ええ、蜂蜜のようだけど風味が違うわ。って言ってもあんまり蜂蜜食べた事ないけど」

「一瓶譲ろう。それ自体も中々面白い風味だぞ」

「えっ！？　良いの嬉しいな。いつも甘いものが食べられる」

そう言って喜ぶナタリーと午後のお茶に興じる秋の納税時期。もうじき激務でナタリーの機嫌が悪くなり始めるのだ。少しぐらい矛盾が向かないように裏で手を回さなくては。

成り上がり騎士・シュタイニーの調査レポート・その三（後書き）

はい、少しフラグ回収。第10部での会話に何気に出てきた『深森の者』あれって諜報機関だったんです。普通に読んだら、狩人さんたちと思うでしょうね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3814y/>

理論屋転生記

2011年12月1日23時18分発行